

354
324

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



特223
273

文學士 阪口玄章編



平家物語新抄



春陽堂發行

はしがき

一、本書は高等諸學校の教科書用として編纂しました。

一、平家物語鈔本は従來とも随分世に出てゐますので、私は體裁を變へて、前篇後篇の二部に分けてみました。前篇は大體平家物語の筋を通つて拔出し、後篇は直接に本筋から關係の薄い挿話及び女性に關する説話を纏めてみました。

一、頭註は板書の煩を省く程度のものに止めて、詳細は教官各位の補足に願ふことゝしました。

一、隨所に挿繪地圖をいれて學習考の便をはかりました。

一、直接教授にあたられてみると幾多の缺陷がお目に止ることゝ思ひますが、どうか大方の指示を惜ま
れざらむことを希ひます。

一、本書の校正に當つて吉田學士の御助力を受けました。厚く感謝の意を表します。

昭和八年九月

著者しるす

平家物語新鈔

目次

前篇

物	競	有	少	足	烽	教	御	禿	殿	祇
		王	將				興		上	園
		島	都						閣	精
怪		下	還	摺	火	訓	振	童	討	舍
.....
一	三〇	三五	三〇	二六	二〇	一四	一〇	八	四	三

富士川	三
入道逝去	六
篠原合戰	六
實盛最後	九
福原落	七
老馬	七
遠矢	八
先帝御入水	八
後篇	八
鷓鴣環	九
緒間	九
猫間	九
紅葉	九
月見	一〇
妓王	一〇

小督	一
海道下	一
千手	一
横笛	一
女院御出家	一
小原御幸	一
六道	一

新選平家物語

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。奢れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を問らふに、秦の趙高、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政にも従はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡びにし者共なり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、是等は奢れる事も猛き心も、皆執々なりしかども、間近くは、六波羅の入道、前の太政大臣平の朝臣清盛公と申し、人の有様、傳へ承るこそ、心も詞も及ばれぬ。その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原の親王九代の後胤、讚岐の守正盛が孫、刑部

前篇

祇園精舎

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。奢れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を問らふに、秦の趙高、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政にも従はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡びにし者共なり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、是等は奢れる事も猛き心も、皆執々なりしかども、間近くは、六波羅の入道、前の太政大臣平の朝臣清盛公と申し、人の有様、傳へ承るこそ、心も詞も及ばれぬ。その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原の親王九代の後胤、讚岐の守正盛が孫、刑部

只春の夜の夢
 一生是風前之
 燭萬事皆春夜
 之夢往生講式
 に出づ
 梁の周伊（平家）
 朱弄（按可作）
 物語考證（平家）
 桓武天皇第五
 天皇云々（原）
 高見王（高）
 高望王（高）
 王維國香（高）
 清盛（忠）
 正盛（忠）
 盛度（忠）

得長壽院（崇）
 上皇の承元年
 供養の長門本
 一尊の御佛
 聖觀音（丈）
 五節（五）
 本朝の月令（五）
 豐明（明）
 御酒の節會（明）
 らむを云ひ（明）
 宴（赤）

の義。十一月廿
 試演あり、辰の
 日に豊明節會あ
 り。後には大嘗
 祭の時のみ行は
 る。盛衰記には「身
 を全うして君に
 仕ふるは忠臣の
 法といふ事あり
 と云ひ慣しあり
 とは云ひ慣しが
 意あるといふ程の
 意か。」



腹巻

絃袋

卿忠盛の朝臣の嫡男なり。かの親王の御子、高視の王無官無位にして失せ給ひぬ。その御子高望の王の時、始めて平の姓を賜ひて、上總の介になり給ひしより以來、忽ちに王氏を出でて人臣に連る。その子鎮守府。將軍良茂、後には國香と改む。國香より正盛にいたるまで六代は、諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をば未だ許されず。

殿上の闇討

然るに忠盛未だ備前。守たりし時、鳥羽の院の御願、得長壽院を造進して、三十間の御堂を建て、一千一體の御佛を居奉らる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には關國を賜ふ可き由仰せ下されける。折節但馬の國のあきたりけるをぞ下されける。上皇なほ御威の餘りに、内の昇殿をゆるさる。忠盛三十六にて、始めて昇殿す。雲の上人はを猜（おぼ）みいきどほり、同年の十一月二十三日、五節豊の明の節會の夜、忠盛を闇討にせんとぞ議せられける。忠盛此のよしを傳へ聞きて、我右筆の身

にあらず、武勇の家に生れて、今不慮の恥にあはん事、家の爲身の爲心憂かるべし。詮する所、身を全うして君に仕へ奉れと云ふ本文有りとして、かねて用意を致す。参内の始より、大きな鞆巻を用意し、束帶の下に、しどけなげに差しほらし、火のほの暗き方に伺ひて、やはら此の刀を抜出して、鬢に引當てられたりけるが、餘所よりは氷などの様にぞ見えける。諸人目をすましかる。又忠盛の郎等、本は一門たりし平の木工。助貞光が孫、新の三郎太夫家房が子に、左兵衛の尉家貞と云ふ者あり。薄青の狩衣の下に萌黄威の腹巻を著、絃袋つけたる太刀脇挟んで、殿上の小庭に畏つてぞ候ひける。貫首以下奇みを成して、うつほ柱より内、鈴の綱の邊に、布衣の者の候ふは、何者ぞ狼籍なり。とう／＼罷り出でよと、六位を以て言はせられたりければ、家貞畏つて申しけるは、相傳の主の備前。守殿の、今夜闇討にせられ給ふ可き由承つて、其のならん様を見んとてかくて候ふ也。えこそ出づまじとて、又畏つてぞ候ひける。是等をよしなしと思はれけん、其の夜の闇討無かりけり。忠盛又御前の召に舞はれけるに、人々拍子を替へて、伊勢瓶子は醜甕なりけりとぞ

腹巻二南北朝以
前は胸丸腹當を
汎稱す二内
殿上の小庭二内
裏圖二參照二所
貫首二藏人所の
頭を貫首とい
ふ。
うつば柱一清涼
殿の南神仙門
の西にある中空
の柱（雨樋）をい
ふ。
鈴の綱二殿上
横敷の坤角の柱よ
たり校書殿に渡し
て網小舎人をつ
ぶ時に用ふ。
伊勢の瓶子は醜
なり酒之器也、勢
盛州之所作、甚
惡不勝貯酒
可用醜醜酒
（考證）
紫宸殿の御後二
御後云北床こ
拾芥抄に出づ
聖賢障子の背な
り。
主殿司二尙殿一
人典殿二人、女

はやされける。かけまくも忝く、此の人々は、柏原の御末とは申しながら、中比は都の住居もうとくしく、地下にのみ振舞ひなつて、伊勢の國に住國深かりしかば、其の國の器に事寄せて、伊勢平氏とぞはやされける。其の上忠盛の目の眇まれたりける故にこそ、加様には拍されけるなれ。忠盛何にすべき様もなくして、御游も未だ終らざる前に、御前を罷り出でらるゝとて、紫宸殿の御後にして、人々の見られける所にて、横たへさゝれたりける腰の刀をば、主殿司に預け置きてぞ出でられける。家貞待受け奉りて、さて如何候ひつるやらんと申しければ、角とも謂はまほしうは思はれけれ共、正しう云ひつる程ならば、やがて殿上までも斬上らんとする者の面魂にてある間、別の事なしとぞ答へられける。五節には、白薄様しゆぜんじの紙、卷あげの筆、巴かいたる筆の管などと云ふ、様々加様に面白き事をのみこそ歌ひ舞はるゝに、中比太宰の權の師季仲の卿と云ふ人有りけり。餘りに色の黒かりければ、時の人黒師とぞ申しける。此の人未だ藏人の頭なりし時、御前の召に舞はれけるに、人々拍子を替へて、あな黒々黒き頭かな。如何なる人の漆ぬりけん

濡六人等あり、
膏沐の宮女の盛官を
司節仙女の盛官を
記薄透き通の衣
の紙相似染
がの紙の相似染
紫の紙の相似染
すの紙の相似染
貌の紙の相似染
きの紙の相似染
納の紙の相似染
筆の紙の相似染
たの紙の相似染
昔の紙の相似染
の紙の相似染
すの紙の相似染
との紙の相似染
太宰の紙の相似染
權の紙の相似染
一の紙の相似染
多の紙の相似染
季の紙の相似染
經の紙の相似染
播磨の紙の相似染
米の紙の相似染
五の紙の相似染

とぞ拍されける。又花山の院の前の太政大臣忠雅公、未だ十歳なりし時、父中納言忠宗の卿におくれ給ひて、孤子にておはしけるを、故中の御門の藤中納言家成の卿、其の時は、未だ播磨の守にておはしけるが、聒に取つて、はなやかにもてなされしかば、是も五節には、播磨米は土賊草か、棕の葉か、人のきらを磨くは、とぞはやされける。上古には加様の事ども多かりしか共、事出でこず。末代如何在らんすらん、覺束無しとぞ人々申しあはれける。案の如く五節果てにしかば、院中の公卿殿上人、一同に訴へ申されけるは、夫れ雄劍を帶して公宴に列し、兵伏を賜つて宮中を出入するは、皆是格式の禮を守る、綸命由ある先規なり。しかるを忠盛の朝臣、或は年來の郎従と號して、布衣の兵を殿上の小庭に召しおき、或は腰の刀を横たへさいて節會の座に列る。兩條希代未だ聞かざる狼藉なり。事すでに重疊せり、罪科尤も逃れがたし、早く殿上の御簡を削つて、闕官停住行はる可きかと、諸卿一同に訴へ申されければ、上皇大に驚かせ給ひて、忠盛を御前へ召して御尋ねあり。陳じ申されけるは、先づ郎従小庭に伺候のよし、全く覺悟仕らず、但し近日人々相巧ま

鞘卷



る旨、子細あるかの間、年來の家人、事を傳へ聞くかに依つて、其の恥を扶けんがために、忠盛には知らせずして、竊に參候の條、力及ばざる次第なり。若し咎在る可くば、かの身を召し進す可き歟。次に刀の事は、主殿司に預け置き候ひ畢ぬ。是を召出され、刀の實否に依つて、咎の左右行はる可き歟と申されたりければ、此の儀尤も然る可しとて、急ぎかの刀を召して叡覽あるに、上は鞘卷の黒う塗つたりけるが、中は木刀に銀箔をぞ押いたりける。當座の恥辱を通れんが爲に、刀を帶する由顯すといへども、後日の訴訟を存知して、木刀を帶しける、用意の程こそ神妙なれ。弓箭に携はらん程の者の謀には、最もかうこそ在らまほしけれ、兼ねては又郎從小庭に伺候のこと、且つうは武士の郎從の習ひ也、忠盛が咎には非すとて、却つて叡威に預つし上は、敢て罪科の沙汰は無かりけり。

禿童

かくて清盛公、仁安三年十一月十一日、年五十一にて病にかされ、存命のため

降る雨の國土を
濕す四方共下
流無量華卒
充治法華經
藥論華別
英論華別
名山三條院
華山三條院
西園寺三條院
花山寺三條院
門今出川七
清華平大納言
小舅時忠子時
忠從位時忠子時
清盛二室宗盛
門院及比宗盛
の母及比宗盛
人非人八部衆
夜又緊那羅を
或は緊那羅を
疑人非人とも
禪定門等の意門

にとて、即ち出家入道す。法名をば淨海とこそつき給へ。其の故にや宿病たちどころに愈えて、天命を全うす。出家の後も、榮耀は猶盡きすとぞ見えし。自ら人の隨ひ付き奉る事は、吹く風の草木をなびかす如く、世の仰げる事も、降る雨の國土を濕すに同じ。六波羅殿の御一家の君達とだに云へば、華族も英雄も、誰肩を雙べ、面を向ふ者なし。又入道相國の小舅、平大納言時忠。卿の宣ひけるは、此の一門にあらざらん者は、皆人非人たるべしとぞ宣ひける。されば如何なる人も、此の一門に結ばれんとぞしける。烏帽子のためやうより始めて、衣紋のかき様に至るまで、何事も六波羅様とだに云ひてしかば、一天四海の人皆之を學ぶ。如何なる賢王賢主の御政、攝政關白の御成敗にも、世に餘されたるほどの徒者などの、かたはらに寄合ひて、何となう誹り傾け申す事は、常の習ひなれども、此の禪門世盛の程は、聊かゆるがせに申す者なし。其の故は入道相國の謀に、十四五六の童を三百人洩つて、髪を禿に切りまはし、赤き直垂をきせて、召使はれけるが、京中にみちくして、往反しけり。自ら平家の御事、あしざまに申す者あれば、一人聞出さぬ程こそ在りけ

其の門に入りたる人をも亦然か稱す。禁門を出入す。恩澤勢力則又過之、出入禁門不問、京師長吏爲側目、長恨歌傳。

れ、餘黨に觸廻し、彼の家に亂入し、資財雜具を追捕し、其の奴を搦めて、六波羅殿へゐて參る。されば目に見、心に知ると云へども、詞に顯して申す者なし。六波羅殿の禿とだにいへば、道を過ぐる馬車も皆よきてぞ通しける。禁門を出入すといへども、姓名を尋ねらるゝに及ばず。京師の長吏是が爲に目を側むと見えたり。

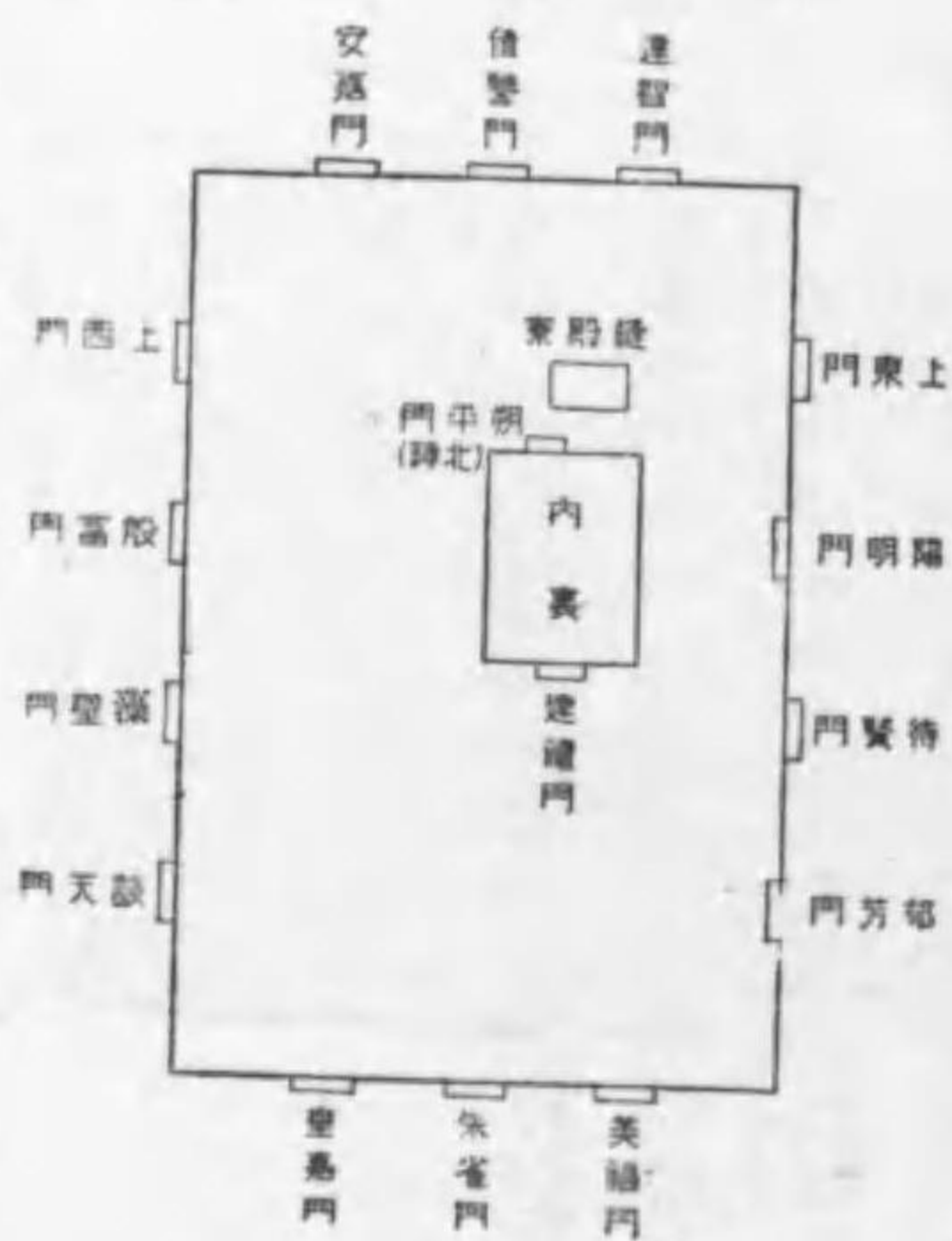
御輿振

加賀の守師高。西光法師の子。目代にして私に代理の守に。置くもの。近藤判官經。十禪師の客人、八王寺、何れも山王上社、修學院。梅村。上賀茂の北。東北院。一。東院。一。南。し。大衆。一。位。も。な。き。凡。下。の。衆。

さる程に山内には、國司加賀の守師高を流罪に處せられ、目代近藤判官經を禁獄せらるべきよし奏聞度々に及ぶといへども、御裁許なかりければ、日吉の祭禮を打留めて、安元三年四月十三日の辰の一點に、十禪師權現、客人、八王寺、三社の神輿を飾り奉つて、陣頭へ振擧げ奉る。さがり松、きれ堤、賀茂の川原、河合、梅たゞ、柳原、東北院の邊に、神人宮仕、しら大衆、專當満ちくゝて、いくらといふ數を知らず。神輿は一條を西へ入らせ給ふに、御神寶天に耀いて、日月地に落ち給ふかと驚かる。是に依つて源平兩家の大將軍に仰せて、四方の陣頭を堅めて、大衆

徒。專當。園城寺にある職名にて下業の者。陽明門云々。内裏圖参照。

防ぐ可き由仰せ下さる。平家には、小松の内大臣の左大將重盛公、其の勢三千餘騎にて、大宮表の陽明・待賢・郁芳、三つの門を堅め給ふ。弟宗盛、知盛、重衡、伯父頼盛、教盛、經盛などは、西南の門を堅め給ふ。源氏には大内守護の源三位頼政、郎等には、渡邊の省・授を先として、其の勢僅に三百餘騎、北の門縫殿の陣を堅め給ふ。



所は廣し、勢は少し、まばらにこそ見えた。りけれ。大衆無勢たるに依つて、北の門縫殿の陣より神輿を入れ奉らんとするに、頼政の卿さる人にて、急ぎ馬より飛んでおり、甲をぬぎ、手水嗽して、神輿を拜し奉らる。兵ども、皆此くの如し。頼政の卿より大衆の中へ使者を立て、いひ送らるゝ旨あり。其の使は渡邊の長七唱とぞ聞えし。唱其の日の裝束には、きちんの直垂に、小櫻を黄にかへしたる鎧著て、赤銅作りの太刀をはき、二十四さいたる白羽の矢お

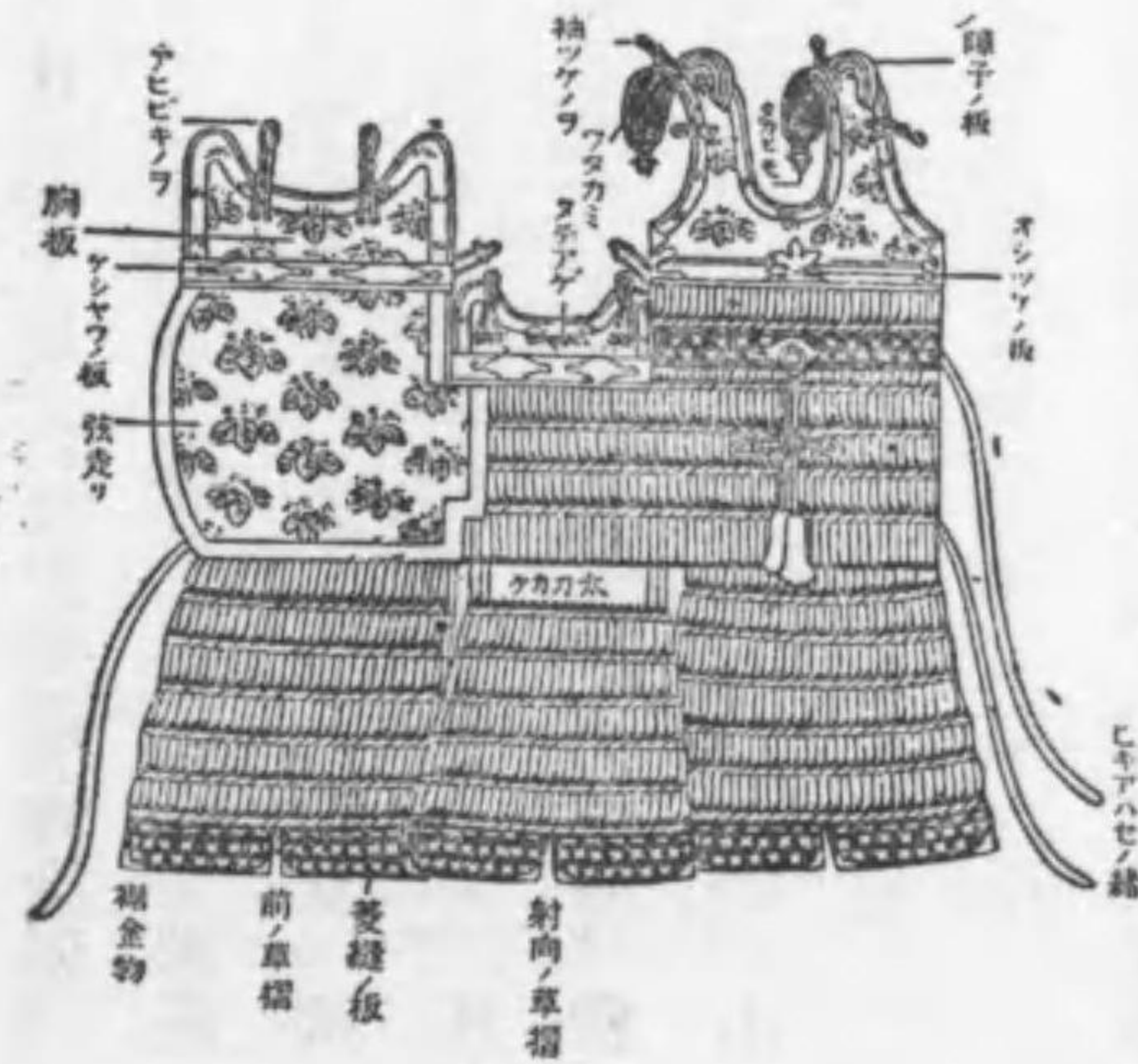
きちん萌黄の黄がちの色。小櫻を黄にかへしたる。小櫻革

を萌黄木地に黄に染めたる草の緒、此の高紐に引きかけ結びて兜を背に負ふ料とす(鑑圖参照)

日垂り顔に得意の顔。醫王薬師如来比叡山一乘止觀院の本尊。

の山王最澄が唐の山王國清寺の大神祠に擬し比叡山小比叡の神を奉祀せり。名づけて奉祀せり。

ひ、滋藤の弓脇に挟み、甲をば脱いで高紐にかけ、神輿の御前に畏つて、暫く静られ候へ。源三位殿より、衆徒の御中へ申せと候とて、今度山門の御訴訟、理運の條勿論に候。御裁斷遅々こそ、餘所にては遺恨に覚え候へ。神輿入れ奉らん事子細に及び候はず。但し頼政無勢に候。開けて入れ奉る陣より入らせ給ひなば、山門の大衆は目だり顔しけりなど、京童部の申さん事、後日の難にや候はんすらん。あけて入れ奉れば、宣旨を背くに似たり。又防ぎ奉らんとすれば、年來醫王、山王に首を傾けて候ふ身が、今日より後、長く弓矢の道に別れ候ひなんす。彼といひ是といひ、かたぐ難治のやうに覚え候。東の陣頭をば、小松殿の大勢にて固められて候。其の陣より入らせ給ふべうもや候ふ



三塔一の僉議者西塔は東塔、西塔は横川なり、僉議者とは知慧者といふが如し。ては東塔の三十講の業を遂げし者六孫王源經基

らんと云ひ送りたりければ、唱がかく云ふに防がれて、神人、宮仕暫くゆらへたり。若大衆、惡僧共は、何條其の儀ある可き。たゞ此の陣より神輿を入れ奉れやと云ふやから多かりけれ共、爰に老僧の中に、三塔一の僉議者と聞えし攝津の堅者豪運、進み出で、申しけるは、此の儀尤もさいはれたり。我等神輿を先立て參らせて訴訟を致さば、大勢の中を打破りてこそ、後代の聞えもあらんすれ。就中この頼政の卿は、六孫王より以來、源氏嫡々の正統、弓矢を取つても未だその不覺を聞かず。凡は武藝にも限らず、歌道にもまた勝れたる男なり。一年近衛の院御在位の御時、當座の御會のありしに、深山の花といふ題を出されたりけるに、人々みな詠みわづらはれたりしを、此の頼政の卿、

深山木のその梢とも見えざりし、櫻は花にあらはれにけり。といふ名歌仕つて、御感に預る程のやさ男に、如何か時に臨んで、なさけなう恥辱をば與ふ可き。唯神輿かき返し奉れやと僉議したりければ、數千人の大衆、先陣より後陣迄、皆尤々とぞ同じける。さて神輿昇返し奉り、東の陣頭待賢門より入れ奉

梵天の三界の中、色界の初禪天の第三天をいふ。堅牢地神、又は大堅牢地神ともいふ。堅牢地神の堅牢と神の大地の堅牢と通する名。

らんとしけるに、狼藉忽に出で来て、武士ども散々に射奉る。十禪師の御輿にも、矢ども數多射立てけり。神人・宮仕射殺され、衆徒多く疵を被つて、喚き叫ぶ聲は梵天までも聞え、堅牢地神も驚き給ふらんとぞ覺えける。大衆神輿をば陣頭に振捨て奉り、泣く／＼本山へぞ登りける。

教訓

白金物打つたる胸板せめ、白金物は凡そ白と銀をいふ。胸板の合引きの緒と高紐とを取り合せて絞めたるなり。木蘭地、黄赤にして少黒みを兼ねたる色。

太政の入道は、加様に人々數多警め置きても、猶心行かずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲威の腹巻の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝の守たりし時、神拜の次に、靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける、銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられける、大方其の氣色ゆゝしうぞ見えし。貞能と召す。筑後の守貞能は、木蘭地の直垂に、緋威の鎧着て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、如何に貞能此の事如何思ふぞ、保元に平右馬の助を始めとして、一門半過ぎて、新院の御方に参りに

平右馬助忠盛の弟忠正。

一宮重仁親王

故院鳥羽院。

成親中御門中納言宗成の三男大納言西光法師、法名西光、法皇御近臣也、加賀守師高父也、鳥羽の北殿に上、鳥羽村にあり、城南離宮ともいふ。

き。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の、養君にてましくしかば、旁々見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先を懸けたりき。是一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴・義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内にたて籠り、天下闇と成りたりしにも、入道隨身を捨て、凶徒を追ひ落し、經宗・惟方を召し戒めしに至る迄、君の御爲に、既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申す共、争か此の一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。其れに成親と云ふ無用の徒者、西光と申す下賤の不當人が申す事に、君の付かせ給ひて、動もすれば、此の一門滅さる可き由の御結構こそ然るべからね。此の後も讒奏する者有らば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵と成つて後は、如何に悔ゆ共益あるまじ。暫く世を静めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らるか、然らずば是れへまれ、御幸をなし参らせんと思ふは如何に。其の儀ならば、定めて北面の者共が中より、箭をも一つ射んすらん。その用意せよと侍共に觸る可し。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ、著背長取出せとこそ宣ひけれ。主馬の

邊地粟散〓楞嚴經に「小國小主散天下如粟」
解脫幢相の法衣〓袈裟の異名。
破戒〓受戒ののち其の持戒を破るを破戒又は犯戒といふ。

四恩〓「一父母恩、二衆生恩、三國王恩、四三寶恩」心地觀經に出づ。
普天〓天下、莫溥天之下、莫不〓王土、率土之濱、莫非〓王之臣。毛詩に出づ。
潁川〓の水に耳を洗ふ〓許由耕于潁水之陽、堯不〓欲〓開〓之、洗〓耳〓潁水〓濱〓高士傳に出づ。

更に現共覺え候はず。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を司らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふ事、禮儀を背くに非ずや。就中御出家の御身なり。夫れ三世の諸佛解脫幢相の法衣を脱ぎ捨て、忽に甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましき事、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなす。旁、恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を残す可きにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是也。其の中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地に非すと云ふ事なし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に巖を折りし賢人も、救命背き難き禮儀をば存知すところ承れ。如何に況んや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を窮めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚闇の身を以て、蓮府槐門の位に至る。加之國郡半は一門の所領と成つて、田園盡く一家の進止たり。これ希代の朝恩に非ずや。今是等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、猥がはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひ

首陽山〓に巖を折りし賢人〓武王〓已〓平〓殷〓亂〓天〓下〓宗〓周〓而〓伯〓夷〓叔〓齊〓耻〓之〓義〓不〓食〓周〓粟〓隱〓於〓首〓陽〓山〓采〓蕨〓而〓食〓之〓史〓記〓蓮府槐門〓三公〓の邸を云ふ。
聖德太子十七箇條御憲法〓に「十、曰、絶、忿、人、違、人、皆、有、心、心、各、有、執、彼、是、則、我、非、我、是、則、彼、非、我、心、非、聖、彼、必、非、思、共、是、凡、夫、耳、是、非、之、理、誰、能、可、定、相、共、賢、愚、如、環、无、端、是、以、彼、人、雖、順、還、恐、我、失、我、獨、雖、得、從、衆、同、舉、」

なんす。夫れ日本は神國也。神は非禮を受け給ふべからず。然れば君の思し召し立たせ給ふ所、道理半ば無きに非ず。中にも此の一門は、代々の朝敵を平げて、四海の激浪を靜むる事は、無雙の忠なれ共、其の賞に誇る事は、傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條御憲法に、人皆心有り、心各、執あり。彼を是し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くして端なし。爰を以て縦人怒ると云ふとも、却つて我が咎を懼れよとこそ見えて候へ。然れ共當家の運命未だ盡きざるに依つて、御謀叛已に顯れさせ候ひぬ。其の上仰合せらるゝ成親の卿を、召し置かれぬる上は、縦君如何なる不思議を、思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には彌、奉公の忠勤を盡し、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はゞ、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思し召しなほす事などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎別く方なし、道理と僻事ひがを雙べんに、争か道理に付かざるべき。

烽火

位之時ヲ謂ニ敍
 今大臣の大將
 承安四年七月八
 日任右大將(廿
 七)治承元年(廿
 月五日)任内大臣
 (四十)同日大將
 如故
 千顆萬顆の玉
 盤ノ日盤ノ風ノ高
 低千顆萬顆之玉
 染ノ枝染ノ浪ノ表
 裏一入再入之
 紅ノ和漢朗詠集
 菅三位の花光水
 迷盧八萬ノ須
 彌山王ノ海
 中ノ八萬四千由
 旬ノ八萬四千由
 高ノ八萬四千由
 在リ長阿含經ニ
 ルの略スメ

是れは尤君の御理にて候へば、叶はざらん迄も、院中を守護し參らせ候ふべし、其の故は重盛始め敍爵より、今大臣の大將に至る迄、併ら君の御恩ならずと云ふ事なし。此の恩の重き事を思へば、千顆萬顆の玉にも越え、其の恩の深き色を案すれば、一入再入の紅にも猶過ぎたらん。然らば院中へ參り籠り候ふべし。其の儀にて候はゞ、重盛が身に代り命に代らんと、契りたる侍共少々候ふらん。是等を召具して、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はゞ、流石以ての外の御大事でこそ候はんすらめ。悲しい哉、君の御爲に忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりも猶高き、父の恩忽に忘れんとす。痛ましき哉、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣とも成りぬべし。進退是窮まれり。是非いかにも辨へ難し。申し請くる所詮は、只重盛が頸を召され候へ。其の故は院參の御供をも仕る可からず、又院中をも守護し參らすべからず。されば彼の蕭何は大功かたへに越えたるに依つて、官

蕭何は云々史
 記蕭相國世家に
 出づ

富貴の家には祿
 位重疊ノ常觀
 富貴之家ニ祿位
 重疊ノ猶ニ再賞
 之木其根必傷
 後漢書にあり
 び實なる木は再
 事文類聚に淮南
 子等に類聚

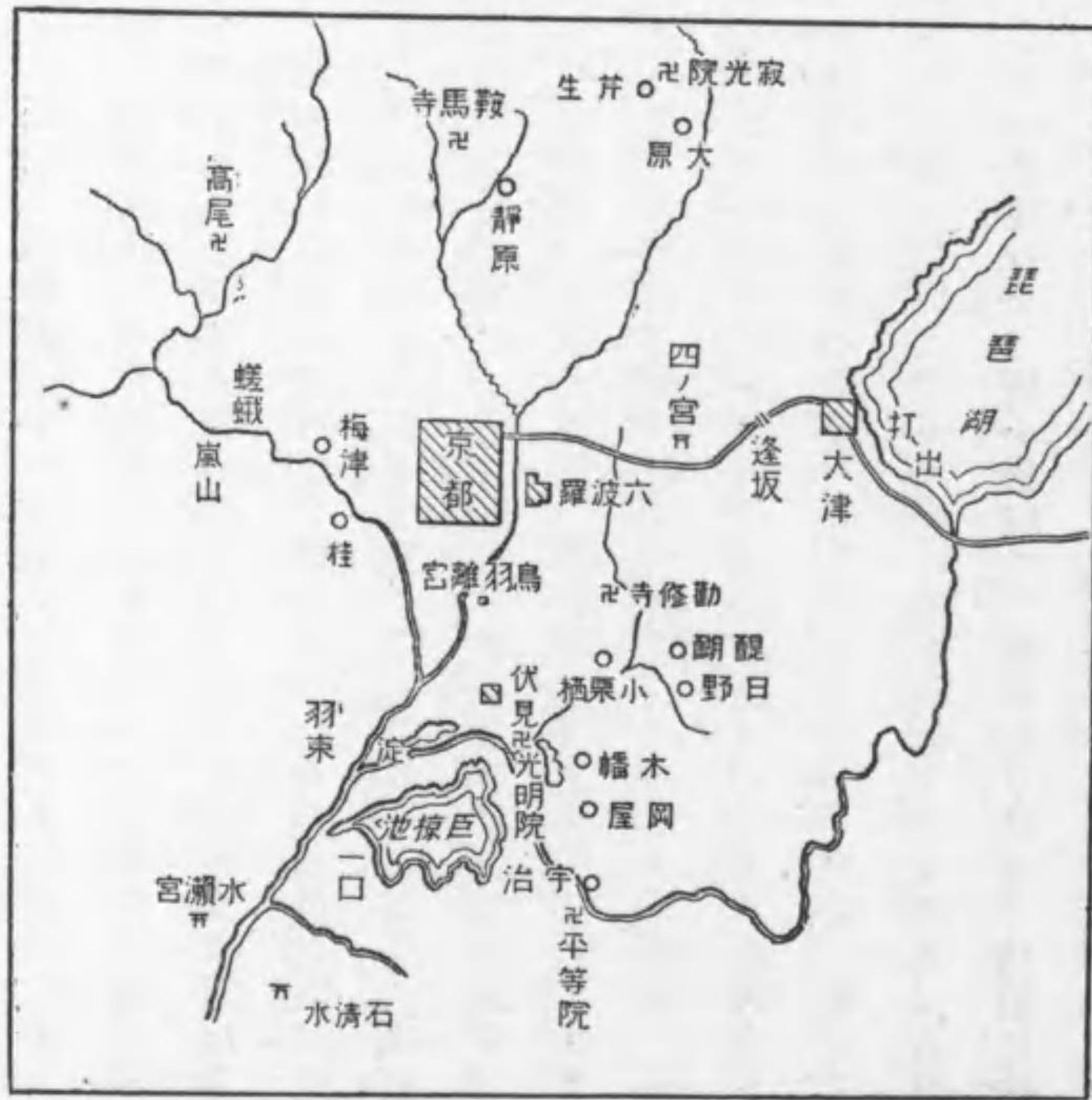
大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら、殿上へ昇る事を許されしか共、叡慮に背く事ありしかば、高祖重う警めて、深う罪せられにき。加様の先蹤を思へば、富貴といひ、榮花と云ひ、朝恩と申し、重職と云ひ、旁々きはめさせ給ひぬれば、御運の盡きん事難かる可きに非ず。富貴の家には、祿位重疊せり、再び實なる木は、其の根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。いつ迄か命生きて、亂れん世をも見候ふべき。只末代に生を受けて、かゝる憂き目に逢ひ候ふ重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せ付けられ、御坪の内へ引出されて、重盛が首の刎ねられんする事は、いと安い程の御事でこそ候はんすらめ。これを各々聞き給へとて、直衣の袖も絞る計りにかき口説き、さめくと泣き給へば、其の座に竝み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。入道頼み切つたる内府は、加様に宣ふ、世にも力なげにて、いや／＼其れ迄の事は思ひも寄りさうす。惡黨共の申す事に、君の付かせ給ひて、如何なる僻事などもや出でこんすらんと思ふ計りでこそ候へ。大臣、縦如何なる僻事出來候へばとて、君をば何とかし參らさせ給ふべきとて、つい立つ

小松殿六波羅に當りて、辰巳角に當る。主馬判官盛國、主馬判官盛國の馬具及び諸國の牧馬を掌る。察官は、諸口となるが、充となるが、例なるが、國の子。平氏、盛基

筑後守貞能家貞の子。

て中門に出で、侍どもに宣ひけるは、只今是れにて申しつる事共をば、汝等は能く承らすや。今朝より是れに候ひて、加様の事共をも申し静めんとは存じつれ共、餘りに混騒に見えつる間、先づ歸りつる也。院參の御供に於ては、重盛が首の刎ねられたらんを見て仕れ。さらば人參れとて、小松殿へぞ歸られける。其の後大臣、主馬の判官盛國を召して、重盛こそ今朝別して天下の大事を聞き出したんなれ。我を我と思はんずる者共は、物の具して急ぎ參れと催せと宣へば、馳せ廻つて披露す。臆げにては騒ぎ給はぬ人の、加様の披露の有るは、誠に別の仔細のあるにこそとて、我もくと馳せ參る。淀、羽東瀬、宇治、岡屋、日野、勸修寺、醍醐、小栗栖、梅津、桂、大原、志津原、芹生の里に溢れ居たる兵共、或は鎧着て、未だ甲を著ぬもあり、或は矢負うて未だ弓を持たぬも有り。片鎧踏むや踏ますにて、周章て騒いで馳せ參る。小松殿に騒ぐ事ありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵共、入道にはかう共申しも入れず、ざやめき連れて、皆小松殿へぞ馳せたりける。弓箭に携はる程の者は、一人も残らず。筑後の守貞能が唯一人候ひけるを御前に召して、内

府は何と思ひて、是等をば皆加様に呼び取るやらん。今朝是れにて云ひつる様に、淨海が許へ打手などもや向けんすらんと宣へば、貞能涙をはらくと流して、人も人にこそ依らせ給ひ候へ。争か唯今さる御事候ふべき。今朝これにて申させ給ひつる御事共をば、早皆御後悔ぞ候ふらんと申しければ、入道いやく



内府に中違うては、悪しかりなんとや思はれけん、法皇迎へ参らせんと思はれける心も和ぎ、急ぎ腹巻脱ぎおき、素絹の衣に袈裟打掛けて、いと心にも起らぬ念誦してこそおはしけれ。其の後小松殿には、盛國承つて著到付け、り。馳せ参じたる侍共、一萬餘騎とぞ註しける。著到披見の後、大臣中門に出で、侍共に宣ひけるは、日來の契約を違へずして、皆加様に参りたるこそ神妙なれ。異國にさるためし有り。周の幽王、褒姒と云へる最愛の后を持ち給へり。天下第一の美人なり。され共幽王の御心に叶はざりける事には、褒姒笑を含ますとて、都て笑ふ事し給はず。異國の習ひに、天下に兵亂の起る時は、所々に火を舉げ太鼓を打つて、兵を召す謀有り。これを烽火と名づく。或時天下に兵革起つて所々に烽火を掲げたりければ、后是れを御覽じて、あな夥し、火もあれ程まで多かりけりなとて、其の時始めて笑ひ給へり。一度笑めば百の媚有りけり。幽王是れを嬉しき事にし給ひて、其の事となく常は烽火を揚げ給ふ。諸侯來るに怨なし。怨なければ則ち歸り去りぬ。加様にする事度々に及べば、兵も参らず。或時隣國より凶賊起つて、幽王の都を攻めけるに、烽

周の幽王幽王爲幽烽火幽大鼓幽有幽寇幽至幽則幽舉幽燧幽火幽諸幽侯幽悉幽至幽至幽而幽無幽寇幽褒幽姒幽乃幽大笑幽史幽記幽に幽出幽づ幽。

一度笑めば百の媚有り媚有りけり媚有り。幽王是れを嬉しき事にし給ひて嬉しき事にし給ひて、其の事となく常は烽火を揚げ給ふ烽火を揚げ給ふ。諸侯來るに怨なし諸侯來るに怨なし。怨なければ則ち歸り去りぬ怨なければ則ち歸り去りぬ。加様にする事度々に及べば加様にする事度々に及べば、兵も参らず兵も参らず。或時隣國より凶賊起つて或時隣國より凶賊起つて、幽王の都を攻めけるに幽王の都を攻めけるに、烽

野子野子千歳之千歳之狐爲狐爲淫婦淫婦百歳之百歳之狐爲狐爲善女善女之之謙譯名義集謙譯名義集。

君君たらずと雖も君君たらずと雖も。君雖君雖不不可可以以不不臣臣父父雖雖不不可可以以父父子子不不可可以以不不子子古文孝經古文孝經。君の爲には忠君の爲には忠。臣事君以忠臣事君以忠。論語に出づ論語に出づ。文宣王孔子を怨文宣王孔子を怨をば恩を以てをば恩を以て。或曰、以德或曰、以德

火を舉ぐれ共、例の後の火に習れて、兵も参らず。其の時都傾いて、幽王終に亡びにけり。さてかの后野子と成つて走り失せけるぞ怖しき。加様の事のある時は、自今以後、是れより召さんには、皆かくの如く参るべし。重盛今朝別して天下の大事を聞き出して召しつる也。され共此の事聞き直しつ、僻事にてありけり。さらばとう歸れとて、侍ども皆歸されけり。實にさせる事をも聞き出されざりけれ共、今朝父を諫め申されける詞に隨ひて、我が身に勢の付か付かぬかの程をも知り、又父子軍をせんとはあらね共、かくして入道大相國の謀叛の心も柔ぎ給ふかとの謀とぞ聞えし。君君たらずと雖も、臣以て臣たらずんばある可からず。父父たらずとも、子以て子たらずんばある可からず。君の爲には忠有つて、父の爲には孝あれと、文宣王の宣ひけるに違はず。君も此の由聞し召して、今に始めぬ事なれ共、内府が心の中こそ辱しけれ。怨をば恩を以て報ぜられたりとぞ仰せける。果報こそ目出たうて、今大臣の大將に至らめ。容儀帯佩人に勝れ、才智才覺さへ世に越えたるべきやはとぞ、時の人々感じ合はれける。國に諫むる臣あれば、其の國必ず安く、家に

諫むる子あれば、其の家必ずたゞしと云へり。上代にも末代にも有り難かりし大臣也。

足 摺

御使は丹左衛門の尉基康と云ふ者なり。急ぎ船より上り、是れに都より流され給ひたりし、平判官康頼入道、丹波少將殿やおはすと、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、側の熊野詣して無かりけり。俊寛一人ありけるが、是れを聞いて、餘りに思へば夢やらん、又天魔波句の、我が心を誑さんとて云ふやらん、現共更に覚えぬもの哉とて、周章てふためき、走る共なく、倒るゝ共なく、急ぎ御使の前に行き向ひて、是れこそ流されたる俊寛よと名乗り給へば、雑色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文取出で、奉る。是を開きて見給ふに、重科は遠流に免ず、早く歸洛の思を成すべし。今度中宮御産の御祈に依つて、非常の赦行はる。しかる間、鬼界が島の流人、少將成經、康頼法師赦免と計り書かれて、俊寛と云ふ文字はなし。禮

報、怨何如、子曰、何以報德、以德報怨、以直報怨、論語にあり。國に諫むる臣あり。争臣五人、雖亡道、不失去其國。古文孝經。

丹波少將成經、成親の子。俊寛、僧都なり。權大僧都なり。僧都は四位殿上人に相當す。天魔波句、天魔は第六天の魔王、名を波句といふ。

紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えす。奥より端へ讀み、端より奥へ讀みければ共、二人と計り書かれて、三人とは書かれず。さる程に少將や康頼法師も出で來り、少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人と計り書かれて三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝる事は有れ、夢かと思ひ成さんとすれば現也。現かと思へば又夢の如し。その上二人の人々の許へは、都より言傳てたる文共幾らも有りければ共、俊寛僧都の許へは、事問ふ文一つもなし、されば我がゆかりの者共は、皆都の内に跡を留めず成りにけるよと、思ひやるにも覺東なし。抑、我等三人は同じ罪、配所も同じ所也。いかなれば赦免の時、二人は召し返されて、一人爰に残す可き。平家の思ひ忘れかや、執筆の謬か。こは如何にしつる事共ぞやと、天に仰ぎ地に伏して、泣き悲め共甲斐ぞなき。僧都少將の袂にすがり、俊寛が加様に成ると云ふも、御邊の父、故大納言殿の、由なき謀叛の故也。されば餘所の事と思ひ給ふべからず。赦されなければ、都迄こそ叶はず共、せめては此の船に乗せて、九國の地まで付けて給べ。各々の是れにおはしつる程こそ、春は燕秋は田の面の雁の音信

るゝ様に、自ら故郷の事をも傳へ聞きつれ、今より後は、何としてか聞く可きとて、悶え焦れ給ひけり。少將、誠にさこそは思し召され候ふらめ。我等が召し返さるゝ嬉しさも、さる事にては候へ共、御有様を見奉るに、更に行く可き空も覚え候はず。此の舟に打乗せ奉つて、上り度うは候へ共、都の御使、如何にも叶ふまじき由を頻りに申す。その上赦されも無きに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はば、なかなか悪しう候ひなんす。成經先づ罷り上つて、人々にも能く／＼申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎に人を奉らん。其の程は日來おはしつる様に思ひ成して待ち給へ。命は如何にも大切の事なれば、縦ひ此の瀬にこそ漏れさせ給ふ共、終にはなどか赦免なくて候ふべきと、様々に慰め宜へ共、僧都堪へ忍ぶべうも見え給はず。さる程に舟出さんとしければ、僧都舟に乗つては降りつ、下りては乗つゝ、あらまし事をぞし給ひける。少將の信には夜の衾、康頼入道が形見には、一部の法華經をぞ留めける。既に纜解いて舟押出せば、僧都綱に取引き、腰に成り、脇に成り、長の立つ迄は引かれて出づ。長も及ばず成りければ、僧都船に取付き、さて如何に

漕ぎゆく船拾
遺集あり沙彌誓
の歌ありた世の
中を何にたへ
ん朝ぼらけ漕ぎ
ゆく舟のあとに
白波の萬葉集に
も出づ

松浦小夜姫萬
葉集卷五山上
憶良松浦小夜
姫の歌ありにも
前風土記にも出
づ

壯里息里天竺
の早離難とい
ふ兄弟、繼母の
爲めに孤島に棄
てられしといふ
本縁の説話也

各々俊寛をば終に棄て果て給ふか。日來の情も今は何ならず。赦され無ければ、都迄こそ叶はず共、責めては此の船に乗せて、九國の地迄と口説かれ共、都の御使、如何にも叶ひ候ふまじとて、取付き給ひつる手を引き除けて、船をば終に漕ぎ出す。僧都せん方なさに、渚に上り倒れ伏し、少き者の乳母や母などを慕ふ様に、足摺をして、是れ乗せて行け、具して行けと宣ひて、喚き叫び給へども、漕ぎ行く船の習にて、跡は白波計りなり。未だ遠からぬ舟なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦小夜姫が唐船を慕ひつゝ、領布ふりけんも、是れには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎ隠れ、日も暮るれ共、僧都恠しの配所へも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、其の夜は其にぞ明しける、さり共少將は情深き人なれば、能き様に申す事もやと憑を懸けて、其の瀬に身をも投げざりし心の中こそはかなけれ。昔壯里息里が、海巖山へ放たれたりけん悲も、今こそ思ひ知られけれ。

ぬき通したるが故の根につける。假初の門、又は証大善提二聲聞縁覺等の二乘佛提正覺を證得するをいふ。子に過ぎたる寶玉、銀母、奈爾、麻、古爾、迦、米、爾、麻、古爾、迦、米、可、爾、麻、古爾、迦、米、夜、母、良、古爾、迦、米、(萬葉集。憶良)

秋の山の春風、深き夜の鳥羽、はるかに送る音、拾遺集、祝部、尙、長、鳥羽、名、紫、鴛、白、鷗、遺、遙、す、遷、於、朱、權、之、前、順、作、(本朝文粹源順)

欄門盛衰記に

かりけり。年去り年來れ共、忘れ難きは撫育の昔の恩、夢の如く幻の如し。盡き難きは戀慕の今の涙なり。三世十方の佛陀の聖衆も憐み給ひ、亡魂尊靈も、如何に嬉しとおぼしけん。今暫く候ひて、念佛の功をも積むべう候へ共、都に待つ人共の心元なう候ふらん。又こそ參り候はめとて、亡者に暇申しつつ、泣くく其をぞ立たれける。草の蔭にても、名残惜しうや思はれけん。同じき三月十六日、少將鳥羽へ明うぞ著き給ふ。故大納言殿の山庄州濱殿とて鳥羽にあり。其山に立寄り見給へば、住み荒して年經にければ、築地は有れ共蓋もなく、門は有れ共扉もなし。庭に立入り見給へば、人跡絶えて苔深し。池の邊を見廻せば、秋の山の春風に、白波頻に折懸けて、紫鴛白鷗遺遙す。興ぜし人の戀しさに、只盡きせぬものは涙也。家はあれ共、欄門破れて、葺遣戸も絶えてなし。爰には大納言殿の兎こそおはせしか、此の妻戸をば角こそ出で入り給ひしか、あの木をば、自らこそ植ゑ給ひしかなんと云うて、言の葉に付けても、只父の事をのみ悲しげにこそ宣ひけれ。三月中の六日なれば、花は未だ名残あり、楊梅桃李の梢こそ、折知り顔に色々なれ。昔の主はな

は羅門とあり。細い木は竹を組合せ、立上部を板垣などの上にも菱形に組んだも。の春を忘れぬ花なれば、おこちよ梅の花を主おせよと遺集云々。公作、遺集云々。和漢期詠集に出づ。菅三品集。出づ。故郷の花の云ふ荒れ、後拾遺集に出づ。荒れ、君の宿の板間。よれたる宿の板間。も袖は濡る。歌六帖。業平。鶏籠の山。鶴籠の山。望月。侍望月。獨歩。紀。田本朝文粹。花の下。客の曲。鞍馬。天

けれ共、春を忘れぬ花なれや、少將花の下に立寄りて、

桃李不言春幾暮 煙霞無跡昔誰栖

故郷の花の言ふ世なりせば、如何に昔の事を問はまし。

此の古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も折節哀れに覺えて、墨染の袖をぞ濡しける。暮るゝ程とは待たれけれ共、餘りに名残惜しくて、夜更くる迄こそおはしけれ。更け行くまゝには、荒れたる宿の習とて、古き軒の板間より、もる月影ぞ隈もなき。鶏籠の山明けなんとすれ共、家路は更に急がれず。さてしも有る可き事ならねば、迎に乗物ども遣して、待つらんも心なしとて、少將泣く泣く州濱殿を出でつゝ、都へ歸り上られける人々の心の中、さこそは嬉しうも又哀れにもありけめ。康頼入道が迎にも乗物は有りけれ共、今更名残の惜しきにとて、其れには乗らず、少將の車の尻に乗つて、七條河原までは行く。其れより行き別れけるが、猶行きもやらざりけり。花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎゆくに、一樹の蔭に立ちよつて、別るゝ名残も惜しきぞかし。況んや是れは、憂かりし鳥の栖

夏衣立つけふ
よりともあつし
薄くともあつし
とのみや思ひ渡
らむ。「詞花集」
に出づ。増基法
師作。歌の方は
裁衣と立夏とを
いひ掛けたるな
り。

執行寺社にありて上首となりて、事務を執行する役僧、法勝寺の外、金剛峯寺、清水寺、祇園社等に置かる。白雲跡を埋んで、白雲跡を埋んで、
|| 紀齊名、山遠
|| 寒風破、旅人
夢 (和漢期詠集)

沙頭に印を刻む鳴沙頭大江朝綱
|| 鳴沙頭大江朝綱
|| 鳴沙頭大江朝綱
處、水庭撰書雁度時、(和漢朗詠集)

諸悪修羅等法華經法師品。三惡四趣地獄餓鬼畜生の三惡道に修羅を加ふ。

解くなれば、夏衣立つを遅くや思ひけん、三月の末に都を立つて、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩瀉へぞ下りける。薩摩より彼の島へ渡る船津にて、有王を人恠め、著たる物を剝取りなどしけれ共、少しも後悔せず、姫御前の御文計りぞ、人に見せじと、髻結の中には隠しける。さて商人船に乗つて件の島へ渡つて見るに、都にて幽に傳へ聞きしは、事の數ならず、田もなし、島もなし、村もなし、自ら人は有れ共、謂ふ詞をも聞き知らず。有王島の者に行き向つて、物申さうと云へば、何事と答ふ。是れに都より流されさせ給ひたる、法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の、御行末や知つたると問ふに、法勝寺とも、執行共、知つたらばこそ返事はせめ、只頭を掉つて知らぬと云ふ。其の中に或者が心得て、いさよ、左様の人は三人是れにありしが、二人は召し返されて都へ上りぬ。今一人残されて、あそこ爰よと迷ひ歩きしが、其の後は行方をも知らずとぞ云ひける。山の方の覺束なさに、遙に分け入り、嶺に攀ち、谷に下れ共、白雲跡を埋んで、往來の道も定かならず。晴嵐夢を破つては、其の面影も見えざりけり。山にては遂に尋ねも違はず、海の邊に著いて尋ぬる

に、沙頭に印を刻む鷗、澳の白洲に集く濱千鳥の外は、跡問ふ者も無かりけり。或朝礎の方より、蜻蛉などの如くに疲せ衰へたる者、よろぼひ出で來たり。本は法師にて有りけりと覺えて、髪は虚様に生ひあがり、萬づの藁屑取り付けて、荊を頂いたるが如し。節見はれて皮ゆたひ、身に著たる物は、絹布の分も見えず。片手には荒海布を持ち、片手には魚を貫うて持ち、歩む様にはしけれ共、はかも行かず、よろ／＼として出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しか共、かゝる者は未だ見ず、諸阿修羅等、居在大海邊とて、修羅の三惡四趣は、深山大海の邊に有りと、佛の説き置き給ひたれば、知らず我餓鬼道などへ、迷ひきたるかとぞ覺えたる。早彼れも此れも次第に歩み近づく。若し加様の者にても、我が主の御行方や知つたると、物申さうと云へば、何事と答ふ。是れに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やましますと問ふに、童こそ見忘れたれ共、僧都は争か忘れ給ふべきなれば、是れこそ其れよと宣ひも敢へず、手に持てる物を投捨てて、沙の上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方とは知つてけれ。僧都聽て消え入り給ふを、有王膝

の上に搔乗せ奉り、多くの波路を凌ぎつゝ、遙々と是れ迄尋ね参つたる甲斐もなく、如何に懸て憂き目をば見せんとは、せさせ給ひ候ふぞと、さめくと搔き口説きければ、僧都少し人心地出で來、扶け起され、誠に汝多くの波路を凌ぎつゝ、遙々と是れまで参りたるこそ神妙なれ。只明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀しき者共の面影を、夢に見る折も有り、又幻に立つ時もあり。身も痛う疲れ弱つて後は、夢も現も思ひ分かず。今汝が來れるをも、只夢とのみこそ覺ゆれ。若しこの事の夢なりせば、覺めての後は如何せん。有王、こは現にて候也。さても此の御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ、不思議には覺え候へと申しければ、いさよ、是れは去年少將や判官入道が迎の時、其の瀬に身をも投ぐべかりしを、由なき少將の、今一度の音信をも、待てかしなど慰め置きしを、愚かに若しやと頼みつゝ、存へんとはせしか共、此の島には人の食物も、絶えて無き所なれば、身に力の有りし程は、山に上つて硫黄と云ふ物を取り、九國より通ふ商人にあひ、食物に代へなどせしか共、日に副ひて弱りゆけば、今は左様の業もせず、加様に日の長

より竹の濱邊に
打寄せられた竹
片。

棟門の棟なくし
て常の屋棟のこ
とく作れる門。
平門の板もて屋
根ふき、棟に飾
なく、總て平みて
見ゆ。
順現、順生、順
業、業は今生に
現業は今生に
生に果報を受く
る今、順生は
今生の業報を受
くに受くるを謂

閑なる時は、磯に出でて網人釣人に、手を摺り膝を曲めて魚を貰ひ、潮干の時は貝を拾ひ、荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日までは存へたれ。さらでは憂き世を渡るよすがをば、如何にしつらんとか思ふらん。僧都、是れにて何事をも謂はばやとは思へ共、いざ我が家へと宣へば、有王、あの御有様にても、家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け参らせ、教に随つて行く程に、松の一村ある中に、より竹を柱とし、蘆を結び、桁梁に渡し、上にも下にも松の葉をひしと取り懸けたれば、雨風忍る可うも見えず。有王、あなあさまし、元は法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の社務を司り給ひしかば、棟門平門の内に、四五百人の所従眷屬に、圍繞せられておはせし人の、親りかゝる憂き目に合はせ給ふ事の、不思議さよ。業に様々あり、順現、順生、順後業と云へり。僧都一期が間、身に用ふる所、皆大伽藍の寺物佛物ならずと謂ふ事なし。されば彼の信施無慚の罪に依つて、今生にて早感せられけりとぞ見えたりける。僧都こは現にて有りけりと思ひ定めて、去年少將や判官入道迎ひの時も、是等が文と謂ふ事もなし。今又汝が

ひ、順後は二生
以後に受くるを
謂ふ。信施無慚信者
の施物を受けず
ら恩を感ずる事
なく反省なきを
いふ。

便にも、かく共謂はざりけりなと宣へば、有王涙に咽び俯して、暫は御返事にも及ばず、良有つて起上り、涙を押へて申しけるは、君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參つて、資財雜具を追捕し、御内の者共搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は少き人を隠し兼ね參らせ給ひて、鞍馬の奥に忍うで御渡り候ひしにも、此の童計りこそ、時々參つて御宮づかへ仕り候ふなり。何れも御歎の愚なる方は候はね共、中にも稚き人は、餘りに戀ひ渡らせ給ひて、參り候度毎には、如何に有王よ、我れ鬼界が鳥とかやへ、具して參れと宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、痘と申す事に、失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は其の御歎きと申し、又是れの御事と申し、一方ならぬ御物思に思し召し沈ませ給ひて、打臥させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなく成らせ給ひぬ。今は姫御前許りこそ、奈良の姨御前の御許に、忍うでおはしける、其れより御文賜つて參つて候ふとて、取出でて奉る。僧都是れを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、などや三人流されて坐す人の、二人は召し還されて侍ふ

哀れ尊きも卑し
きも卑しあはれ尊
きも卑しきも女
の身程悲しかり
けることはなし
(平治物語)

争か人にも見え
争でかして適
當な人と結婚さ
せ。人の親の心は
人の親の心は
間にあらねども
子を思ふ道にま
どひぬる哉(後
撰集、兼輔朝臣)
曆も無ければ
山中無暦日、
寒盡不知年、
太上隱者の詩。
蟬の聲麥秋を送
る(千峯鳥路
合、梅雨、五月蟬
聲送、麥秋、和
漢期詠集)

に、何とて一人残されて、今迄御上りも侍はぬぞ、哀れ高きも卑しきも、女の身程言ふ甲斐なき事は侍はず、男の身にても侍はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ね參らで侍ふ可き。此の童を御伴にて、急ぎ上らせ給へとぞ書かれたる。是れ見よ有王よ、此の子が文の書き様のはかなさよ。己を伴にて、急ぎ上れと書きたる事の恨めしさよ。俊寛が心に任せたる憂き身ならば、争か此の島にて三年の春秋をば送る可き。今年は十二に成ると覺ゆるが、是れ程にはかなうては、争か人にも見え、宮仕へをもして、身をも扶く可きかとて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらね共、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。此の島へ流されて後は、曆も無ければ月日の立つをも知らず、只自ら花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月黒月の替り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折つて數ふれば、今年は六つに成ると覺ゆる稚き者も早先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし時、此の子が行かんと慕ひしを、聽て歸らうするぞと慰め置きしが、只今の様に覺ゆるぞや。其れを限とたにも思はましか

白月黒月のかは
り月盈至満、
謂之白分、月虧
至晦、謂之黒
分、西域記。

ば、今暫くもなどか見ざらん。親と成り子と成り、夫婦の縁を結ぶも、皆此の世一
つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事計りこそ心苦しけれ共、其れは生身なれば、歎き
ながらも過さんずらん。さのみ存へて、己に憂き目を見せんも吾が身ながら強顔か
る可しとて、自ら食事を留め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。
有王渡つて廿三日と申すに、僧都庵の中にて遂に終り給ひぬ。歳三十七とぞ聞えし。
有王空しき姿に取付き奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行く程泣きあきて、聽て後世
の御供仕るべく候へ共、此の世には姫御前計りこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ進ら
すべき人も候はず。しばし存へて、御菩提を弔ひ進らすべしとて、臥戸を改めず、
庵を切り懸け、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取り懸けて、藻鹽の煙と成し奉り、茶
毗事終へぬれば、白骨を拾ひ頸に懸け、又商人船の便にて、九國の地にぞ著きにけ
る。其れより僧都の御女の、忍うでおはしける御許に參つて、有りし様を初より細
々と語り申す。なかなか文を御覽じてこそ、いとど御思は勝らせ給ひて候ひしか。
件の島には、硯も紙も無ければ、御返事にも及ばず。思し召されつる御事共は、さ

茶毗茶思、古
云「耶句」此云
梵燒也（慧琳音
義）

他生曠劫他生
曠劫、多生
多劫、劫、
は六道を輪轉す
る事多き意、曠
劫は過去に亘つ
て極めて長き時
間。

ながら空しうて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふ共、争か
御聲をも聞き、御姿をも見參らせ給ふべき。只如何にもして御菩提を弔ひ參らせ
給へと申しければ、姫御前聞きも敢へ給はず、臥し轉びてぞ泣かれける。聽て十二
の歳尼になり、奈良の法華寺に行ひ澄まして、父母の御世を弔ひ給ふぞ哀れなる。
有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へ上り、奥の院に納めつゝ、蓮華谷にて法
師になり、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。加様に人々の思ひ歎きの積
りぬる、平家の末こそ怖しけれ。

競

明くる十六日、高倉の宮の御謀叛起させ給ひて、三井寺へ落ちさせ給ふぞやと申
す程こそ有りけれ、京中の騒動斜ならず。抑、此の源三位入道頼政は、年比日來も
有ればこそ有りけめ。今年如何なる心にて、謀叛をば起されけるぞと云ふに、平家
の次男宗盛卿の、不思議の事をのみし給ひけるに依りてなり。されば人の世に有れ

明くる十六日
治承四年五月十
六日
高倉の宮
二の皇子以仁王

宗盛の卿急ぎ出でて見給ふに、昔は煖廷、今は平の宗盛入道といふ金焼をこそしたり
けれ。大將、悪い競めを切つて捨つべかりけるものを、手延にして謀られぬる事こ
そ安からね。今度三井寺へ寄せたらんする人々は、如何にもして競めを生捕にせよ。
鋸で頸切らんと、躍り上りく怒られけれ共、煖廷が尾髪も生ひず、鐵焼も又失せ
ざりけり。

物 怪

平家都を福原へ遷されて後は、夢見も悪しう、心噪ぎのみして、變化の者共多か
りけり。或夜入道の臥し給ひたりける所に、一間にはぐかる程の者の面の出で来て、
のぞき奉る。入道ちつ共騒がず、はつたと睨まへて坐しければ、只消えに消え失せ
ぬ。岡の御所と申すは、新しう作られたりければ、然る可き大木なんども無かりけ
るに、或夜大木の倒るゝ音して、人ならば二三千人が聲して、虚空に咄と笑ふ音し
けり。如何様にも是は天狗の所爲と云ふ沙汰にて、晝五十人、夜百人の番衆を揃へ、

番衆 營中の雜

務及び内外の警備を司る。
墓目 物に疵をつけず、射たふすべきが爲の設也、大なる物なる故、中を空に忍りぬきて軽くする也、ひゞき目を中略す、目と云は穴のこと也」と「四季草」にあり、惡魔降伏や、犬追物などに用ふ。



墓目の番と名付け、墓目を射させられけるに、天狗の有る方へ向つて射たるとおぼしき時は、音もせず、又無い方へ向つて射たる時は、咄と笑ひなどしけり。又或朝入道相國帳臺より出でて、妻戸を押開き、坪の内を見給へば、死人の枯體獨共が、幾らといふ數を知らず、坪の内に満ちくゝて、上なるは下になり、下なるは上になり、中なるは端へ轉び出で、端なるは中へ轉び入り、轉び合ひ轉び除き、からめき合へり。入道相國、人や有るくゝと召されけれ共、折節人も參らず。かくして多くの體獨どもが、一つに固り合ひ、坪の内にはばかる程に成りて、高さは十四五丈も有るらんと覺ゆる山の如くに成りにけり。彼の一つの大頭に、生きたる人の目の様に、大の眼が千萬出で来て、入道相國を屹と睨まへ、暫しは瞬きもせず。入道些とも騒がず、丁と睨まへて立たれたりければ、露霜などの日に當つて消ゆる様に、跡形もなく成りにけり。又入道相國、一の御厩に立て、舍人數多付けて、朝夕撫で飼はれける馬の尾に、鼠一夜の中に集をくひ子をぞ産んだりける。是れ只事にあらず、御占有る可しとて、神祇官にして、御占有り。重き御慎と占ひ申す。此の馬は、相

天智天皇の御宇
書紀、天智天
皇元年四月の條
に「鼠産於馬尾、
釋道顯占曰、北
國之人將附南
國、蓋高麗破而
屬日本乎」

模國の住人大庭の三郎景親が、東八箇國一の馬とて、入道大相國に參らせたりけるとかや。黒き馬の顔の少し白かりければ、名をば望月とぞ謂はれける。陰陽の頭安倍の泰親賜つてげり。昔天智天皇の御宇に、寮の御馬の尾に、鼠一夜の中に巢をくひ、子を産んだりけるには、異國の凶賊蜂起したりとぞ、日本紀には見えたりける。又源中納言雅賴卿の許に、召使はれける青侍が見たりける夢も、怖しかりけり。喩へば大内の神祇官とおぼしき所に、東帶正しき上臈の、數多寄り合ひ給ひて、議定の様なる事の有りしに、末座なる上臈の、平家の方人し給ふとおぼしきを、其の中よりして追立てらる。遙の座上に、氣高げなる御宿老のまし／＼けるが、此の日來平家の預り奉る節刀をば召し返いて、伊豆の國の流人前右兵衛佐頼朝に賜ばうするなりと仰せければ、其の傍に猶御宿老のまし／＼けるが、其の後は吾が孫にも賜び候へとぞ仰せける。青侍夢の中に、或る老翁に、次第に是れをとひ奉る。末座なる上臈の、平家の方人し給ふとおぼしきは、嚴島の大明神、節刀を賴朝に賜ばうと仰せらるるは、八幡大菩薩、其の後吾が孫にも賜べと仰せけるは、春日の大明神、かう

申す翁は、武内の明神と答へ給ふと云ふ夢を見て、醒めて後人に是れを語る程に、入道相國洩れ聞き給ひて、雅賴の卿の許へ使者を立てて、其れに夢見の青侍の候ふなるを賜つて、委しう尋ね候はばやと宣ひて、遣されたりければ、彼の夢見たりける青侍、悪しかりなんとや思ひけん、懸て逐電してげり。其の後雅賴の卿、入道相國の亭に行いて、全くさる事候はずと、陳じ申されたりければ、其の後は沙汰も無かりけり。其れに又何より不思議なりける事には、清盛未だ安藝守たりし時、神拜の次に、靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より、現に賜られたりける、銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしが、或夜俄に失せにけるこそ不思議なれ。平家日比は朝家の御堅にて、天下を守護せしか共、今は敕令にも背きぬれば、節刀をも召返さるゝにや、心細くぞ聞えし。

富士川

さる程に、右兵衛佐殿謀叛の由頻に風聞有りしかば、福原には公卿僉議有りて、

小松の權亮少將
權亮は春宮
權亮にして、維
盛の前官なり。
九月十八日治
承四年。

今一日も勢の付かぬ先に、急ぎ討手を下さる可しとて、大將軍には小松の權亮少將維盛、副將軍には薩摩の守忠度、侍大將には上總の守忠清を先として、都合其の勢三萬餘騎、九月十八日に新都を立ちて、明くる十九日には舊都に著き、懸て同廿日じきの日、東國へこそ赴かれけれ。大將軍小松の權亮少將維盛は、生年二十三、容儀帶佩繪に畫くとも、筆も及び難し。重代の著背唐皮と云ふ鎧をば、唐櫃に入れて昇かせらる。道中には赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧著て、連錢革毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乗り給へり。副將軍薩摩の守忠度は、紺地の錦の直垂に、黒絲威の鎧著て、黒き馬の太う逞しきに、鑄懸地の鞍を置いて乗り給へり。馬鞍・鎧甲・弓箭・太刀・刀に至る迄、光り耀く程に出立たれたれば、珍しかりし見物也。中にも副將軍薩摩の守忠度は、或宮腹の女房の許へ通はれけるが、或夜坐したりけるに、此の女房の局に、止事なき女房客人來て、小夜も漸更け行く迄歸り給はず。忠度軒端にイんで、扇を荒く使はれければ、彼の女房、野もせに集く蟲の音よと、優に口占み給へば、扇を懸て使ひ止みてぞ歸られける。其の後坐したる夜、何ぞや、何とて扇をば使ひ止み

鑄懸地 一面に
金粉をふりかけ
た梨地をいふ。

野もせに集く 野
「かしがまし野
もせにすだく蟲

の音よ、われだ
に物はいはでこ
そ思へ」と詠じ
たる由十訓抄に
みゆ。

東路の草葉 東
路の草葉をわけ
む人よりも後る
袖ぞまづは露
けき。(拾遺集)
たぬは裁たぬ
と發たぬとを掛
けたり。

内外辨 江次第
抄に、第一の内
臣が承明門内
諸事を辨する
内辨といひ、第
二の大内が承
明門外諸事を
辨するを外辨
といふとあり。

しぞやと問はれければ、いさ、姦など聞え侍りし程に、さてこそ扇を使ひ止みては候ひしかとぞ申されける。其の後此の女房、薩摩の守の許へ、小袖を一重遣すとて、千里の名残の惜しさに、一首の歌を書添へてぞ送られける。

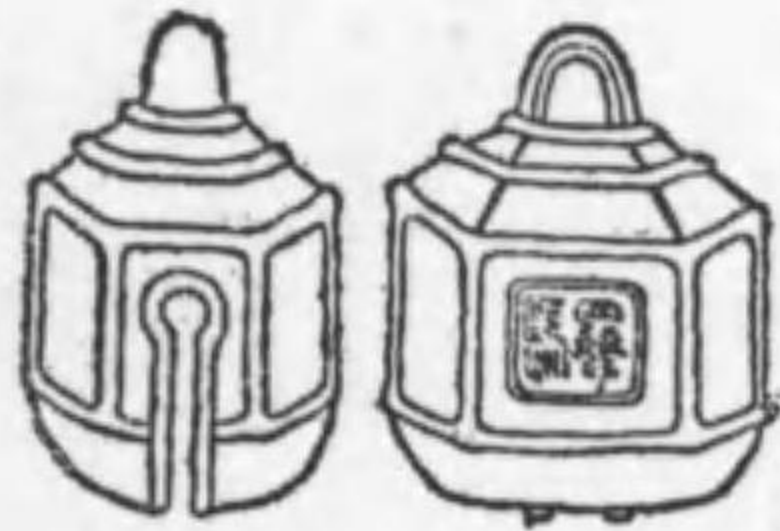
東路の草葉をわけん袖よりも、たぬ袂の露ぞこぼるゝ。

薩摩の守の返事に、

別れ路を何か歎かん越えて行く、關もむかしの跡と思へば。

關も昔の跡と詠める事は、先祖平の將軍貞盛、俵藤太秀郷、將門追討の爲に、吾妻へ下向したりし事を、今思ひ出でて詠みたりけるにや、最優しうぞ聞えし。昔は朝敵を平げに外土へ向ふ將軍は、先づ參向して節刀を賜る。宸儀、南殿に出御して、近衛、階下に陣を引き、内辨外辨の公卿參列して、中儀の節會を行はる。大將軍副將軍各、禮儀を正しうして、是れを賜る。承平天慶の蹤跡も、年久しう成つて准へ難しとて、今度は讃岐の守平の正盛が、前の對馬の守源の義親追討の爲に、出雲の國へ下向せし例とて、鈴計り賜つて、皮の袋に入れて、雑色が頭に懸けさせてぞ下られけ

中儀の節會凡節令有大儀中儀小儀白馬端午・豊明謂之中儀云々、と江次第抄にあり
 鈴公用の爲めの證とする驛鈴



都を出づる將軍は三つの存知日將受命之日忘其家張軍宿野忘其親、援抱而鼓忘其出身、と尉繚子に出づ。

る。古へ朝敵を平げんとて、都を出づる將軍は、三つの存知有り。節刀を賜る日家を忘れ、家を出づるとて妻子を忘れ、戦場にして敵に闘ふ時身を忘る、されば今の平氏の大將軍維盛忠度も、定めて左様の事共をば存知せられたりけん、哀れ成りし事共也。各々九重の都を立つて、千里の東海へ赴かれける。平かに歸り上らん事も、誠に危き有様にて、或は野原の露に宿を借り、或は高峯の苔に旅寝をし、山を越え河を重ね、日數経れば、十月十六日には、駿河の國清見が關にぞ著き給ふ。都をば三萬餘騎で出でたれ共、路次の兵付副ひて、七萬餘騎とぞ聞えし。前陣は蒲原、富士川に進み、後陣は未だ手越・宇津の谷に支へたり。大將軍權亮少將維盛、侍大將上總の守忠清を召して、維盛が存知には、足柄の山打越え、廣みへ出でて戦をせんと、早られけれ共、上總の守申しけるは、福原を御立ち候ひし時、入道殿の仰には、軍をば忠清に任せさせ給へとこそ仰せ候ひつれ。伊豆駿河の勢の參る可きだに、未だ一軍も見え候はず。御方の御勢七萬餘騎とは申せ共、國々の驅武者、馬も人も皆疲れ果てて候。東國は草も木も皆兵衛の佐に随ひ付きて候ふなれば、何十萬騎か候ふら

大庭兄弟景親景尚。畠山重能の一族。

ん。唯富士川を前に當てて、御方の御勢を待たせ給ふべうもや候ふらんと申しければ、力及ばで洵へたり。さる程に、兵衛の佐頼朝鎌倉を立つて、足柄の山打越え、黄瀬川にこそ著き給へ。甲斐信濃の源氏共、馳せ來つて一つになる。駿河の國浮島が原にて勢揃あり。都合その勢廿萬騎とぞ註いたる。常陸源氏佐竹の四郎が雜色の、文持つて京へ上りけるを、平家の侍大將上總の守忠清、此の文を奪ひ取つて見るに、女房の許への文也。苦しかるまじとて取らせてげり。さて源氏が勢は如何程有るぞと問ひければ、下藤は四五百千迄こそ、物の數をば知つて候へ。其れより上をば知り參らせず候。多いやらう、少いやらう、凡そ七日八日が間は、はたと續いて、野も山も海も河も、皆武者で候。昨日黄瀬川にて、人の申し候ひつるに、源氏の御勢二十萬騎とこそ申し候ひつれと申しければ、上總の守、あな心うや、大將軍の御心の延びさせ給ひたる程、口惜しかりける事はなし。今一日も先に討手を下させ給ひたらば、大庭兄弟、畠山が一族、などか參らで候ふべき。是等だに參り候はば、伊豆駿河の勢は皆随ひ付くべかりつるものと、後悔すれ共甲斐ぞなき。大將軍權亮少將維

十三束一束といふは指四ツ伏なり、大男にても小男にても其の主の手にて東より上はひかれぬものなり。

盛、東國の案内者として、長井の齋藤別當實盛を召して、汝程の強弓精兵、八箇國には如何程あるぞと問ひ給へば、齋藤別當あざ笑つて、さ候へば、君は實盛を大箭と思し召され候ふにこそ。僅か十三束をこそ仕り候へ。實盛程射候ふ者は、八箇國には幾らも候。大箭と申す定の者の、十五束に劣つて引くは候はず。弓の強さも、健なる者の、五六人して張り候。加様の精兵共が射候へば、鎧の二三領は容易うかけず射徹し候。大名と申す定の者の、五百騎に劣つて持つは候はず。馬に乗つて落つる道を知らず、惡所を馳すれど、馬を倒さず。軍は又親も討たれよ子も討たれよ、死ぬれば乗越えく戦ひ候。西國の戦と申すは、惣て其の儀候はず。親討たれぬれば引退き、佛事孝養し、忌明けて寄せ、子討たれぬれば、其の愁へ歎きとて、寄せ候はず、兵糧米盡きぬれば、春は田作り、秋刈收めて寄せ、夏は熱しと厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候。東國の軍と申すは、惣て其の儀候はず。其上甲斐信濃の源氏等、案内は知つたり、富士の裾より搦手にや迫り候はんずらん。加様に申せば、大將軍の御心を、臆せさせ參らせんとて、申すとや思し召し候ふらん。其の儀では候はず。

但し軍は勢の多少により候はず、大將軍の策に依るところ、申し傳へて候へと申しければ、是れを聞く者共、皆震ひ慄き合へりけり。さる程に、同じ廿四日の卯の尅に、富士川にて源平の矢合とぞ定めける。廿三日の夜に入りて、平家の兵共、源氏の陣を見渡せば、伊豆駿河の人民百姓等が、軍に恐れて、或は野に入り山に隠れ、或は舟に取乗つて、海河に浮びたるが營の火の見えけるを、あな夥しの源氏の陣の遠火の多さよ。實にも野も山も海も河も、皆武者で有りけり。如何せんとぞあきれける。其の夜の夜半許り、富士の沼に幾らもありける水鳥共が、何にかは驚きたりけん、一度にばつと立ちける羽音の、雷大風などの様に聞えければ、平家の兵共、あはや源氏の大軍の向うたるは。昨日齋藤別當が申しつる様に、甲斐信濃の源氏等、富士の裾より、搦手へや廻り候ふらん。敵何十萬騎か有るらん。取籠められては叶ふまじ。爰をば落ちて、尾張河、州俣を逃げやとて、取る物も取敢へず、我れ先にくんとぞ落ち行きける。餘りに周章で噪きて、弓取る者は矢を知らず、箭取る者は弓を知らず、我が馬には人乗り、人の馬には我れ乗り、繋いだる馬に騎つて馳すれば、株を繞

る事限りなし。其の邊近き宿々より、游君游女共召しあつめ、遊び酒もりしけるが、或は頭蹴破られ、或は腰踏折られて、喚き叫ぶ事夥し。同じ二十四日の卯の尅に、源氏廿萬騎、富士川に押寄せて、天も響き大地も揺ぐ許りに、関をぞ三箇度作りける。平家の方には、静まり返つて音もせず。人を入れて見せければ、皆落ちて候と申す。或は敵の忘れたる鎧取つて參る者も有り。或は平家の捨て置きたる大幕取つて歸る者も有り。凡そ平家の陣には、蠅だにも翔り候はずと申す。兵衛の佐、急ぎ馬より降り、甲を脱ぎ、手水嗽をして、王城の方を伏拜み、是れは全く頼朝が私の高名には非ず、偏に入幡大菩薩の御計なりとぞ宣ひける。聽て打取る所なればとて、駿河の國をば一條。次郎忠頼、遠江の國をば安田三郎義定に預けらる。猶も續いて攻むべかりしか共、後も流石覺東なしとて、駿河の國より鎌倉へぞ歸られける。海道宿々の游君游女ども、あな忌々しの討手の大將軍や。軍には見逃をたにあさましき事にするに、平家の人には、聞逃し給へりとぞ笑ひける。さる程に、落書共多かりけり。都の大將軍をば宗盛と云ひ、討手の大將をば權亮と云ふ間、平家をひら屋に詠みなして、

ひらやなるむねもり如何に噪ぐらん、柱と憑むすけを落して。

富士河の瀬々の岩こす水よりも、早くも落つるいせ平氏かな。

又上總の守忠清が、富士河に鎧捨てたりけるをも詠めり。

富士河に鎧は捨てつ墨染の、衣たゞきよ後の世のため。

たゞきよはにげの馬にぞ乗りてげる、上總鞆かけてかひなし。

入道逝去

同廿三日 養和元年正月。

同じ廿三日、院の殿上にて俄に公卿僉議あり。前の右大將宗盛の卿の申されけるは、

今度坂東へ討手は向うたりと云へども、させる高名したる事もなし。今度は宗盛、

大將軍を承つて、東國北國の凶徒等を追討す可き由申されければ、諸卿色代して、

宗盛の卿の申し狀、ゆゝしう候ひなんすとぞ申されける。法皇大に御感有りけり。公

卿殿上人も、武官に備り、少しも弓箭に携はらん程の人々は、宗盛を大將軍として、

東國北國の凶徒等を追討すべき由仰せ下さる。同じ二十七日門出して、既に打立た

上總鞆 上總守と上總より産する鞆とを掛けたる。鞆とは馬の尾から鞍につなぐ組緒をいふ。古今要覽稿には「鞆は面掛胸掛尻掛の三を合せたる名なり」とある。

法皇 後白河院

んとし給ひける夜半許りより、入道相國違例の心地とて、留り給ひぬ。明くる廿八日重病を受け給へりと聞えしかば、京中六波羅闕きあへり。すはしつるは、さ見つる事よとぞ囁きける。入道相國病付き給へる日よりして、湯水も喉へ入れられず、身の内の熱き事は火を焼くが如し。臥し給へる所、四五間が内へ入る者は、熱き堪へ難し。只宣ふ事とは、あたくと計り也。誠に只事共見え給はず。餘りの堪へ難さにや、比叡山より千手井の水を汲下し、石の船に湛へ、其れに下りて寒え給へば、水夥しう湧上つて、程なく湯にぞ成りにける。若しやと笥の水をまかすれば、石や鐵などの焼けたる様に、水迸つて寄付かず。自ら中る水は、焰と成つて燃えければ、黒烟殿中に充ちくゝて、炎渦巻いてぞ揚りける。是や昔法藏僧都と云はれし人、閻王の請に赴いて、母の生所を尋ねしに、閻王憐み給ひて、獄卒を相副へて、焦熱地獄へ遣さる。鐵の門の内へ指し入つて見れば、流星などの如くに、炎空に打上り、多百由旬に及びけんも、是には過ぎじとぞ覺えける。又入道相國の北の方、八條の二位殿の夢に、見給ひける事こそ恐しけれ。喩へば、猛火の夥しう燃えたる

千手井の水は長門本には千手院とあり、考證には「千手觀音ノ關伽トス故に千手水ト名ク」法藏僧都は東大寺の僧。安和二年卒。元亨釋書卷四に詳し。

廬遮那佛は「法身如來名毘盧遮那」應身如來名釋迦」と法華文句にあり。

事の、主もなきを門の内へ遣り入れたるを見れば、車の前後に立ちたる者は、或は牛の面の様なる者も有り、或は馬の様なる者も有り。車の前には、無といふ文字計り顯れたる、鐵の札をぞ打ちたりける。二位殿夢の内に、是は何くより何地へと問ひ給へば、平家太政の入道殿の悪行超過し給へるに依つて、閻魔王宮よりの御迎ひの御車なりと申す。さて、あの札は如何にと問ひ給へば、南閻浮提金銅十六丈の廬遮那佛燒き亡し給へる罪に依つて、無間の底に沈め給ふ可き由、閻魔の應にて御沙汰有りしが、無間の無をば書かれたれ共、未だ間の字をば書かれぬなりとぞ申しける。二位殿夢覺めて後、汗水に成りつゝ、是を人に語り給へば、聞く人皆身の毛豎ちけり。靈佛靈社へ金銀七寶を投げ、馬鞍鎧甲弓箭太刀刀に至る迄、取出で運び出して祈り申されけれ共、叶ふ可し共見え給はず。只男女の君達、跡枕に指し湊ひて、歎き悲み給ひけり。閏二月二日の日、二位殿熱き堪へ難けれ共、入道相國の御枕に依つて、御有様見奉るに、日に副へて頼み少うこそ見えさせおはしませ。物の少しも覺えさせ給ふ時、思し召す事あらば、仰せ置かれよとぞ宣ひける。入道相國、日來

はさしもゆゝしうおはせしか共、今はの時にも成りしかば、世にも苦しげにて、息の下にて宜ひけるは、當家は保元平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚として、丞相の位に至り、榮花已に子孫に残す。今生の望は、一事も思ひおく事なし。只思ひ置く事とは、兵衛の佐頼朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりも又本意無けれ。吾れ如何にも成りなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つ可からず。急ぎ討手を下し、頼朝が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。其れぞ今生後生の孝養にて有らんするぞと宜ひけるこそ、いとど罪深うは聞えし。若しや助かると、板に水を置きて、臥し轉び給へ共、助かる心地もし給はず。同じき四日の日、悶絶壁地して、遂にあつち死にぞし給ひける。馬車の馳せ違ふ音は、天も響き大地も揺ぐ許り也。一天の君萬乗の主の、如何なる御事まします共、是には争か勝るべき。今年は六十四にぞなられる。老死と云ふ可きにはあらね共、宿運忽に盡きぬれば、大法秘法の効驗もなく、神明佛陀の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況んや凡慮に於てをや。身に替り命に代らんと、忠を存ぜし數萬の軍

悶絶壁地二「執金神密迹力士、悶絶壁地」と大唐西域記に見ゆ

死出の山三瀬川二「閻魔王國境死出山」(十王經)「所渡有水一山水瀬、二江深淵、三有橋渡」黄泉中有二「形無常住、只有守屍之鬼、神無常家、獨辨中有之旅、悲哉冥々獨逝、一人不從。」(往生十因)

多田の八幡二加賀國能美郡にあり、蝶屋は石川郡の中。菅生社二同國江沼郡。氣比社飯原二飯

旅は、堂上堂下に竝み居たれ共、是は目にも見えず力にも拘らぬ無常の刹鬼をば、暫時も戦ひ返さず。又歸り來ぬ死出の山三瀬川、黄泉中有の旅の空に、只一所こそ赴かれけれ。され共日來作り置かれし罪業計りこそ、獄卒と成つて、迎ひにも來りけめ。哀なりし事共也。さてしも有る可き事ならねば、同じき七日の日、愛宕にて煙になし奉り、首をば圓實法眼頸にかけ、攝津の國へ下り、經の島にぞ納めける。さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれ共、身は一時の煙と成つて、都の空へ立上り、骸は暫時徘徊ひて、濱の真砂に戯れつゝ、空しき土とぞ成り給ふ。

篠原合戦

木曾殿、聽てそにて諸社へ神領を寄せらる。多田の八幡へは蝶屋の庄、菅生社へは能美の庄、氣比の社へは飯原の庄、白山の社へは横江宮丸二箇所の庄を寄進す。平泉寺へは藤島七郷をぞ寄せられける。去んぬる治承四年八月石橋山の合戦の時、兵衛の佐殿移奉りし武士共、皆逃げ上りて、平家の味方にぞ候ひける。宗徒の人々に

原越前國敦賀郡
白山社加賀國石川郡
横江石川郡
宮丸は越前坂井郡。長井武藏國長井の庄。
平泉寺白山。
藤島越前國吉田郡。

は、長井の齋藤別當實盛、浮巢の三郎重親、俣野の五郎景久、伊藤の九郎助氏、眞下の四郎重直也。是等は皆軍の有らん程、暫く休まんとて、日毎に寄り合ひく、巡酒をしてぞ慰みける。先づ長井の齋藤別當が許に寄合ひたりける日、實盛申しけるは、つらく當世の體を見候ふに、源氏の方はいよく強く、平家の御方は、負け色に見えさせ給ひて候。いざ各々木曾殿へ參らうと云ひければ、皆、さんなうとぞ同じける。次の日又浮巢の三郎が許に寄合ひたりける時、齋藤別當、さても昨日實盛が申し事は、如何に各々と言ひければ、其の中に俣野の五郎景久、進み出でて申しけるは、流石我等は、東國では人に知られて名ある者でこそあれ。吉に附いて、彼方へ參り此方へ參らん事は、見苦しかるべし。人々の御心共をば知り參せぬ候。景久に於ては、今度平家の御方で、討死せんと思ひ切つて候ふぞと云ひければ、齋藤別當嘲笑つて、誠に各々の御心共をがな引かんとてこそ申したれ。實盛も今度北國にて討死せんと思ひ切つて候へば、二度命生きて都へは歸るまじき由、大臣殿へも申し上げ、人々にも其のやうを申し置き候と云ひければ、皆又此の議にぞ同じける。其の

大番役京都警衛の爲に諸國から交替に出役した武士。
大臣殿平宗盛。
故い者經驗のある者。

約束を違へじとや、當座にありける二十餘人の侍共も、今度北國にて一所に死ににけるこそ無慚なれ。平家は加賀國篠原に引退いて、人馬の息をぞ休めける。同じ五月廿日の日、木曾殿五萬餘騎、篠原へぞ向はれける。木曾殿の方より、今井の四郎兼平、先づ五百騎にて馳せ向ふ。平家の方には畠山の庄司重能、小山田の別當有重、宇都の宮の左衛門朝綱、是等は^{大番役}大番役にて折節在京したりけるを。大臣殿、汝らは故い者也。軍の様をも掟てよとて、今度北國へ向けられたり。彼等兄弟三百餘騎で打向ふ。畠山今井、始めは五騎十騎づつ出し合せて、勝負をさせけるが、後には双方亂れ逢うてぞ戦ひける。同じ廿一日の午の尅、草も颯がす照す日に、源平の兵共、我れ劣らじと戦へば、遍身より汗出でて、水を流すに異ならず。今井が方にも、兵多く亡びにけり。畠山、家の子郎等多く討たせ、力及ばで引退く。次に平家の方より、高橋の判官長綱、五百餘騎で馳せ向ふ。木曾殿の方より、樋口の次郎兼光、落合の五郎兼行、三百餘騎で打向ふ。源平の兵共、暫支へて防ぎ戦ふ。され其高橋が方の勢は、國々の驅武者なりければ、一騎も落合はず、我れ先にとぞ落行きける。高橋心は猛

う思へ共、後あばらになりければ力及ばず、只一騎南を指してぞ落行きける。爰に越中の國の住人入善。小太郎行重、よい敵と目を懸け、鞭鎧を合せて馳せ來り、押並べて無手と組む。高橋、入善を掴んで、鞍の高輪に推付け、ちつ共動かさず。さてわ君は何者ぞ、名乗れ、聞かうと云ひければ、越中の國の住人入善。小太郎行重、生年十八歳とぞ名乗りたる。高橋涙をはらくと流いて、あな無慚、去年かくれたる長綱が子もあらば、今年は十八歳ぞかし。わ君ねち切つて捨つべけれ共、さらば助けんとて赦しけり。高橋の判官は味方の勢を待たんとて、馬より下りて息續ぎ居たり。入善も休み居たりけるが、哀れよき敵、我をば助けたれ共、如何にもして討たばやと思ひ居たる所に、高橋是れをば夢も知らず、打解けて物語をぞし居たる。入善は聞ゆる早わざの男にて有りければ、高橋が見ぬ隙に、刀を抜き、立ちあがり高橋の判官が内甲を健にさす。刺されて疼む所に入善が郎等、後れ馳に三騎馳せ來つて落合ひたり。高橋心は猛り思へ共、敵はあまた有り、手は負うつ、運や盡きにけん、そこにて遂に討たれぬ。次に平家の方より武藏。三郎左衛門有國、三百餘騎で喚いてか

く。木曾殿の方より、仁科・高梨・山田の次郎五百餘騎で打向ふ。是も暫支へて防ぎ戦ふ。され共國は、餘りに深入して戦ひけるが、馬をも射させ、歩立になり、甲をも打落され、大童に成つて、矢種皆盡きければ、打物抜いて戦ひけるが、矢七つ八つ射立てられ、敵の方睨まへ、立死にこそ死ににけれ。大將加様になる上は、其の勢皆落ちてぞゆく。

實盛最後

長井別當 長井
莊の別當。

落行く勢の中に、武藏の國の住人、長井。齋藤別當實盛は、存する旨有りければ、赤地の錦の直垂に、萌黄威の鎧著て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作りの太刀を帶き、二十四差いたる截生の矢負ひ、滋藤の弓持つて、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、御方の勢は落ち行け共、只一騎返し合せく防ぎ戦ふ。木曾殿の方より、手塚。太郎進み出でて、あなやさし、如何なる人にて渡らせ給へば、御方の御勢は皆落行き候ふに、只一騎残らせ給ひたるこそ優に覚え候へ。名乗

金刺の光盛金刺とは金度のことにて、大藏省の所管なる度量衡に關する百官名なるべし。
 組んでうすやなうれ「組みてんするよな汝」
 「組みて失すよ已れ」など解あり。

らせ給へと詞をかけければ、先づかう云ふ和殿は誰ぞ。信濃の國の住人、手塚の太郎金刺の光盛とこそ名乗りたれ。齋藤別當、さては互によき敵、但し和殿を下るには非ず、存する旨があれば、名乗る事は有るまじいぞ。よれ、組まう、手塚とて、馳雙ぶる處に、手塚が郎等、主を討たせじと中に隔たり、齋藤別當に押雙べて無手と組む。齋藤別當、哀れ己れは、日本一の剛の者と組んでうすやなうれとて、我が乗つたりける鞍の前輪に押付けて、些も働かさず、頸搔切つて捨ててげる。手塚の太郎、郎等が討たるを見て、弓手に廻りあひ、鎧の草摺引上げて、二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當心は猛う思へ共、軍にはし羸れぬ、手は負うつ、其の上老武者では有り、手塚が下にぞ成りにける。手塚の太郎馳せ來る郎等に頸取らせ、木曾殿の御前に參り、畏つて、光盛こそ奇異の曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと思候へば、錦の直垂を着て候。又大將軍かと思候へば、續く勢も候はず。名乗れくと責め候ひつれ共、遂に名乗り候はず。聲は坂東聲にて候ひつると申しければ、木曾殿、哀れ是れは齋藤別當にて有るござんなれ。其れならんには、義仲が上野へ越

白髮の糟尾糟尾は糟生、糟毛をいふ。斑白の頭髮也。

きたりし時、稚目に見しかば、白髮の糟尾なつしぞかし。今は早七十にも餘り、白髮にこそ成りぬらん、鬚鬚の黒いこそ奇しけれ。樋口の次郎兼光は、年來馴れ遊んで、見知りたるらん。樋口召せとて召されける。樋口の次郎只一目見て、あな無慚、齋藤別當にて候ひけりとて、涙を流す。木曾殿、其れならんには、早七十にも餘り、白髮にこそ成りぬらん、鬚鬚の黒いは如何にと宣へば、良有つて、樋口の次郎涙を押へて申しけるは、さ候へば、其の様を申し上げんと仕り候ふが、餘りに哀れに覚え候ひて、先づ不覺の泪のこぼれ候ひけるぞや。されば弓矢とりは聊かの所にても、思出の言をば、兼ねて使ひ置く可き事にて候ひけるぞや。齋藤別當、常は兼光に逢うて、物語し候ひしは、六十に餘りて、軍の陣へ向はん時は、鬚鬚を黒う染めて、若やがうと思ふ也。其の故は、若殿ばらに争うて、先を懸けんも長けなし、又老武者とて、人の慢らんも口惜しかる可しと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へと申しければ、木曾殿さも有るらんとて、洗はせて御覽すれば、白髮にこそなりにけれ。又齋藤別當、錦の直垂を着ける事も、最後の暇中に大臣殿

昔の朱買臣は漢書朱買臣傳に「上拜買臣會稽太守、上謂買臣曰、富貴不歸故郷、如衣綈夜行、朽ちもせぬ空しき名のみ、朽ちもせぬ其の名計りをとどめ置きて枯野の薄形見とぞ見る、(新古今集・西行)流を盡して漁る、(兼季曰、竭澤而漁、豈不獲

へ参りて、かう申せば實盛が身一つにては候はね共、先年坂東へ罷り下り候ひし時、小鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射すして、駿河の蒲原より逃上りて候ひし事、老の後の恥辱、只此の事に候。今度北國へ罷り下り候はば、定めて討死仕り候ふ可し。實盛もとは越前の國の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏の國長井に居住仕り候ひき。事の譬の候ふぞかし、故郷へは錦を著て歸ると申す事の候へば、何か苦しい候ふ可き、錦の直垂を御免候へかすと申しければ、大臣殿、優しうも申したりけるものかなとて、錦の直垂を御免有りけるとぞ聞えし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今の齋藤別當實盛は、其の名を北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ空しき名のみ留め置いて、骸は越路の末の塵と成るこそ哀れなれ。去んぬる四月十七日、平家十萬餘騎にて、都を出でし事柄は、何面を向ふ可しとも見えざりしに、今五月下旬に都へ歸り上るには、その勢纔に二萬餘騎。流を盡して漁る時は、多くの魚を得ると云へ共、明年に魚なし、林を焼いて獵る時は、多くの獸を得ると云へ共、明年に獸なし。後を存じて少々は残さるべかりけるものと、申す人々もあり

得、而明年無魚、焚、獲、而、田、豈、不、獲、得、而、明、年、無、獸、乎、呂、氏、春、秋、

けるとかや。

福原落

積善の餘慶、積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、とは易の傳にあり。一樹の蔭に宿るも云々、宿、一樹下、汲、一河流、一夜同宿、日夫妻、皆是先世結縁、と説法明眼論に出づ。

平家は福原の舊里に著いて、大臣殿、然る可き侍老少數百人召して宣ひけるは、積善の餘慶家に盡き、積悪の餘殃身に及ぶが故に、神明にも放たれ奉り、君にも捨てられ進らせて、帝都を出でて旅泊に漾ふ上は、何の頼みか有る可きなれ共、一樹の蔭に宿るも、先世の契淺からず、同じ流を掬ぶも、他生の縁猶深し。況んや汝等は一且隨ひ附く門客に非ず、累祖相傳の家人也。或は近親の好、他に異なるも有り、或は重代芳恩是れ深きも有り。家門繁昌の古は、其の恩波に依つて、私を顧みき。何ぞ今其の芳恩を酬はざらんや。然れば十善帝王、三種の神器を帶して渡らせ給へば、如何ならん野の末、山の奥迄も、行幸の御供申して、如何にも成りなんとと思はずやと宣へば、老少皆涙を押へて、奇しの鳥獸も恩を報じ徳を酬ふ心は候ふなり。況んや人倫の身として、争か其の理を存知仕らでは候ふべき。就中弓箭馬上に携る

二心あるを平治物語に「凡そ武士は二心あるを耻とす」

深更空夜閑 後、深夜空閑 明初、深更軒白月 集の句、和漢期 旅の床の草枕 露のけさを契 ありやおきし草枕 秋のたびねに 俊成女 鶯の瓦玉の 華重、翡翠瓦冷霜 誰與共、(長恨 歌) 秋の草門を閉づ 瓦に松生ひ垣に

葛茂れり 有衣兮瓦 有松(白氏文集) 臺傾いて苦むせ 猶殘、砌(白氏文集) 簾絶え閑露也 簾絶(白氏文集) 袖に宿かる月の 影に光の宿るら だててし身をへ (新古今集) 俊成

習ひ、二心あるを以て恥とす。其の上此の廿餘年が間、妻子を育み、所従を顧み候ふ事も、併ら君の御恩ならずと云ふ事なし。然れば日本の外、新羅百濟高麗契丹、雲の終海の終迄も行幸の御供仕り、如何にも成り候はんと、異口同音に申したりければ、人々皆頼もしげにぞ見給ひける。さる程に平家は、福原の舊里にして、一夜をぞ明されける。折節秋の月は下の弦なり。深更宮夜閑にして、旅寝の床の草枕、露も涙に争ひて、只物のみぞ悲しき。何歸るべし共覺えねば、故入道相國の造りおき給へる福原の所々を見給ふに、春は花見の岡の御所、秋は月見の濱の御所、泉殿・松陰殿・馬場殿・二階の棧敷殿・雪見の御所・萱の御所・人々の館ども、五條の大納言國綱の卿の承つて造進せられし里内裏、鴛鴦の瓦玉の甃、何れもく三年が程に荒れはて、舊苔道を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ垣に葛茂れり。臺傾いて苦むせり。松風のみや通ふらん。簾絶え閑露也。月影のみぞ差入りける。明けぬれば福原の内裏に火を懸けて、主上を始め進らせて、人々皆御船に召す。都を出でし程こそ無ければ共、是も名殘は惜しかりけり。海士の焼く藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々に寄

する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきりぎりす、惣て目に見耳に觸るゝ事の、一つとして哀れを催し、心を傷ましめずといふ事なし。昨日は東關の麓に鑣を雙べて十萬餘騎、今日は西海の浪の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てゝ、月海上に浮べり。極浦の浪を分け、潮に引かれて行く船は、半天の雲に遡る。日數経れば、都は山川程を隔てて、雲井の餘所にぞ成りにける。遙々來ぬと思へども、只盡させぬものは涙なり。波の上に白き鳥の簇れ居るを見給ひては、彼れならん、在原のなにがしの、隅田河にて言問ひけん、名も昵まじき都鳥かなと哀れ也。壽永二年七月二十五日に、平家都を落ち果てぬ。

老馬

大臣殿、安藝の右馬の助能行を使者にて、人々の許へ宣ひ遣されけるは、九郎義經こそ、三草の手を攻破つて、既に亂れ入る由聞え候。山の手が大事で候へば、各々

三草 播磨國賀茂郡にある高原こゝに義經、資盛らを破る。

一の谷の後鴨越 一の谷は谷の廣二十間許谷口より波打際まで六十間餘あり(略)谷の上方に壽永帝の内裡跡あり、方廿四間許り、其峯を鐵拐といひ嶺北に鴨越あり (名所圖會)

向はれ候ひなんやと宣ひ遣されたりければ、皆辭し申されけり。能登殿の許へも、度々の事では候へ共、今度もまた御邊向はれ候ひなんやと、宣ひ遣されたりければ、能登殿の返事に、軍は左様に獵漁などの様に、足立の好からう方へは向はう、惡しからん方へは向はじなど候はんには、軍に勝つ事はよも候はじ。幾度でも候へ、強からん方へは教經承つて、罷り向ひ候ふべし。一方打破つて進らせ候はん。御心安う思し召され候ふべしと申されたりければ、大臣殿斜ならず悦び給ひて、越中前司盛俊を先として、一萬餘騎能登殿にぞ附けられける。兄越前三位通盛の卿を相具して、山の手へぞ向はれける。此の山の手と申すは一の谷の後鴨越の麓也。通盛の卿、能登殿の假屋へ、北の方迎ひ寄せ給ひて、最後の名残惜まれけり。能登殿大きに怒つて、北の手は大事の方とて、教經向けられ候ふが、誠に強ふ候ふ也。只今も上の山より敵落す程ならば、取る物も取りあへ候ふまじ。縦ひ弓をば持つたり共、矢を番げずば惡しかるべし。縦ひ矢をば番げたり共、引かすば猶も惡しかる可し。まして左様に打解けて渡らせ候ひては、何の用に合はせ給ふ可きと諫められて、通盛の卿實

雀の松原御影の松 雀の松原御影の松は武庫郡の海濱御影の松はいまの御影町。昆陽野 攝津國武庫郡。更け行くまゝに 月影は山のはいづる宵よりもふけゆく空ぞてり増りける。(後拾遺集) 晴れたる空の星 晴るゝ夜の星か河べの螢かも、我すむ方の螢の焚火か (伊勢物語)

にもとや思はれけん、急ぎ物の具して、人をば歸し給ひけり。五日の日の暮方に、源氏昆陽野を立ちて、漸生田の森へ攻近づく。雀の松原、御影の松、昆陽野の方を見渡せば、源氏手々に陣を取りて、遠火を焼く。更け行くまゝに詠むれば、山の端出づる月の如し。平家も遠火焼けやとて、生田の森にも形の如くぞ焼いたりける。明け行く儘に見渡せば、晴れたる空の星の如し。是や昔河邊の螢と詠じ給ひけんも、今こそ思ひ知られけれ。加様に源氏は、あそこに陣取つては馬休め、爰に陣取つては馬飼ひなどしける程に急がず。平家の方には、今や寄す、今や寄すると相待つて、安心もせざりけり。同じ六日の日の曙に、大將軍九郎御曹司義經、一萬餘騎を二手に分けて、土肥の次郎實平に七千余騎を差



副へて、一。谷の西の木戸口へ指遣す。我が身は三千餘騎で、一。谷の後嶋越を落さんとて、丹波路より搦手へこそ向はれけれ。兵共、是は聞ゆる惡所にて有んなり。同じう死ぬる共、敵に逢うてこそ死にたけれ。惡所に落ちては死にたからず。哀れ此の山の案内者やあると口々に申しければ、爰に武藏の國の住人、平山の武者所進み出でて、季重こそ此の山の案内能く存知仕つて候へと申しければ、御曹司、和殿は東國育ちの者の、今日始めて見る西國の山の案内者、大きに誠しからすと宣へば、季重重ねて申しけるは、こは御説共覺え候はぬもの哉。吉野泊瀬の花をば見ね共歌人が知り、敵の籠つたる城の後の案内をば、剛の武者が知り候とぞ申しける。是又傍若無人にぞ聞えし。又武藏の國の住人、別府の小太郎清重とて、生年十八歳になりけるが、進み出でて申しけるは、父にて候ひし義重法師が教へ候ひしは、喩へば山越の狩をせよ、又は敵にも襲はれよ、深山に迷ひたらんする時は、老馬に手綱結んで打懸け、先に追つ立てて行け、必ず道へ出でうするぞとこそ教へ候ひしかと申しければ、御曹司、優しうも申したるもの哉。雪は野原を埋め共、老いたる馬ぞ道は

老いたる馬ぞ道は知る馬之智可
 曰老馬之智可
 用也乃教老
 馬而隨之遂
 得道之春秋後
 桓公孤竹國を
 討ちて歸途雪中
 に道迷ひし時
 管仲馬を放つて
 道を知りし故事
 鏡鞍銀の前後
 の輪に銀の真鍮
 などの浦寸金を
 はりて磨きしも
 の。の雪だに消え
 松の雪だに消え
 やらで松の雪だ
 まには松の雪だ
 にきえなくに都
 は野への若菜つ
 みけり）古今

知ると云ふ様有りとして、白茸毛なる老馬に、鏡鞍置き、白轡番げ、手綱結んで打懸け、先に追つ立てて、未だ知らぬ深山へこそ入り候へ。比は二月初の事なれば、峯の雪村消えて、花かと思ゆる所も有り。谷の鶯音信れて、霞に迷ふ所も有り。登れば白雪皓々として聳え、下れば青山峨々として岸高し、松の雪だに消えやらで、苔の細道幽なり。嵐にたぐふ折々は、梅花とも又疑はれ、東西に鞭を揚げ、駒を早めて行く程に、山路に日暮れぬれば、皆下り居て陣を取る。爰に武藏坊辨慶、或老翁一人具して参りたり。御曹司、あれは如何にと宣へば、是は此の山の獵師で候と申しければ、さては案内能く知つたるらん。争か存知仕らでは候ふべき。御曹司、さぞ有るらん。是より平家の城郭一。谷へ落さうと思ふは如何に。努々叶ひ候ふまじ。凡そ三十丈の谷、十五丈の岩崎などをば、容易う人の通う可き様も候はず。其の上、城の内には、落穴をも掘り、菱をも植ゑて待ち進らせ候ふらん。まして御馬などは思ひも寄り候はずと申しければ、御曹司、さて左様の所は鹿は通ふか。鹿は通ひ候、世間だに暖に成り候へば、草の深さに臥さんとして、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だ

播磨の印南野に
印南野は加古郡
にあり、方三里
餘の原野なり。

に寒う成り候へば、雪のあきりに食まんとて、丹波の鹿は播磨の印南野へ越え候とぞ申しける。御曹司、さては馬場ござんなれ。鹿の通はんする所を、馬の通はざるべき様や有る。さらば懸て汝案内せよと宣へば、此の身は年老いて如何にも叶ひ候ふまじと申す。さて汝に子は無いか。候ふとて、熊王とて生年十八歳に成りける小冠者を奉る。御曹司懸て、髻取上げさせ給ひて、父をば鷲尾の庄司武久と云ふ間、是をば鷲尾の三郎義久と名乗らせて、一谷の先打させ、案内者にこそ具せられけれ。平家亡び、源氏の代に成りて後、鎌倉殿と中違うて、奥州へ下り討たれ給ひし時、鷲尾の三郎義久と名乗つて、一所で死ににける兵也。

遠 矢

さる程に源平兩方陣を合せて関を作る。上は梵天迄も聞え、下は堅牢地神も驚き給ふらんとぞ覺えたる。関も静まりしかば、新中納言知盛の卿、船の屋形に進み出で、大音聲を揚げて、天竺震旦にも、日本我が朝にも、雙なき名將勇士と云へ共、

魚の木に上つた
る孟_二子、梁悉
王「猶_三縁_レ木而
求_レ魚也」とあ
り。

運命盡きぬれば力及ばず。され共名こそ惜しけれ。東國の者共に弱氣見するな。何の爲にか命を惜む可き。軍ようせよ、者共。只是れのみぞ思ふ事よと宣へば、飛驒の三郎左衛門景經、御前に候ひけるが、是れ承れ侍共とぞ下知しける。上總の悪七兵衛進み出でて、其れ坂東武者は、馬の上にてこそ口はき、候ふ共、船軍をば何訓練し候ふべき。譬へば魚の木に上つたるでこそ候はんすらめ。一々に取つて、海に漬けんものをとぞ申しける。越中次郎兵衛進み出でて、同じうは大將の源九郎と組合ひ給へ。九郎は背の小さき男の、色の白かなるが、當門齒の少し指し出でて、殊にしかんなるぞ。但し鎧直垂を常に著替ふなれば、きつと見分け難かなりとぞ申しける。悪七兵衛重ねて、何條、其の小冠者め、縦ひ心こそ猛く共、何程の事か有る可き。しや片脇に挟んで、海に入れなんものをとぞ申しける。新中納言知盛の卿は、加様に下知し給ひて後、小船に乗り、大臣殿の御前におはして申されけるは、御方の兵共、今日はよう見え候。但阿波の民部重能計りこそ、心替したると覺え候へ。頭を刎ね候はばやと申されければ、大臣殿、さしも奉公の者であるに、見えたる事もな

木蘭地黄紅赤の雜色に黒味をおびたる色。
洗革の鎧薄染にしたる革にて威したる鎧なり

くして、争か頭をば刎ねらる可き。重能召せとて召されけり。重能其の日の装束には、木蘭地の直垂に、洗革の鎧著て、御前に畏つてぞ候ひける。大臣殿、如何に重能は、心替りしたるか。今日は悪う見ゆるぞ。四國の者共に、軍ようせよと下知せよ、臆したんなと宣へば、何條臆し候ふ可きとて、御前を罷り立つ。新中納言は、太刀の柄碎けよと握るまゝに、あつばれ重能めが、頸打落さばやと、大臣殿の御方を、頻に見參らさせ給へ共、御許され無ければ、力及び給はず。さる程に、平家は千餘艘を三手に作る。先づ山賀の兵藤次秀遠、五百餘艘で先陣に漕向ふ。松浦黨三百餘艘で二陣に續く。平家の君達たち、二百餘艘で三陣に續き給へり。中にも山賀の兵藤次秀遠は、九國一の強弓精兵なりければ、我れ程こそなけれ共、普通さまの精兵五百人すぐつて、船々の艫舳に立て、肩を一面に雙べて、五百の矢を一度に放つ。源氏の方にも三千餘艘の船なりければ、勢の數、さこそは多かりけめ共、あそこ爰より射ける程に、何くに精兵有り共見えざりけり。中にも大將軍源九郎義經は、真先に進んで戦ひけるが、楯も鎧も堪へずして、散々に射しらまさる。平家御方勝ち

白篋「白篋は焦しもさわしもせざる也、色白きなり」(貞丈雜記)
鶴の本白「鶴の本白の羽と鴻の白羽とを交へ作りし矢。」
沓卷「一束計り置いて」沓卷は矢足とも書き口巻とも云ふ。「くつ巻はねた巻の下の方を巻く也」(貞丈雜記)

ぬとて、頻に攻鼓を打ちて、喚き叫んで攻戦ふ。源氏の方には、和田の小太郎義盛、船には乗らず馬に打乗り、鎧の鼻踏反し、平家の勢の中を差しつめ引きつめ散々に射る。元より精兵の手きゝにて有りければ、三町が内の者をば外さず、強う射けり。中にも殊に遠う射たると覺しき矢を、其の矢賜らんとぞ招きける。新中納言知盛の卿、此の矢を抜かせて見給へば、白篋に鶴の本白、鴻の羽割合せて作いだる矢の、十三束三伏有りけるに、沓卷より一束計り置いて、和田の小太郎平義盛と、漆にてぞ書付けたる。平家の方にも精兵多しといへ共、流石遠矢射る仁や無かりけん、良有りて、伊豫の國の住人、仁井の紀四郎親清、此の矢を賜つて射返す。是も三町餘を、つと射渡して、和田が後一段許りに控へたる、三浦の石左近の太郎が、弓手の肘に健にこそ立つたりけれ。三浦の人共寄合ひて、あな悪しや、和田の小太郎が、我れ程の精兵なしと心得て、恥かきぬるをかしさよと笑ひければ、義盛安からぬ事なりとて、今度は小船に乗りて漕出し、平家の勢の中を、差攻め引きつめ散々に射ければ、者共多く手負ひ射殺さる。良有りて澳の方より、判官の乗り給ひたる船に、白篋の大

山鳥の尾山鳥の尾は、とがり、かぶら矢、かりまたがらの小羽に付くるを本儀とす。

瓜搥つて瓜搥つては、瓜先にて、性の強弱を、検するなり。我が大手に押握つて我が大手に押握つては、十五東三伏に、矢の主の手にて、通例のなれども、十五東の手にては、十五東も、あるなり。九尺九尺は、普通の弓は七尺五寸。

矢を一つ射立て、是も和田が様に、其の矢賜らんと招きけり。判官此の矢を抜かせて見給へば、白筈に山鳥の尾を以て作いだる矢の、十四東三伏有りけるに、沓卷より一束計り置いて、伊豫の國の住人、仁井の紀四郎親清と、漆にてぞ書付けたる。判官、後藤兵衛實基を召して、御方に此の箭射つべき仁は誰か有ると宣へば、甲斐源氏に淺利の與一殿こそ、精兵の手きゝにて候へと申しければ、判官、さらば與一呼べとて召されけり。淺利の與一出で來たり。判官、如何に與一、此の矢只今澳より射て候ふが、其の矢賜らんと招き候。御邊射られ候ひなんやと宣へば、賜りて見候はんとて、取りて瓜搥つて、是は筈が弱う候。矢束も少し短う候へば、同じうは義成が具足にて仕り候はんとて、塗筈に黒ほる作いだる大の矢の、我が大手に押握つて、十五東三伏有りけるを、塗籠藤の弓の、九尺許り有りけるに、取つて番ひ、能つ引いてひやうと放つ。是も四町餘を、つと射渡いて、大船の舳に立ちたる、仁井の紀四郎親清が眞唯中を、ひやうつばと射て、船底へ眞倒に射す。もとより此の淺利の與一は、精兵の手きゝにて、三町が中を走る鹿をば、外さず強う射けるとぞ聞えし。其

の後は源平の兵共、互に面も振らず、命も惜まず攻戦ふ。され共平家の御方には、十善帝王三種の神器を帶して渡らせ給へば、源氏は如何あらんすらんと危う思ふ所に、暫は白雲かと覺しくて、虚空に漾ひけるが、雲にては無かりけり。主もなき白旗一旒舞下つて、源氏の船の舳に、棹付の緒の、さはる程にぞ見えたりける。

先帝の御入水

判官、是は八幡大菩薩の、現じ給へるにこそと悦んで、甲を脱ぎ、手水嗽して、是れを拜し奉り給ふ。兵共も皆此くの如し。又澳より鯨と云ふ魚、一二千這うて、平家の船の方へぞ向ひける。大臣殿小博士晴信を召して、鯨は常に多けれ共、未だ加様の事なし。急度勘へ申せと宣へば、此の鯨はみ歸り候はば、源氏亡び候ひなんす、はみ通り候はば、御方の御軍危う覺え候と、申しも果てぬに、平家の船の下を、直に這うてぞ通りける。世の中は今かくとぞ見えし。阿波の民部重能は、此の三箇年が間、平家に付いて忠を致したりしか共、子息田内左衛門教能を生捕にせられて、今

は叶はじと思ひけん、忽に心替して、源氏と一つに成りにけり。新中納言知盛の卿、あつばれ重能めを、斬つて捨つべかりつるものと、後悔せられけれ共甲斐ぞなき。平家の方の謀には、好き武者をば兵船に乗せ、雑人原をば唐船に乗せて、源氏心憎さに唐船を改めば、中に取籠めて討たんと、仕度せられたりしか共、重能が返忠の上は、唐船には目も懸けず、大將軍の窶し乗り給へる兵船をば攻めたりける。其の後は四國鎮西の兵共、皆平家を背いて、源氏に附く。今まで随ひ附きたりしか共、君に向ひて弓を引き、主に對して太刀を抜く。彼の岸に付かんとすれば、波高うして叶ひ難し、此の汀に寄せんとすれば、敵箭鋒を汰へて待懸けたり。源平の國諍、今日を限とぞ見えたりける。さる程に、源氏の兵共、平家の船に乗移りければ、水平楫取共、或は射殺され、或は斬殺されて、船を直すに及ばず、船底に皆倒れ臥しにけり。新中納言知盛の卿、小船に乗つて、急ぎ御所の御船へ參らせ給ひて、世の中は今のかうと覺え候。見苦しき者をば、皆海へ入れて、船の掃除召され候へとて、掃いたり、拭うたり、塵拾ひ、艫舳に走り廻つて、手づから掃除し給ひけり。女房

鈍色の二衣二枚、淺黒色の二枚裏、喪服なり。
練袴練絹の袴、盛衰記には白袴とあり。法中装束抄に「白裳ハ必練テ粉ヲ付張ニセル也」

達、や、中納言殿、軍の様は如何にや如何にと問ひ給へば、只今珍しき吾妻男をこそ、御覽ぜられ給はんすらめとて、からくと笑はれければ、何條只今の戯ぞやとて、聲々に喚き叫び給ひけり。二位殿は日來より思ひ設け給へる事なれば、鈍色の二衣打被き、練袴の傍高く取り、神璽を脇に挟み、寶劔を腰にさし、主上を抱き參らせて、我れは女なり共、敵の手には掛るまじ。主上の御供に參る也。御志思ひ給はん人々は、急ぎ續き給へやとて、静々と舩へぞ歩み出でられける。主上今年は八歳にぞ成らせ御座す。御年の程より、遙にねびさせ給ひて、御形嚴しう、傍も照り耀く許りなり。御髮黒うゆらくと、御背過ぎさせ給ひけり。主上あきれたる御有様にて、抑々尼前、我れをば何地へ具して、行かんとはするぞと仰せければ、二位殿幼き君に向ひ參らせ、涙をばらくと流いて、君は未だ知し召され侍はずや。先世の十善戒行の御力に依つて、今萬乗の主とは生れさせ給へ共、惡縁に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ侍ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ御座し、其の後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎に預らんと誓はせ御座して、御念

山鳩色の袍に、
黄色の襦袢に、
用ひらるる。波に
分廻の荒き波に
の業力によりて
受分隨ひて果を
ふく大乗義章の
語也。不老長生
期集に「長生
殿真秋宮、不
老門前、日月
とも支那宮門
の梵高臺、梵
王の宮、喜見
釋提喜見の宮
九族の外祖、
母、從母子、
妻、母、姑、
姉、妹、の子、
子、同族。

佛侍ふべし。此の國は粟散邊土と申して、物憂き境にて侍ふ。あの波の下にこそ、極樂淨土とて、目出度き都の侍ふ。其れへ具し參らせ侍ふぞと、様々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣に、鬘結はせ給ひて、御涙に溺れ、些う美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に、御暇申させ御座し、其の後西に向はせ給ひて、御念佛有りしかば、二位殿聽て抱き參らせて、波の底にも、都の侍ふぞと慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しき哉無常の春の風、忽に華の御姿を散し、痛しき哉分段の荒き波、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名付けて、長き栖かと定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれ共、未だ十歳の内にして、底の水屑と成らせ御座す、十善帝位の御果報、申すもなか／＼愚かなり。雲上の龍降つて、海底の魚となり給ふ。大梵高臺の閣の上、釋提喜見の宮の内、古へは棘門棘路の間に、九族を靡かし、今は舟の中波の下にて、御身を一時に亡し給ふこそ悲しけれ。

後篇

鶴

抑々此の源三位入道頼政は、攝津の守頼光に五代、參河の守頼綱が孫、兵庫の守仲政が子なりけり。保元の合戦の時も、御方にて先を懸けたりしか共、させる賞にも預からず。又平治の逆亂にも、既に親類を捨てて參じたりしか共、恩賞是れ疎なりき。大内守護にて年久しうありしか共、昇殿をば許されず。年闌け齡傾いて後、述懐の和歌一首詠みてこそ、昇殿をばしたりけれ。

人知れぬ大内山の山守は、木隠れてのみ月を見るかな。

是れに依つて昇殿許され、正下の四位にて暫くありしが、猶三位を心にかけて、上るべき便り無き身は木の下に、しるを拾ひて世を渡るかな。

さてこそ三位にしたりけれ。聽て出家して、源三位入道頼政とて、今年は七十五に

頼光に五代、
基、滿仲、頼光
頼國、頼綱、
仲政、頼政。

仁平の比ほひ
十訓抄参照。

寛治の比は宇治
拾遺物語参照。

鳴弦すること三
度は鳴弦三度古
例なり。

ぞ成られける。此の人一期の高名とおぼしき事は、多き中にも、殊には仁平の比ほひ、近衛の院御在位の御時、主上夜なく、怯えさせ給ふ事有りけり。有驗の高僧貴僧に仰せて、大法秘法を修せられければ、其の驗なし。御惱は丑の尅許りの事なるに、東三條の森の方より、黒雲一村立來つて、御殿の上に覆へば、必ず怯えさせ給ひけり。是れに依つて、公卿僉議有りけり。去んぬる寛治の比ほひ、堀河の院御在位の御時、主上しかの如く、怯え魂ぎらせ給ひけり。其の時の將軍義家の朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及んで、鳴弦する事三度の後、高聲に前の陸奥の國守、源の義家と名乗りたりければ、聞く人身の毛豎つて、御惱必ず怠らせ給ひけり。然れば則ち先例に任せて、武士に仰せて警固有るべしとて、源平兩家の兵の中を、選ませられけるに、此の頼政をぞ選び出されたりける。其の時は未だ兵庫の守にて候はれけるが、申されけるは、昔より朝家に武士を置かるゝ事は、逆反の者を退け、違勅の輩を亡さんが爲なり。目にも見えぬ變化の物仕れと仰せ下さるゝ事、未だ承り及ばすと申しながら、勅宣なれば召に應じて參内す。頼政憑み切つたる郎

母衣の風切作い
だりけるは鳥の
兩翼の下に連れ
る羽の中風切と
いふ羽にて作い
だる矢。

等、遠江の國の住人、猪の早太に、母衣の風切作いだりける矢負はせて、唯一人ぞ具したりける。我が身は二重の狩衣に、山鳥の尾を以て作りたりける鋒矢二筋、滋藤の弓に取添へて、南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手挟みける事は、雅頼の卿其の時は、未だ左少辨にておはしけるが、變化の者仕らんする仁は、頼政ぞ候ふらんと選び申されたる間、一の矢にて變化の物射損する程ならば、二の矢には、雅頼の辨の、しや頸の骨を射んと也。案の如く日來人の申すに違はず、御惱の刻限に及んで、東三條の森の方より、黒雲一村立來つて、御殿の上に覆いたり。頼政屹と見上げたれば、雲の中に怪しき物の姿あり。射損する程ならば、世に有る可しとも覺えず。さり乍ら矢取つて番ひ、南無八幡大菩薩と、心の中に祈念して、能つ引いて、ひやうと放つ。手答して、はたと中る。得たりやをうと矢叫をこそしてんげれ。猪の早太つと寄り、落つる處を取つて押へ、柄も拳も透れくと、續け様に九刀ぞ刺いたりける。其の時上下手々に火を燃して、是れを御覽じ見給ふに、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにて、鳴く聲鶉にぞ似たりける。怖しなども愚なり。主上御感

宇治の左大臣
左大臣従一位
藤原頼長。

の餘りに、獅子王と申す御劍を下さる。宇治の左大臣殿是れを賜り次いで、頼政に賜ばんとて、御前の階を半許り下りさせ給ふ折節、比は卯月十日餘りの事なれば、雲井に郭公、二聲三聲音信て通りければ、左大臣殿、

郭公名をも雲井にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝をつき、左の袖を播げて、月を少し傍目にかけつ、

弓はり月のいるにまかせて

と仕り、御劍を賜りて罷り出づ。此の頼政の卿は、武藝にも限らず、歌道にも又勝れたりとぞ時の人々感じ合はれける。さて彼の變化の物をば、空舟に入れて流されけるとぞ聞えし。

又應保の比ほひ、二條の院御在位の御時、鶯といふ化鳥、禁中に鳴いて屢々宸襟を惱し奉る事有りけり。然れば先例に任せて、頼政をぞ召されける。比は五月二十日餘り、まだ宵の事なるに、鶯只一聲音信れて、二聲共鳴かざりけり。目指すとも知

らぬ闇では有り、姿形も見えざりければ、矢所を如何とも定め難し。頼政が策に、先づ大鎗取つて番ひ、鶯の聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。鶯鎗の音に驚いて、處空に暫ぞひゝめいたる。次に小鎗取つて番ひ、ひいふつと射切つて、鶯と並べて前にぞ落したる。禁中さゞめき渡つて、頼政に御衣を被けさせおはします。今度は大炊の御門の右大臣公能公これを賜りついで、頼政に被けさせ給ふとて、昔の養由は、雲の外の雁を射き。今の頼政は、雨の中の鶯を射たりとぞ感ぜられける。

五月闇名をあらはせる今宵哉、

と仰せられかけたりければ、頼政、

たそがれ時も過ぎぬと思ふに。

と仕り、御衣を肩にかけて罷り出づ。其の後伊豆の國賜り、子息仲綱受領になし、我が身三位して丹波の五箇の庄、若狭の東宮河を知行して、さておはすべかりし人の、由なき謀叛起いて、宮をも失ひ參らせ、我が身も子孫も亡びぬることうたてけれ。

緒 環

豊後の國は刑部卿三位頼資の卿の國なりけり。子息頼隆の朝臣を代官に置かれたりけるが、京より頼經の許へ使者を立て、平家は已に神明にも放たれ奉り、君にも捨てられ進らせて、帝都を出で、波の上に漂ふ落人となれり。然るを九州二島の者共が請取りて、もてあつかふらん事こそ然るべからね。當國に於ては一向隨ふべからず。東北國と一味同心して、九州の中を追ひ出し奉る可き由、宣ひ遣はされたりければ、是を緒方の三郎惟義に下知す。彼の惟義と申すは、怖しき者の末にてぞ候ひける。喩へば昔豊後の國の或片山里に女有りき。或人の獨娘、夫も無かりけるが許へ、男夜々通ふ程に、年月も隔たれば、身も直ならず成りぬ。母是れを怪んで、汝が許へ通ふ者は如何なる者ぞと問ひければ、來るをば見れ共歸るを知らずとぞ云ひける。さらば朝歸りせん時、標を付けて繋いで見よとぞ教へける。娘母の教に隨ひて、朝歸しける男の、水色の狩衣を著たりける頭上に針を刺し、賤の緒環といふ物

緒環 倭名類聚抄、織機具「卷子、閉蘇、續麻四卷名也」

を付けて、經て行く方を繋いで見れば、豊後の國に取つても、日向の國の境、姥嶽といふ嶽の下、大なる岩屋の内へぞ繋ぎ入れたる。女岩屋の口にイんで聞きければ、大なる聲して呻ひけり。女申しけるは、御姿を見進らせんが爲に、わらはこそ是まで參つて侍へと云ひければ、岩屋の内より答へて云く、我は是れ人の姿には非ず、汝我が姿を見ては、肝魂も身に添ふまじきぞ、胎める所の子は男子なるべし。弓矢打物取つては九州二島に肩を雙ぶる者有るまじきぞとぞ教へける。女重ねて、縦ひ如何なる姿にても有らばあれ、日來の好争でか忘るべきなれば、互の姿今一度見もし見えらんと云ひければ、さらばとて岩屋の内より臥長は五六尺、跡枕邊は十四五丈も有るらんと覺ゆる大蛇にて、動搖してぞ這ひ出でたる。女肝魂も身に添はず、召具したる十餘人の所従共、喚き叫んで逃げ去りぬ。頭上に刺すと思ひし針は、大蛇の喉笛にぞ立つたりける。女歸りて、程なく産をしたりければ、男子にてぞ有りける。母方の祖父育て、見んとて育てたれば、未だ十歳にも満たざるに、背大きう顔長かりけり。七歳にて元服せさせ、母方の祖父を大太夫といふ間、是をば大太と

こそ附けたりけれ。夏も冬も、手足に隙なく砥破れたりければ、砥大太とも云はれ
けり。彼の惟義は、件の大太には五代の孫也。かゝる怖しき者の末なればにや、國
司の仰せを院宣と號して、九州二島に廻文をしたりければ、然るべき者共も惟義に
皆従ひ附く。件の大蛇は、日向國に崇められさせ給ふ。高知尾の明神の神體なりと
ぞ承る。

猫 間

泰定都へ上り、院參して、御坪の内に畏つて、關東の様を具に奏聞申したりけれ
ば、法皇大きに御感有りけり。公卿も殿上人も笑壺に入らせおはしまし、如何なれ
ば、兵衛の佐はかうこそゆゝしうおはせしか。當時都の守護して候はれける木曾義
仲は、似も似ず悪しかりけり。色白う眉目は好い男にて有りけれ共、立居の振舞の
無骨さ、言ひたる詞續の頑なる事限りなし。理哉、二才より三十に餘る迄、信濃國
木曾と云ふ片山里に住馴れておはしければ、何かはよかるべき。其の比猫間の中納

泰定左史生中
原泰定。頼朝に
征夷將軍宣下の
院宣の御使とし
て鎌倉に下る。

猫間の中納言光
高七條坊城王
生の邊を猫間と
いふ、光高は清
高の子。

まればれわいた
覺一本「稀に
おはしたるに物
よそへ」八坂本
「たま〜くい
たに飯よそはせ
ではいかゞある
べき」

平茸平茸狀如レ
開人之十指一易
レ推易レ折、其色
外黄、或有淡紫
皮、味淡甘最佳、
可レ爲ニ上撰。木
曾山中多有レ之
(本朝食鑑)
猫おろし考證
に「餘食ヲ云ナ
リ」

言光高の卿と云ふ人有りけり。木曾に宣ひ合すべき事有りておはしたりけるを、郎等
共、猫間殿の入らせ給ひて候と云ひければ、木曾大きに笑うて、猫は人に對面する
かとぞ云ひける。是は猫間の中納言殿とて、公卿にて渡らせ給ひ候と云ひければ、さ
らばとて對面す。木曾、猫間殿とえいはで、猫殿の、食時にまればれわいたに、物
よそへとぞ云ひける。中納言殿争か只今さる御事のおはすべきと宣へ共、木曾、何
をも新しき物をば無鹽と云ふぞと心得て、無鹽の平茸爰に有り、とう〜と急がす。
根井の小彌太陪膳す。田舎合子の窮めて大きにくぼかりけるに飯堆うよそひ、御菜三
種して、平茸の汁にて參らせたり。木曾が前にも同じ體にて居るたりけり。木曾殿
箸取りて食す。中納言は、餘りに合子のいぶせさに、召さゞりければ、木曾、きた
なうな思ひ給ひそ。其は義仲が精進合子で候ふぞ。とう〜と進む間、中納言殿、
召さでも流石悪しかりなんとや思はれけん、箸取りて召す由して、さし置かれたり
ければ、木曾大きに笑つて、猫殿は小食にておはすよ。聞ゆる猫おろし、給ひけり。
搔い給へ〜やとぞ責めたりける。中納言殿は、加様の事に萬づ興醒めて、宣ひ合

小牛健兒「こ
んでい」は健兒
の轉音。
あがかせたり「
八坂本」あがら
せたり「
手形」車の前後
の左右の口にあ
る木。

はずべきこと共、一言も言出さず、急ぎ歸られけり。其の後義仲院參しけるが、官加階したる者の、直垂にて出仕せん事あるべうもなしとて、俄に布衣とり、裝束、冠りぎは、袖のかゝり、指貫の輪に至る迄、頑なる事限りなし。鎧取つて着、矢搔負ひ、弓押張り、甲の緒をしめ、馬に打乗つたるには、似も似ず悪しかりけり。され共、車にこがみ乗んぬ。牛飼は八鳥の大臣殿の牛飼なり。牛車も其なりけり。逸物なる牛の居る飼うたるを、門出づるとて、一楮當てたらうに、何かはよかるべき。牛は飛んで出づれば、木曾は車の内にて、仰向に倒れぬ。蝶の羽を播げたる様に、左右の袖をひろげ手をあがいて、起きん／＼としけれ共、何かは起きらる可き。木曾、牛飼とはえ云はで、やれ小牛健兒よ、やれ小牛健兒よと云ひければ、車をやれと云ふぞと心得て、五六町こそあが、せけれ。今井の四郎鞭鎧を合せて、追付き、何とて御車をば加様には仕るぞと云ひければ、餘りに御牛の鼻が強う候うてとぞ演べたりける。牛飼、木曾に仲直りせんとや思ひけん。其れに候ふ手形と申す者に取付かせ給へと云ひければ、木曾手形に無手と摺み付いて、哀れ支度や、牛健兒が計か、

殿の様かとぞ問ひたりける。さて院の御所へ參り、門前にて車かけはづさせ、後より下りんとしければ、家の者の雜色に召使はれけるが、車には、召され候ふ時こそ、後よりは召され候へ、下りさせ給ふ時は、前よりこそ下りさせ給ふべけれと言ひければ、木曾、争か車ならんからに、何條す通りをばすべきとて、終に後よりぞ下りてける。其の外をかしき事共多かりけれ共、恐れて是を申さず。牛飼は終に斬られにけり。

紅葉

承安の比ほひ「
承安元年には高
倉天皇御十一歳

高倉の院御在位の御時、人の順ひ付き奉る事は、恐らくは延喜天曆の帝と共す共、是れには争で勝らせ給ふ可きとぞ人申しける。大方は賢王の名を揚げ、仁徳の行を施させおはします事も、君御成人の後清濁を分たせ給ひての上の御事でこそあるに、無下に此の君は、未だ幼主の御時より、性を柔和に受けさせおはします。去んぬる承安の比ほひは、御年十歳許りにもや成らせおはしましけん、餘りに紅葉を愛させ

殿守の伴の御奴
主殿寮の下役
殿守のとももの
宮つこ心あらば
この春ばかり朝
ぎよめすな(源
公忠、拾遺集)
縫殿の陣(朔平
門をいふ。縫殿
寮の南にあれば
也。
奉行の藏人(大
膳太夫信範。

林間に酒を暖め
て(林間暖酒
焼紅葉。石上題

詩抄(縁若(白
氏文集)この句
また和漢朗詠集
にも出づ。
鶏人曉を唱ふ聲
(鶏人曉唱、聲
驚(明王之眠(和漢朗詠集都
良香)
法衣を脱かせ給
ひ(大鏡、十訓
抄、讀古事談等
に出づ。
上日の者(何
候の日を上日と
申、宿直し候を
ば上夜と申す)
(有職問答)

給ひて、北の陣に小山を築かせ、植鶏冠木の、誠に色うつくしう紅葉ぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名付けて、終日に叡覽あるに、猶飽足らせ給はず。然るを或夜野分はしたなう吹いて、紅葉皆吹散し、落葉頗る狼藉なり。殿守の伴の御奴、朝淨すとて、是れを悉く掃捨て、げり。残れる枝、散れる木の葉をば、搔聚めて、風寒じかりける朝なれば、縫殿の陣にて、酒暖めてたべける薪にこそしてげれ。奉行の藏人、行幸より先にと急ぎ行きて見るに、跡形なし。いかにと問へば、しかく(と答ふ。あなあさまし。さしも君の執し思し召されつる紅葉を、加様にしつる事よ。知らず、汝等禁獄流罪に及び、我が身も如何なる逆鱗にかあづからんすらんと、思はじ事なう案じ續けて居たりける處に、主上いとしく、夜の御殿を出でさせも敢へず、彼へ行幸成りて、紅葉を叡覽有るに、無かりければ、如何にと御尋有りけり。藏人何と奏す可き旨もなし。有りの儘に奏聞す。天機殊に御快げに打笑ませ給ひて、林間に酒を暖めて紅葉を焼くと云ふ詩の心をば、されば其等には誰が教へけるぞや。優しうも仕つたるもの哉とて、却つて叡感に預つし上は、敢へて救勘無かりけり。

又安元の比ほひ、御方違の行幸の有りしに、さらでだに鶏人曉を唱ふ聲、明王之眠を驚かす程にも成りしかば、何も御寢覺がちにて、つや(御寢も成らざりけり。況んや冴ゆる霜夜の烈しきには、延喜の聖代、國土の民共が、如何に寒かるらんとて、夜の御殿にして、御衣を脱がせ給ひける事など迄も思し召し出で、我が帝徳の至らぬ事をぞ御歎有りける。良深更に及んで、程遠く人の叫び聲しけり。供奉の人には聞きも付けられず、主上は聞し召して、只今叫ぶ聲は何者ぞ、あれ見て參れと仰せければ、上臥したる殿上人、上日の者に仰せて尋ねれば、或辻に、惟しの女の童の、長持の蓋提げたるが、泣くにてぞ有りける。如何にと問へば、主の女房の、院の御所に侍はせ給ふが、此の程漸にして仕立てられたりつる、衣を持つて參る程に、只今男の二三人詣で来て、奪ひ取つて罷りぬるぞや。今は御裝束が有らばこそ、御所にも侍はせ給はめ、又はか(しう立宿らせ給ふ可き、親しき御方もましまさず。是れを思ひ續くるに泣くなりとぞ云ひける。さて彼の女の童を具して參り、此の由奏聞したりければ、主上聞し召して、あな無慚、何者の云爲(にてか有るらんとて、

堯の代の民は、皆以て堯舜之心を爲す。今寡人爲る君也、百姓各自以て其心爲す。是以痛之也。

(説苑)
建禮門院建禮門院(德子)高倉院妃、安徳天皇母儀、承安二年二月中宮册上、御年十八歳。

龍顔より御涙を流させ給ふぞ忝き。堯の代の民は、堯の心の直なるを以て心とする故に皆直也。今の代の民は、朕が心を以て心とする故に、奸しき者朝に在つて罪を犯す。是我が恥に非ずやとぞ仰せける。さるにても取られつらん衣は、何色ぞと仰せければ、然々の色と奏す。建禮門院、其の時は未だ中宮にて渡らせ給ふ時なり。其の御方へ、左様の色したる御衣や候と、御尋ね有りければ、先のより遙に色嚴しきが参りたるを、件の女の童にぞ賜はせける。未だ夜深し、又さる目にもぞ逢ふとて、上日の者を數多つけて、主の女房の局まで、送らせまし／＼けるぞ忝き。されば惟しの賤の男賤の女に至る迄、只此の君千秋萬歳の寶算をぞ祈り奉る。

月 見

六月九日治承四年。 新都福原をさす。

六月九日の日、新都の事始、八月十日の日土棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れ行けど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既に成りにけり。秋も漸半に成り行けば、福原の新都に坐しける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大将の、昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の浦傳ひ、淡路の灘を押渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦・吹上・和歌の浦・住吉・難波・高砂・尾上の月の曙を、眺めて歸る人も有り。舊都に残る人々は、伏見、廣澤の月を見る。中にも後徳大寺の左大将實定。卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日餘りに、福原よりぞ上り給ふ。何事も皆換り果てゝ、稀に残る家は、門前草深くして、庭上露滋し。蓬が柚、淺茅が原、鳥の臥戸と荒れ果てゝ、蟲の聲々怨みつゝ、黄菊紫蘭の野邊とぞ成りにける。今故郷の名残としては、近衛河原の大宮ばかりぞ坐しける。大将其の御所へ参り、先づ隨身を以て、總門を叩かせらるれば、内より女の聲にて、誰ぞや、蓬生の露打拂ふ人もなき所にと咎むれば、是れは福原より大将殿の御上り候と申す。さ候はゞ、總門は鑰のさゝれて候ふぞ。東の小門より入らせ給へと申しければ、大将さらばとて、東の小門よりぞ参られける。大宮は御徒然に、昔をや思し召し出でさせ給ひけん、南面の御格子開けさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大将つと参られれば、暫く御琵琶を聞かせ給ひて、夢かや現か、是れへ／＼とぞ仰せける。源氏

源氏の大將の須磨
明石の卷の尾上の月
高砂の尾上の月
曙の音すなり
の鐘の音すなり
あかつきかけて
霜やおくらむ
(千載集匡房)
舊き都の月
雲のうへやふ
るき都となり
けりすむらむ月
の影はかはら
で西行
蓬が柚・淺茅が
原なげやなげ
よもぎが柚の
好忠悲しき
げに悲しき
好忠悲しき
ちが原と荒果て
て夜すがら蟲の
ねをのみぞなく
道命後拾遺集
黄菊紫蘭の野邊
條物黄菊紫蘭
三兩藤原忠
道無題詩
近衛河原の大宮
大宮は實定卿
の妹多子。

源氏の宇治の卷
|| 橋姫の巻をさ
す。

待宵の小侍従 ||
大僧都法印光清
の娘、紀氏。

の宇治の卷には、優婆塞の宮の御娘、秋の名残を惜みつゝ、琴瑟を調べて、終宵心を澄し給ひしに、有明の月の出でけるを、猶堪へずやおぼしけん、撥にて招き給ひけんも、今こそ思し召し知られけれ。待宵の小侍従と申す女房も、此の御所にぞ候はれける。抑々此の女房を、待宵と召されける事は、或時御前より、待つ宵、歸る朝、何れか哀れは勝れると仰せければ、彼の女房、

待つ宵の更け行く鐘の聲聞けば、歸る朝の鳥はものかは

と申したりける故にこそ、待宵とは召されけれ。大將此の女房を喚出でて、昔今の物語共し給ひて後、小夜も漸更け行けば、舊き都の荒れ行くを、今様にこそ歌はれけれ。舊き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける、月の光は隈なくて、秋風のみぞ身には入む。と、推返し／＼三返歌ひ澄されたりければ、大宮を始め奉りて、御所中の女房達、皆袖をぞ濡されける。さる程に夜も漸明け行けば、大將暇申しつゝ、福原へぞ歸られける。供に候ふ藏人を召して、侍従が何と思ふやらん、餘りに名殘惜しげに見えつるに、汝歸つて兎も角も謂うてこよと宣へば、藏人走り歸り、

畏つて、是れは大將殿の申せと候とて、

物かはと君が云ひけん鳥の音の、今朝しもなどか悲しかるらん。

女房とりあへず、

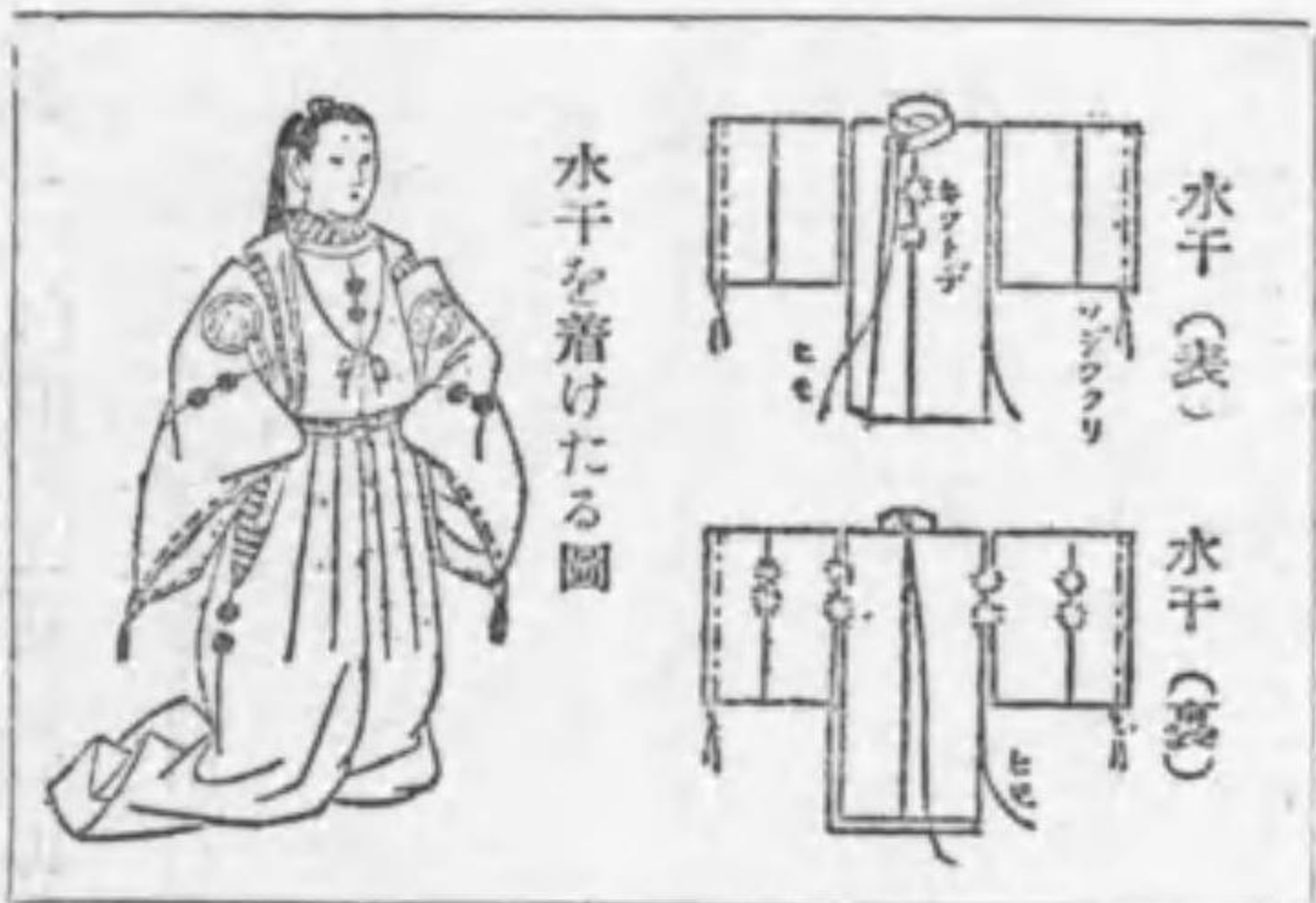
待たばこそ更け行く鐘もつらからめ、歸る朝の鳥の音ぞうき。

藏人走り歸つて、此の由申したりければ、さてこそ汝をば遣したれとて、大將大に感ぜられけり。其れよりしてこそ、物かはの藏人とは召されけれ。

妓 王

太政の入道は、加様に天下を掌の中に握り給ひし上は、世の訴をも憚らず、人の嘲をも顧みず、不思議の事をのみし給へり。譬へば、其の比、京中に聞えたる白拍子の上手、妓王、妓女とて、おととひあり、とちと云ふ白拍子が娘なり。然るに姉の妓王を、入道相國寵愛し給ふ上、妹の妓女をも世の人もてなす事斜ならず。母とちにもよき屋作つてとらせ、毎月に百石百貫を送られたりければ、家内富貴して、楽しい事斜ならず。抑々我が朝に白拍子の始りける事は、昔鳥羽の院の御宇に、鳥の千歳、和歌の

水干ミヅウシすゞしの平絹を水張りにして製す。ほぼ狩衣に同じ。裾を袴の中に着籠む。立烏帽子を冠るを通例とす。
立烏帽子タテカサ立烏帽子の通例、折烏帽子オリカサに對して云ふ。
白鞘卷シロカサマキ柄鞘などを銀の金具にて装ひたる鞘卷。



前、彼等二人が舞ひ出したりける也。始は水干ミヅウシに立烏帽子、白鞘卷シロカサマキをさいて舞ひければ、男舞とぞ申しける。然るを中比より、烏帽子・刀をのけられて、水干ミヅウシばかりを用ひたり。さてこそ白拍子とは名づけけれ。京中の白拍子ども妓王が幸の目出度き様を聞きて、うらやむ者もあり、猜む者もあり。羨む者どもは、あな目出度の妓王御前の幸や。同じ游女とならば、誰も皆あの様でこそありたけれ。如何様にも妓と云ふ文字を名に付きて、かくは目出度きやらん。いざや我等も付きて見んとて、或は妓一、妓二と付き、或は妓福、妓徳など付く者もありけり。そねむ者どもは、何でふ名により、文字には依る可き。幸は只先世の生れ付でこそ有んなれとて、付かぬ者も多かりけり。かくて三年と云ふに、又白拍子の上手、一人出で來たり。加賀の國の者也。名をば佛とぞ申しける。年十六とぞ聞えし。京中の上下是を見て、昔より

西八條殿ニシヤチヤウテン清盛の別邸。

多くの白拍子は見しか共、かゝる舞の上手は未だ見ずとて、世の人もてなす事斜ならず。ある時佛御前申しけるは、我れ天下にもてあそばるゝと云へども、當時目出たう榮えさせ給ふ平家太政。入道殿へ、召されぬ事こそほいなけれ。游者の習ひ、何か苦しかる可き。推參して見んとて、或時西八條殿へぞ參じたる。人御前に參つて、當時都に聞え候佛御前が參つて候と申しければ、入道相國大に怒つて、何條左様の游者は、人の召にてこそ參るものなれ。さうなう推參する様もある。其の上神ともいへ、佛ともいへ、妓王が有らんする所へは、叶ふまじきぞ。とう／＼罷り出でよとぞ宣ひける。佛御前は、すげなう言はれ奉りて、既に出でんとしけるを、妓王入道殿に申しけるは、游者の推參は、常の習ひでこそさぶらへ。其の上年も未だをさなうさぶらふなるが、偶々思ひ立つて參つてさぶらふを、すげなう仰せられて、返させ給はんこそ不便なれ。いか計り辱しう、片腹痛くもさぶらふらん。我が立てし道なれば、人の上とも覺えず。縦ひ舞を御覽じ、歌をこそ聞し召さずとも、唯理をまげて、召返いて御對面計りさぶらひて、返させ給はゞ、有り難き御情でこそさぶ

君を始めて見る時は萬劫年ふる龜岡の、下は泉の深ければ、若むす岩屋に松生ひて、梢に鶴こそ遊ぶなれ。
(梁塵秘抄)
 龜岡は龜山に同じ、蓬萊山の異名、本文は池の中島をさす。

らはんすれと申しければ、入道相國、いでくさらば、わごぜが餘りにいふ事なるに、對面して返さんとて、御使を立てて召されけり。佛御前は、すげなういはれ奉つて、車に乗つて既に出でんとしけるが、召されて歸り参りたり。入道聽て出で合ひ對面し給ひて、いかに佛、今日の見參は、あるまじかりつれども、妓王が何と思ふやらん、餘りに申し進むる間、加様に見參はしつ。見參する上では、如何でか聲をも聞かである可き。先づ今様一つ歌へかすと宣へば、佛御前、承りさぶらふとて、今様一つぞ歌うたる。君を始めて見る時は千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそむれるて遊ぶめれ。と、推返しく三返歌ひすましたりければ、見聞の人々、皆耳目を驚かす。入道も面白き事に思ひ給ひて、さてわごぜは、今様は上手に有りけるや。此の定では舞も定めてよからん。一番見ばや、鼓打召せとて召されけり。打たせて一番舞うたりけり。佛御前は、髮姿より始めて、眉目かたち世に勝れ、聲よく節も上手なりければ、なじかは舞ひは損すべき。心も及ばず舞ひすましたりければ、入道相國舞にめで給ひて、佛に心を移されけり。佛御前、こは何事

一樹の陰に宿り合ひ云々宿り一樹下波一河流一夜同宿一曰夫妻、皆是先世結縁。(説法明眼論)

にてさぶらふぞや。本よりわらはは推參の者にて、既に出され參らせしを、妓王御前の申し狀に依つてこそ召返されてもさぶらふ。はやく暇賜つて、いだしせ御座せと申しければ、入道相國都て其の儀叶ふまじ。但し妓王が有るに依つて、左様に憚るか。其の儀ならば、妓王をこそ出さめと宣へば、佛御前、是はまたいかでさる御事候ふべき。共に召置かれんだに恥しうさぶらふべきに、妓王御前を出させ給ひて、わらはを一人召置かれなば、妓王御前の思ひ給はん心の中、いか計り恥しう、片腹痛くもさぶらふべき、自ら後までも忘れ給はぬ御事ならば、召されて又は參るとも、今日は暇を賜はらんとぞ申しける。入道、其の儀ならば、妓王とうく罷り出でよと、御使重ねて、三度までこそ立てられけれ。妓王はもとより思ひ設けたる道なれ共、さすが昨日今日とは思ひもよらず。入道相國、いかにも叶ふまじき由、頻りに宣ふ間、はき拭ひ、塵拾はせ、出づべきにこそ定めけれ。一樹の陰に宿り合ひ、同じ流を掬ぶだに、別れは悲しき習ひぞかし。いはんや是は三年が間住みなれし所なれ共、名残も惜しく悲しくて、甲斐なき涙ぞすみける。さてしも有る

べき事ならねば、妓王今はかうとて出でけるが、なからん跡の忘れ形見にもとや思ひけん、障子に泣くく一首の歌をぞ書付けける。

萌出づるも枯るゝも同じ野邊の草、何れか秋にあはで果つべき。

さて車に乗つて宿所へ歸り、障子の内に倒れ臥し、たゞ泣くより外の事ぞなき。母や妹是を見て、いかにやいかにと問ひけれども、妓王兎角の返事にも及ばず、具したる女に尋ねてこそ、さる事有りとも知つてけれ。さる程に毎月送られける百石百貫をも推止められて、今は佛御前のゆかりの者共ぞ、始めて樂み榮えける。京中の上下此の由を傳へ聞いて、誠や妓王こそ、西八條殿より暇賜つて出されたんなれ。いざや見參して遊ばんとて、或は文を遣す者もあり、或は使者をたつる人もありけれども、妓王、今更又人に對面して遊び戯るべきにもあらねばとて、文をだに取るゝ事もなく、まして使をあひしらふ迄も無かりけり。妓王是に付けても、いと悲しくて、かひなき涙ぞこぼれける。かくて今年も暮れぬ。あくる春にもなりしかば、入道相國妓王が許へ使者を立てゝ、如何に妓王、其の後は何事かある。佛御前

が餘りにつれづれに見ゆるに、參つて今様をも歌ひ、舞などを舞うて、佛慰めよとぞ宣ひける。妓王兎角の御返事にも及ばず、涙を押へてふしにけり。入道重ねて、なにとて妓王は、兎も角も返事をば申さぬぞ。參るまじきか。參るまじくば、其の様を申せ。淨海も計らふ旨有りとぞ宣ひける。母とち是を聞くに悲しくて、泣くく教訓しけるは、なにとて妓王は、兎も角も御返事をば申さで、加様に叱られ參らせんよりはといへば、妓王涙を押へて申しけるは、參らんと思ふ道ならばこそ、聽て參るべし共申すべけれ。なか／＼參らざらんもの故に、何と御返事をば申すべし共覺えず。此の度召さんに參らずば、計らふ旨ありと仰せらるゝは、定めて都の外へ出さるゝか、さらすば命を召さるゝか、是れ二つにはよも過ぎじ。縦ひ都を出さるゝとも、歎くべき道に非ず。又命を召さるゝとも惜しかるべき我が身かは、一度うき者に思はれ參らせて、二度面を向ふべしとも覺えずとて、猶御返事にも及ばざりしかば、母とち泣くく又教訓しけるは、天が下に住まんには、兎も角も入道殿の仰せをば、背くまじき事にて有るぞ。其の上わごぜは、男女の縁、宿世、今に始

めぬことぞかし。千年萬年とは契れども、懸て別るゝ中もあり。白地とは思へ共、ながらへはつる事もあり。世に定めなきものは、男女の習ひなり。況んやわごぜは、此の三年が間思はれ参らせたれ共、有りがたき御情でこそ侍らへ。此の度召さんに参らねばとて、命を召さるゝ迄は、よもあらじ。定めて都の外へぞ出されんすらん。縦ひ都を出さるゝ共、わごぜ達は年未だ若ければ、如何ならん岩木のはざまにても、過さん事易かるべし。我が身は年老い、齡衰へたれば、ならぬ鄙の住居を、かねて思ふこそ悲しけれ。只我をば都の中にて住みはてさせよ。其れぞ今生後生の孝養にてあらんするぞといへば、妓王参らじと思ひ定めし道なれども、母の命を背かじとて、泣くくゝ又出立ちける心の中こそむざんなれ。妓王獨り参らん事の、餘りに心うしとて、妹の妓女をも相具しけり。其の外白拍子二人、總じて四人、一つ車に取乗つて、西八條殿へぞ参じたる。日比召されつる所へは入れられずして、遙かにさがりたる所に、座敷しつらうてぞ置かれける。妓王、こはされば何事ぞや。我が身に過つ事はなけれ共、出され参らするだにあるに剩へ座敷をだに、さげらるゝ事の

出で参らせん
 正節本「いで
 見参し侍らん」
 八坂本「いでて
 見参せん」盛衰
 記「佛はうちう
 つぶきて目も見
 上げず」

佛も昔は：||
 佛も昔は人な
 りき、我等も終
 には佛なり、三
 身佛性具せる身
 と、知らざりけ
 るこそあはれ
 なれ(梁座秘
 抄)三身とは法
 身、報身、應
 身をさす。

口惜しさよ。如何にせんと思ふを人に知らせじと、押ふる袖の隙よりも、餘りに涙ぞこぼれける。佛御前はれを見て、餘りに哀れに覺えければ、入道殿に申しけるは、あれは如何に、妓王とこそ見参らせさぶらへ。日頃召されぬ所にてもさぶらはばこそ。是へ召され侍へかし。さらすばわらはに暇を賜り、出で参らせんと申しけれ共、入道、いかにも叶ふまじきと宣ふ間、力及ばで出でざりけり。入道やがて出で合ひ對面し給ひて、いかに妓王、其の後は何事か有る。佛御前が餘りにつれくゞげに見ゆるに、今様をも歌ひ、舞なんどをも舞うて、佛慰めよとぞ宣ひける。妓王、参る程では、兎も角も入道殿の仰せをば、背くまじきものと思ひ、流るゝ涙を押へつゝ、今様一つぞ歌うたる。佛も昔は凡夫也。我等も終には佛也。何れも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ。と、泣くくゝ二返歌うたりければ、其の座に並み居給へる、平家一門の公卿・殿上人、諸大夫・侍に至るまで、皆感涙をぞ催されける。入道も、げにもと思ひ給ひて、時にとつては神妙にも申したり。さては舞も見たけれ共、今日は紛るゝ事出で來たり。此の後は、召さずとも常に参りて、今様をも歌ひ、

聲を尋ねて向ひ給ふ「化佛菩薩尋聲到」(觀經散善義)

たる所に、竹の編戸をほとくと叩く者出で來たり。其の時尼ども肝をけし、哀れ是は、云ふ甲斐なき我等が念佛して居たるを妨げんとて、魔縁の來たるにてぞあるらん。晝だにも人も訪ひ來ぬ山里の、柴の庵の内なれば、夜更けて誰かは尋ぬべき。僅かに竹を編戸なれば、あけず共押破らんこと安かるべし。今は只なか／＼あけて入れんと思ふ也。其れに情を懸けずして、命を失ふものならば、年頃頼み奉る、彌陀の本願を強く信じて、隙なく名號を唱へ奉るべし。聲を尋ねて向ひ給ふなる、聖衆の來迎にて御座せば、などか引攝無かるべき。相構へて念佛怠り給ふなと、互に心を戒めて、手に手を取りくみ、竹の編戸をあけたれば、魔縁にては無かりけり、佛御前ぞ出で來たる。妓王、あれは如何に、佛御前と見參らすは、夢かや、うつゝかと云ひければ、佛御前涙を抑へて、加様の事申せば、都てこと新しうは侍へども、申さずば又思ひ知らぬ身とも成りぬべければ、始よりして、細々と有りたまゝに申す也。もとよりわらは、推參の者にて、既に出され參らせしを、わごぜの申し狀に依つてこそ召返されても侍ふに、女の身の云ふ甲斐なき事、我が身を

娑婆「梵語サノハ、忍土と譯す」忍土「諸の煩悩業苦を見學する人」人身「受け難く離れ難く」佛「法離」泥梨「梵語ニラヤ、奈落即ち地獄」多生「曠劫」と「六道を輪廻する事多き」去「長き時間」老「少不定」境「執心略要集」

心に任せずして、わごぜを出させ參らせて、わらはが推留められぬる事、今に恥しう片腹痛くこそ侍へ。わごぜのいだされ給ひしを見しに付けても、いつか又我が身の上ならんと思ひ居たれば、嬉しとは更に思はず。障子に又何れか秋にあはではつべきと、書き置き給ひし筆の跡、げにもと思ひ侍ひしぞや。いつぞや又わごぜの召され參らせて、今様を歌ひ給ひしにも、思ひ知られてこそ侍へ。其の後は在所を何くとも知らざりしに、此の程聞けば、加斯に様をかへ、一つ所に念佛しておはしつる由、餘りに羨しくて、常は暇を申し、かども、入道殿更に御用ひまします。つく／＼物を案するに、娑婆の榮花は夢の夢、樂み榮えて何かせん。人身は受けがたく、佛教には遇ひがたし。この度泥梨に沈みなば、多生曠劫をば隔つ共、浮び上らん事難かるべし。老少不定の境なれば、年の若きを頼む可きに非ず。出づる息の入るをも待つ可からず。かげらふ稻妻よりも猶はかなし。一旦の榮花に誇つて、後世を知らざらん事の悲しさに、今朝まぎれ出でて、かく成りてこそ參りたれとて、かづいたるきぬ打除けたるを見れば、尼に成つてぞ出で來たる。加様に様を替へて參

りたる上は、日比の科をば許し給へ。許さんとだに宣はゞ、諸共に念佛して、一つ蓮の身とならん。それにも猶心ゆかずば、是よりいづちへも迷ひ行き、如何ならん苔の筵、松が根にもたふれ臥し、命の有らんかぎりは念佛して、往生の本懐を遂げんと思ふなりとて、袖を顔に押當て、さめくとかきくどきければ、妓王涙を押へて、わごぜの其れ程まで、思ひ給はんとは夢にも知らず、浮世の中の嵯峨なれば、身の憂きところ思ひしに、兎もすればわごぜの事のみ恨めしくて、今生も後生も、なまじひにし損じたる心地にてありつるに、加様に様を替へておはしつる上は、日來の科は露塵ほども残らず。今は往生疑ひなし。此の度本懐を遂げんこそ、何よりも又嬉しけれ。わらはが尼に成りしをだに、世に有り難き事の様に、人もいひ、我が身も思ひ侍ひしぞや。其れは世を恨み、身を歎いたれば、様をかふるも理なり。わごぜは恨みもなく歎きもなし。今年は纒か十七にこそなりし人の、其れ程まで穢土を厭ひ、浄土を願はんと、深く思ひ入り給ふこそ、誠の大道心とは覺え侍ひしか。嬉しかりける善知識哉。いざ諸共に願はんとて、四人一緒に籠り居て、朝

穢土を厭ひ、
一厭離穢土、
二欣求浄土、(往
生要集)

夕佛前に向ひ、花香を供へて、他念なく願ひけるが、遅速こそ有りけれ、皆往生の本懐を遂げけるとぞ聞えし。されば彼の後白河の法皇の、長講堂の過去帳にも、妓王妓女、佛、とち等が尊靈と、四人一所に入れられたり。有り難かりし事共也。

小 督

主上は戀慕の御涙に思し召し沈ませ給ひたるを、申し慰め進らせんとて、中宮の御方より小督の殿と申す女房を進らせらる。そもこの女房と申すは、櫻町の中納言成範の御娘、禁中一の美人、雙なき琴の上手にてぞましくける。冷泉の大納言隆房の卿、未だ少將なりし時、見そめたりし女房なり。始めは歌を詠み文をば盡されけれども、玉章の數のみ積りて、靡く氣色もなかりしが、流石に情に弱る心にや、終には靡き給ひけり。され共今は君へ召され參らせて、せん方もなく悲しくて、飽かぬ別の涙にや、袖しほたれて于し敢へず。少將、如何にもして、小督の殿を今一度見奉る事もやと、其の事となく、常は參内せられけり。小督の殿のおはしける局の

長講堂法華講三
を長日講法華
堂を法略して長
味堂といふ六
講堂の内長講
條殿の法華堂
最も世に顯は
後白河法皇と
も云ふ御宸筆
の過去帳現存
りと傳ふ

櫻町の中納言成
範の御娘成
範當時左兵衛督
たり、よつて小
督と稱するか
(考證)

邊、彼方此方へ、イみ歩き給ひけれ共、小督殿、吾れ君へ召され參らせぬる上は、少將いかに申す共、詞をも通はす可からずとて、傳の情をだにも懸けられず。少將若しやと、一首の歌を詠うで、小督殿のまし／＼ける局の、御簾の中へぞ投入れける。

思ひ兼ね心は空に陸奥の、ちかの鹽釜近きかひなし。

ちかの鹽釜近き
……續後撰集
に、陸奥の千賀
の鹽釜ちかなが
ら、からきは人
にあはぬ也けり
(讀人しらす)

小督殿、聽て返事もせまほしうは思されけれ共、君の御爲、御窘しと思されけん、手にだに取つても見給はず、聽て上童に取らせて、坪の内へぞ投出さる。少將、情なう恨めしけれ共、さすが人もこそ見れと、そら恐しくて、急ぎ取つて懐へ引入れて出でられけるが、猶立歸り、

玉章を今は手にだに取らじとや、さこそ心に思ひ捨つとも。

冷泉の少將も又
聲也陸房の室
は清盛の第四女
隆衡卿の母。

今は此の世にて、相見ん事も難ければ、生きて居て、兎に角に人を戀しと思はんより、唯死なんとのみぞ願はれける。入道相國、此の由を傳へ聞き給ひて、中宮と申すも御女、冷泉の少將も又聲也。小督殿に、二人の聲を取られては、世の中好かるまじ。如何にもして、小督殿を召出して失はんとぞ宣ひける。小督殿此の由を聞き

彈正の大弼仲國
|| 宇多源氏、後
白河判官代光遠
の二男、大弼は
次官、彈正臺は
内外の非違を彈
奏する役所。

給ひて、我が身の上は兎にも角にも成りなん、君の御爲御心苦しと思されければ、或夜内裏をばまぎれ出で、行方も知らずぞ失せられける。主上御歎き斜ならず、晝は夜の御殿にのみ入らせ給ひて、御涙に沈ませおはします。夜は南殿に出御なつて、月の光を御覽じてぞ慰ませまし／＼ける。入道相國此の由を承りて、さては君は、小督故に思し召し沈ませ給ひたん也。さらんに取りてはとて、御介錯の女房達をも參らせられず、參内し給ふ人にも猜まれければ、入道の權威に憚つて、參り通ふ臣下もなし。男女打潜めて、禁中忌々しうぞ見えし。比は八月十日餘りの事なれば、さしも限なき空なれ共、主上は御涙に曇らせ給ひて、月の光も朦にぞ御覽ぜられける。良深更に及んで、人や有る／＼と召されけれ共、御いらへ申す者もなし。良有つて、彈正の大弼仲國、其の夜しも御宿直に參りて、遙に遠う候ひけるが、仲國と御いらへ申す。汝近う參れ。仰せ下さる可き旨有りと仰せければ、何事やらんと思ひ、御前近うぞ參じたる。汝若し小督が行方や知りたると仰せければ、争か知り參らせ候ふ可きと申す。誠や、小督は、嵯峨の邊、片折戸とかやしたる内に、有り

小鹿鳴く此の山
里山を鹿なく
此山悲しかりけ
れば秋夕暮れ
原基俊歌集藤
釋迦堂清涼寺
にある御藍

と申す者の有るごとよ。主が名をば知らず共、尋ねて参らせてんやと仰せければ、仲國、主が名を知り候はでは、争か尋ね逢ひ参らせ候ふ可きと申しければ、主上、實にもとて、御涙せき敢へさせまします。仲國つくく物を案するに、誠や、小督の殿は、琴彈き給ひしぞかし。此の月の明さに、君の御事思ひ出で参らせて、琴彈き給はぬ事はよも非じ。内裏にて琴彈き給ひし時、仲國笛の役に召され参らせしかば、其の琴の音は、何くにも聞き知らんするものを。嵯峨の在家幾程かあらん、打廻つて尋ねんに、などか聞出さで有る可きと思ひ、さ候はゞ、主が名は知らず候ふとも、尋ね参らせ候ふ可し。縦ひ尋ね逢ひ参らせて候ふ共、御書など候はずば、浮の空とや思し召され候はんすらん。御書を賜つて、参り候はんと申しければ、主上實にもとて、聽て御書あそばしてぞ下されける。寮の御馬に乗りて行けと仰せければ、仲國寮の御馬賜つて、明月に鞭を揚げ、西をさしてぞ歩ませける。小鹿鳴く此の山里と詠じけん、嵯峨の邊の秋の比、さこそは哀れにも覺えけめ。片折戸したる屋を見付けては、此の内にもやおはすらんと、控へく聞きけれども、琴彈く所

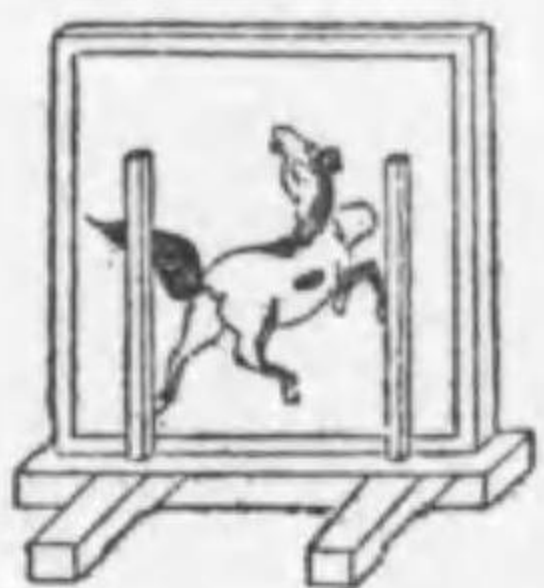
法輪程近けれ
井川の西にあり
峯の嵐か松風か
齊宮女御の松
の音にみねの松
風通ふらし何れ
のをより調べそ
めけむ一拾遺
集野宮に齊宮
の庚申侍りけ
るに松風入る夜
琴の詞ありける
とみ侍りける
想夫雅樂の
曲名は、女男
を戀ふは、女
を戀ふる故の名
は相府蓮文字
の通へるなり
晋の王儉大臣と
植るて愛せし時
の樂なり徒然
草やうでう横笛
(半ヤウチャウ)
か、羌笛といふ
説もあり

は無かりけり。御堂などへも参り給へる事もやと、釋迦堂を始めて、堂々見廻れ共、小督の殿に似たる女房だにも無かりけり。空しう歸り参りたらんは、参らざらんよりなかく悪しかるべし。是より何地へも、迷ひ行かばやと思へ共、何くか王地ならぬ、身を隠す可き宿もなし、如何せんと案じ煩ふ。誠や、法輪は程近ければ、月の光に誘はれて、参り給へる事もやと、其方へ向いてぞあくがれける。龜山の傍近く、松の一村有る方に、幽に琴ぞ聞えける。峯の嵐か松風か、尋ねる人の琴の音か、覺束無くは思へ共、駒を早めて行く程に、片折戸したる内に、琴をぞ彈き澄されたる。控へて是れを聞きければ、少しも紛ふべうもなく、小督の殿の爪音也。樂は何ぞと聞きければ、夫を想うて戀ふと詠む想夫戀と云ふ樂なりけり。仲國、さればこそ、君の御事思ひ出で参らせて、樂こそ多けれ、此の樂を彈き給ふ事の優しさよと思ひ、腰よりやうでう抜き出し、ちつと鳴いて、門をほとくと敲けば、琴をば聽て彈き止み給ひぬ。是は内裏より仲國が御使に参りて候。開けさせ給へとて、敲けどもく答むる者も無かりけり。良有りて、内より人の出づる音しけり。嬉しう思ひて

待つ處に、錠をはづし、門を細目に開け、幼氣したる小女房の、顔計り指出いて、是れは左様に内裏より、御使など賜るべき所でも侍はず。若し門違にてぞ侍ふらんと云ひければ、仲國、返事せば、門立てられ、錠指されなんすとや思ひけん、是非なく押開けてぞ入りにける。妻戸の際なる縁に居て、何とて加様の所に御渡り候ふやらん。君は御故に思し召し沈ませ給ひて、御命も危くこそ見えさせましく候へ。加様に申さば、浮の空とや思し召され候ふらん。御書を賜つて参り候とて、取出いで奉る。有りつる女房取り次いで、小督の殿にぞ進らせける。是れを開けて見給ふに、誠に君の御書にてぞ有りける。聽て御返事書いて引結び、女房の装束一重添へてぞ出されたる。仲國、御返事の上は兎角申すに及び候はね共、別の御使にても候はこそ、直の御返事承らでは、争か歸り参り候ふべきと申しければ、小督の殿實にもとや思はれけん、自ら返事し給ひけり。足下にも聞き給ひつらん様に、入道餘りに怖しき事をのみ申すと聞きしがあさましさに、或夜竊に忍びつゝ、内裏をば紛れ出で、今はかゝる所の栖居なれば、琴弾く事も無かりしが、明日より大原の奥へ

大原 山城國愛宕郡。

馬部黄仕丁 左
右馬寮、馬部
人。黄仕丁は、
吉上近衛とも稱
し近衛府の下役
はね馬の障子
渡殿、馬形障
子。



南に翔り北に嚮
ふ 南翔北嚮、
難レ付 寒温於秋
鴻。東田西流、
只寄 瞻望於曉
月 (本朝文粹
後江相公)

と思ひ立つ事の候へば、主の女房、今夜ばかりの名残を惜み、今は夜も更けぬ、立聞く人もあらしなど勸むる間、さぞな昔の名残も流石ゆかしくて、手馴れし琴を弾く程に、易うも聞出されけりなとて、御涙せき敢へ給はねば、仲國も坐到袖をぞ絞りける。良有つて仲國泪を押へて申しけるは、明日より大原の奥へ、思し召し立つ事と候ふは、定めて御様などもや替へさせ給ひ候はんすらん。然るべうも候はず。さて君をば何とかし参らせ給ふべき。努々叶ひ候ふまじ。相構へて、此の女房出し参らすなとて、供に召具したる馬部黄仕丁など留め置き、其の屋を守護せさせ、我が身は寮の御馬に打騎つて、内裏へ歸り参つたれば、夜はほのくくとぞ明けにける。仲國、やがて寮の御馬繫がせ、女房の装束をば、はね馬の障子に打掛けて、今は定めて御寝も成りつらん、誰してか申す可きと思ひ、南殿を指して参る程に、主上は未だ夜邊の御座にぞましくける。南に翔り北に嚮ふ、寒温を秋の雁に付け難し。東に出で西に流る。唯瞻望を曉の月に寄すと、御心細げに打詠めさせ給ふ處に、仲國つと参りつゝ、小督の殿の御返事をこそ進らせけれ。主上斜ならず御感有りて、

鹽の變るのみか
 崇徳院(新古今集)
 彼の在原のな
 衣きつゝなれに
 しましあねる
 はるばるきぬ
 たびをしぞおも
 ふ伊勢物語
 参河の國の八橋
 こと八つ水といふ
 手に流れて別れ
 木八つわたせ
 橋よりなむ八
 (伊勢物語) 打
 ち渡し長き心は
 八つ橋のくも
 に思ふことは
 えせじ(後撰
 集) 戀せよとな
 れる三川の八は
 を思ふもては
 な(續古今集)
 瀧名の橋を渡り
 給へば(松か
 げのうみあさ
 とのうみあさ
 いそひのこ

といふ名歌仕り、暇を賜りて罷り下り候ひし、海道一の名人にて候とぞ申しける。都を出でて日數経れば、彌生も半ば過ぎ、春も既に暮れなんとす。遠山の花は残の雪かと見えて、浦々島々霞み渡り、越し方行末の事共を思ひ續け給ふにも、是はされば、如何なる宿業のうたてさぞと宣ひて、只盡させぬものは涙也。御子の一人も御座せぬ事を、母の二位殿も歎き、北の方大納言の佐殿も本意なき事にし給ひて、萬づの神佛に懸けて祈り申されけれども、其の驗なし。賢うぞ無かりける。子だにも有らましかば、如何許り思ふ事あらじと、宣ひけるこそせめての事なれ。佐夜の中山にかゝり給ふにも、又越ゆべし共覺えねば、いと哀れの數添ひて、袂ぞ痛く濡れ増る。宇津の山邊の葛の道、心細くも打越えて、手越を過ぎて行けば、北に遠ざかつて、雪白き山あり。問へば甲斐の白根と云ふ。其の時三位の中將落つる涙を抑へつゝ、

惜からぬ命なれ共今日迄に、強顔き甲斐の白根をも見つ。清見が關打越えて、富士の裾野に成りぬれば、北には青山峨々として、松吹く風索

有(夫木抄雅
 心盡す夕まぐ
 れ秋の夜の
 心を盡すは
 とてはのかに
 ゆる夕月夜か
 (千載集) 實
 家の空赤土の
 旅の道の小屋
 屋の道の小屋
 程なきに餘り
 か(續古今集
 花(續古今集
 政村(續古今
 故郷も戀しく
 なし(留らむ
 らじとも思ほ
 すいづくもつ
 の住家ならぬ
 ば(詞花集) 照
 如何ばかり思
 事あらじ(あ
 ましの誤か
 一年たけて又
 佐夜の中(こ
 きや命なりけ
 古今夜の中山
 宇津の山邊の
 道(宇津の山
 道(宇津の山

々たり。南には蒼海漫々として、岸打つ浪も茫々たり。戀せば瘦せぬべし、戀せずも有りけりと、明神の歌ひ初め給ひけん足柄の山打越えて、こゆるぎの森、鞠子河、小磯、大磯の浦々、やつまと、砥上が原、御輿が崎をも打過ぎて、急がぬ旅とは思へ共、日數やう／＼重れば、鎌倉へこそ入り給へ。

千手

さる程に兵衛の佐殿、三位の中將殿に對面有りて申されけるは、抑々頼朝、君の御憤を休め奉り、父の恥を雪めんと思ひ立ちし上は、平家を亡さん事、案の内存せしか共、正しう加様に御目に懸る可しとは、かけては存じ候はず。此の定では、八島の大内殿の見參にも、入りぬべしと覺え候。さても南都炎上の事は、故入道相國の御成敗にて候ひけるか、又時に取りての御計か。以の外の罪業でこそ候ふめれと申されければ、三位の中將宣ひけるは、先づ南都炎上の事は、故入道相國の成敗にも非ず、又重衡が私の發起にても候はず。衆徒の悪行を静めんが爲に、罷り向つて

拍子甘あり、舞の出入の時、の曲の急を弾す、燈闌うして數行、虞氏の涙、一燈、暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌、聲和漢朗詠集、橋相

橋相公參議橋廣相

ぞへたりければ、三位の中將も、燈闌うして數行虞氏が涙と云ふ朗詠をぞせられける。喩へば此の朗詠の心は、昔唐に、漢の高祖と楚の項羽と位を争ひ、合戦する事七十二度、戦毎に項羽勝ちぬ。され共終には、項羽戦負けて亡びし時、騅と云ふ馬の一日に千里を飛ぶに乗つて、虞氏と云ふ后と共に逃げ去らんとし給へば、馬如何思ひけん、足を調べて動かす。項羽涙を流いて、我が威勢既にすたれたり。敵の襲ふは事の數ならず、只此の後に別れん事をのみ歎き悲み給ひたり。燈闌う成りしかば、虞氏心細さに涙を流す。更け行く儘には、軍兵共四面に鬨を作る。此の心を橋相公の詩に作れるを、三位の中將今思出で口すさび給ふにや、最優しうぞ聞えし。さる程に夜も明けければ、狩野の介暇申して罷り出づ。千手の前も歸りけり。其の朝兵衛の佐殿は、持佛堂に法華經讀うで坐しける處へ、千手の前歸り参りたり。兵衛の佐殿打笑み給ひて、さても夕べ中人をば、面白うもしつるもの哉と宣へば、齋院の次官親義、御前に物書いて候ひけるが、何事にて候ふやらんと申しければ、佐殿宣ひけるは、平家の人々は、此の二三箇年は、軍合戦の營の外は、又他事あるまじきところ

思ひしに、さても三位の中將の琵琶の撥音、朗詠の口すさみ、終夜立聞きつるに、優に艶しき人にておはしけりと宣へば、親義申しけるは、誰も夕べ承りたく候ひしか共、折節相勞る事の候ひて、承らず候。此の後は常に立聞き候ふべし。平家は代々歌人才人達にて渡らせ給ひ候。先年あの人々を花に喩へて候ひしには、此の三位の中將をば、牡丹の花に喩へて候しかとぞ申しける。三位の中將の琵琶の撥音、朗詠の口すさみ、兵衛の佐殿、後迄も有り難き事にぞ宣ひける。其の後中將南都へ渡されて、斬られ給ひぬと聞えしかば、千手の前はなか／＼物思の種とや成りにけん、聽て様をかへ、濃き墨染に寢れ果てて、信濃の國善光寺に行ひ澄まして、彼の後世菩提を弔ひけるぞ哀れなる。

横 笛

さる程に小松の三位の中將維盛の卿は、身がらは八島にありながら、心は都へ通はれけり。故郷に留め置き給ひし北の方稚き人々の面影のみ身にひしと立添ひて、忘るゝ

衣通姫の袋草紙に玉津島明神の縁起あり。日前、國懸紀伊國海草郡宮村二社で一境。官幣大社。

血をあやさん事もこゝでは亡父を辱める意か
本所瀧口の陣所。

西王母、東方朔何れも傳説中

隙も無かりければ、有るに甲斐なき我が身かはとて、壽永三年三月十五日の曉、忍びつゝ八島の館をば紛れ出で、與三兵衛重景、石童丸と云ふ童、船に心得たればとて武里と云ふ舍人、是れ三人を召具して、阿波の國結城の浦より船に乗り鳴戸の沖を漕過ぎて、紀伊の路へ赴き給ひけり。和歌・吹上、衣通姫の神と顯れ給へる玉津島の明神、日前國懸の御前を過ぎて、紀伊の湊にこそ著き給へ。それより山傳ひに都へ上り、戀しき者共をも、今一度見もし、見えばやとは思はれけれ共、叔父本三位の中将の生捕にせられて、京鎌倉に恥をさらさせ給ふだにも口惜しきに、此の身さへ囚はれて、父の骸に血をあやさん事も心うしとて、千度心は進め共、心に心をからかひて、高野の御前へ參り給ふ。高野に年比知り給へる聖あり。三條の齋藤左衛門茂頼が子に、齋藤瀧口時頼とて、もとは小松殿の侍たりしが、十三の年本所へ參りたり。建禮門院の雜司横笛と云ふ女あり。瀧口是れに最愛す。父此の由を傳へ聞いて、世に有らん者の婿子にもなし、出仕などををも、心安うせさせんと思ひ居たれば、由なき者を思ひ初めてなど、強に諫めければ、瀧口申しけるは、西王母と謂つし人も、

の長壽の人。西王母は列仙傳に漢元封元年西王母降武帝殿進蟠桃七枚於東方朔は同しく武帝頃の方士なり。善知識菩提心を起させる機縁

昔は有りて今はなし、東方朔と聞きし者も、名をのみ聞いて目には見ず。老少不定の境は、只石火の光に異ならず。縦ひ長命といへ共、七十八をば過ぎず。其の中に身の盛なる事は、纒に廿餘年也。夢幻の世の中に、醜き者を片時も見て何かせん。思はしき者を見んとすれば、父の命を背くに似たり。是れ善知識也。如かじ、浮世を厭ひ、實の道に入りなんとて、十九の年髻切りて、嵯峨の往生院に行ひ澄して居たりける。横笛此の由を傳へ聞いて、我をこそ捨てて、様をさへ換へけん事の恨めしさよ。縦ひ世をば背く共、なかは角と知らせざらん。人こそ心強く共、尋ねて恨みんと思ひつゝ、或暮方に都を出でて、嵯峨の方へぞあくがれける。此は二月十日餘りの事なれば、梅津の里の春風に、餘所の匂もなつかしく、大井河の月影も、霞にこめて朧也。一方ならぬ哀れさも、誰故とこそ思ひけめ。往生院とは聞きつれ共、さだかに何れの坊共知らざれば、爰に徘徊ひ彼にぞみ、尋ね兼ねるぞ無慚なる。往み荒したる僧坊に、念誦の聲しけるを、瀧口入道が聲と聞き澄して、御様の換りて坐すらんをも見もし見え參らせんが爲に、わらはこそ是迄參りて侍へとて、具し

たる女に謂はせければ、瀧口入道、胸打嘆ぎ、あさましさに、障子の隙より覗きて見れば、裾は露、袖は涙に打萎れつゝ、少し面瘦せたる顔ばせ、誠に尋ね兼ねたる有様、如何なる大道心者も、心弱う成りぬべし。瀧口入道、人を出いて、全く是にはさる人なし。若し門達にてもや候ふらんと謂はせたりければ、横笛情なう恨めしけれ共、力及ばず、涙を押へて歸りけり。其の後瀧口入道、同宿の僧に語りけるは、是れも世に閑にて、念佛の障碍は候はね共、あかて別れし女に、此の栖居を見えて候へば、縦ひ一度は強く共、又も慕ふ事有らば、心も動き候ひならんず。暇申すとて、嵯峨をば出でて高野へ上り、清浄心院に行ひ澄してぞ居たりける。横笛も聽て様を替へぬる由聞えしかば、瀧口入道一首の歌をぞ送りける。

そる迄は恨みしか共梓弓、眞の道に入るぞ嬉しき。

横笛が返事に、

そるとても何か恨みん梓弓、引きとどむべき心ならねば。

其の後横笛は、奈良の法華寺にありけるが、其の思の積にや、幾程なくて、遂に

法華寺法華滅罪寺。律宗。尼寺也。

七賢嵯康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、子咸、王戎、
四皓東園公、綺里季、夏黃公、角里先生。

はかなく成りにけり。瀧口入道此の由を傳へ聞いて、彌々深う行ひ澄して居たりければ、父も不孝を宥しけり。親しき者共も皆用ひて、高野の聖とぞ申しける。三位の中將此の聖に尋ね逢ひて見給ふに、都に有りし時は、布衣に立烏帽子、衣文を繕ひ、鬢を撫で、花やかなりし男也。出家の後は、今日初めて見給ふに、未だ三十にもならざるが、老僧姿に瘦せ衰へ、濃き墨染に同じ袈裟、香の煙に入みかをり、賢げに思ひ入りたる道心者、羨しうや思はれけん。彼の晉の七賢、漢の四皓が栖みけん、南山竹林の有様も、是には過ぎじとぞ見えし。

女院御出家

建禮門院は、東山の麓、吉田の邊なる所にぞ、立入らせ給ひける。中納言の法印慶慧と申す、奈良法師の坊なりけり。住み荒して年久しう成りければ、庭には草深く、軒には葱茂れり。簾絶え閨露にて、雨風堪るべうもなし。花は色々薫へ共、主と頼む人もなく、月は夜々差し入れ共、詠めて明す主もなし。昔は玉の臺を登き、

蒼波路遠し
若波路遠雲千
里、白露山深鳥
一聲、和漢朗詠
集、橋直幹

幡に縫うて
心所願、至成
菩提、幡隨風



錦の帳に纏はれて、明し暮させ給ひしが、今は有りとし有る人にも、皆別れ果て、あさましげなる朽坊に、入らせ給ひけん御心の中、推量られて哀れなり。魚の陸に上れるが如く、鳥の巢を離れたるが如し。さる儘には、憂かりし彼の上、船の中の御栖居も、今は戀しうぞ思し召されける。蒼波路遠し、思ひを西海千里の雲に寄す。白屋苔深くして、涙東山一庭の月に落つ。悲し共云ふ計りなし。かくて女院は文治元年五月一日の日、御髪落させ給ひけり。御戒の師には、長樂寺の阿證坊。上人印誓とぞ聲えし。御布施には、先帝の御直衣なり。既に今はの時迄も召されたりければ、其の御移香も未だ失せず。御形見に御覽せんとして、西國より遙々と都迄、持たせ給ひたりしかば、如何ならん世迄も、御身を放たじとこそ思し召されけれ共、御布施に成りぬべき物のなき上、且は彼の御菩提の爲にもとて、泣く／＼取出させ御座す。上人是れを賜つて、何と奏すべき旨も無くして、墨染の袖を顔に押當て、泣く／＼御所をぞ罷り出でられける。件の御衣をば幡に縫うて、長樂寺の佛前に懸けられけるとぞ聞えし。女院は十五にて女御の宣旨を蒙り、十六にて后妃の位に備

轉、破碎都盡、至
成、微塵、風如、
幡一轉、其福無量、
小王位、乃至吹、
無量、隨願往生、
朝には朝政を進
め、夜は夜を專に
す、此君王不、
無、承、散侍、
春遊、夜、
(白氏長恨歌)

壁に背ける殘ん
の燈、光宗末
歲初、入、入時
十六、今六十、
日、被、楊妃、
上陽宮、一生、
遂

り、君王の傍に候はせ給ひて、朝には朝政を進め、夜は夜を專にし給へり。廿二にて皇子御誕生有りて、皇太子にたち、位に即かせ給ひしかば、院號蒙らせ給ひて、建禮門院とぞ申しける。入道相國の御娘なる上、天子の國母にて坐せば、世の重うし奉る事斜ならず。今年は二十九にぞ成らせ坐しける。桃李の御粧猶濃かに、芙蓉の御形も未だ衰へさせ給はね共、翡翠の御簪付けても、何にかはせさせ給ふべきなれば、遂に御様を替へさせ給ひてげり。浮世を厭ひ、實の道に入らせ給へども、御歎は更に盡きせず。人々今はかくとて海に沈みし有様、先帝二位殿の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならん世に、忘るべしとも思し召さねば、露の御命の、何しに今迄存へて、かゝる憂き目を見るらんとて、御泪せきあへさせ給はず。五月の短夜なれ共、明し兼ねさせ給ひつゝ、自ら打目睡ませ給はねば、昔の事をば夢にだにも御覽せず。壁に背ける殘んの燈の影幽に、終夜窓打つ暗き雨の音ぞ冷しかりける。上陽人が上陽宮に閉ぢられたりけん悲も、是には過ぎじとぞ見えし。昔を忍ぶ妻となれとてや、故の主の移し植ゑ置きたりけん、花橋の風なつかしく、軒近く薫りけ

れを叡覽有りて、かくぞ遊ばされける。

池水に汀の櫻散り布きて、浪の花こそ盛なりけれ。

舊りにける岩の絶え間より、落ち来る水の音さへ、故び由ある所なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかく共筆も及び難し、さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には葛朝顔這ひかゝり、葱交りの萱草、瓢箪屢空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すとも謂つつ可し。杉の茸目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に争ひて、堪る可し共見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小篠に風噪ぎ、世に立たぬ身の習ひとて、憂き節滋き竹柱、都の方の言傳は、間遠に結へる猿垣や、僅に言問ふものとは、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が瓜木の斧の音、是等が音信ならでは、薛の葛・青葛、來る人稀なる所なり。法皇、人や有る、人や有ると召されけれ共、御いらへ申す者もなし。良有つて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院は何くへ御幸成りぬるぞと仰せければ、此の上の山へ花摘に、入らせ給ひて侍ふと申す。さこそ世を厭ふ御習ひと云ひながら、左様の事に仕へ奉るべき人も無きにや、

池水に汀の櫻散り布きて、浪の花こそ盛なりけれ。 千載集にみこ 池水に汀の櫻散り布きて、浪の花こそ盛なりけれ。 鳥形殿に渡らせ 給へりける頃池 上花といへる心 をよませ給うけ あり、院御製と あり。 瓢箪屢々空し 橋直幹の句。 本朝文粹・和漢 朗詠集。

欲知過去因 因果經は誤りにて 心地觀經なるべし。

峯に上りて薪を 取り「法華經を我がえしことは薪とり菜つみ水汲み仕へてぞ得し」拾遺集、(行基)

紀伊の二位 紀伊の二位は法皇の御乳母なり。

御痛はしうこそと仰せければ、此尼申しけるは、五戒十善の御果報の盡きさせ給ふに依つて、今かゝる御目を御覽ぜられ侍ふにこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませ給ひ侍ふべき。因果經には、欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因と説かれたり。過去未來の因果を、兼ねて悟らせ給ひなば、つや／＼御歎有る可からず。昔悉達太子は、十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木の葉を聯ねて、膚を隠し、嶺に上りて薪を取り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の功に依つてこそ、遂に成等正覺し給ひきとぞ申しける。此の尼の有様を御覽すれば、身には絹・布の分も見えぬ物を、結び聚めてぞ著たりける。あの有様にても、加様の事申す不思議さよと思し召して、抑々汝は如何なる者ぞと仰せければ、此の尼潸然と泣いて、暫は御返事にも及ばず。良有つて、涙を押へて、申すに附けても憚り覺え侍へ共、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申す者にて侍ふ也。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ侍ひしに、御覽じ忘れさせ給ふに付けても、身の衰へぬ程思ひ知られて、今更爲方なうこそ侍へとて、袖を顔に押當て、忍びあへぬ様、目

、花筐をば賜はりけり。

六 道

一念の窓の前に
 攝取の光明を
 期し、一觀無量壽
 經に「十方世界、
 偏照十方世界、
 念佛衆生、攝取
 不捨(略)八萬劫
 六道講式に「天
 道者、悲想八萬
 欲界必滅之憂、
 衰之悲、天未見
 之、勝妙樂、中
 是、夢中報、亦
 問、三快也、恒
 哉、三界火宅、無
 如、車、轉、無
 欲、界、六、天、四
 王、天、利、天、四
 樂、天、化、天、他、化
 自、在、天、化、天、化

世を厭ふ御習ひ、何か苦しう侍ふべき、早々御見參有りて、還御成し參らせ侍へと申しければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせ御座す。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十年の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸哉とて、御見參有りけり。法皇此の御有様を叙覽有りて、仰せなりけるは、悲想の八萬劫、猶必滅の憂に逢ひ、欲界の六天、未だ五衰の悲を免れず。喜見城の勝妙の樂、中間禪の高臺の閣、夢の裏の果報、又幻の間の樂、既に流轉無窮也。車輪の廻るが如し。天人の五衰の悲、人間にも候ひけるもの哉。さるにても、誰か言問ひ參らせ、何事に付けても、さこそ古をのみこそ思し召し出づらめと仰せければ、女院、何方より音信るゝ事も侍はず。信隆・隆房の卿の北の方より、絶えなく申送る事こそ待へ。其の昔、あの人共の育みにて有る可しとは、露も思し召しよらざりしものを

喜見城、帝釋天
 の居城、高臺の
 中間禪、勝初未
 及、第二、依此
 儀、故立、中間
 名、(俱舍論)五
 障、三從、二女
 猶、有、五、障、一
 不、得、作、梵、天
 者、二、者、帝、釋、三
 輪、聖、王、四、者、佛
 身、(提婆品)三
 從、とは、女人之
 體、幼、則、從、父、
 母、少、則、從、夫、
 老、則、從、子、(智
 度論)三時に六根を清
 めて、三時は晨
 朝、日中、黄昏、な
 り、六根は眼、
 耳、鼻、舌、身、
 意、隨分、隨力、隨
 分、已、が、行、力、の
 分、限、に、相、應、す、る
 を、い、ふ、諸、善、所、
 後、生、善、所、
 法、己、現、世、安

とて、御涙を流させ給へば、付き參らせたる女房達も、皆袖をぞ濡されける。良有つて、女院涙を押へて申させ給ひけるは、今かゝる身に成り侍ふ事は、一旦の歎申すに及び侍はね共、後生菩提の爲には、悦と覺え侍ふ也。忽に釋迦の遺弟に連り、忝くも彌陀の本願に乗じて、五障三從の苦みを遁れ、三時に六根を清めて、一筋に九品の淨刹を願ひ、専ら一門の菩提を祈り、常には聖衆の來迎を期す。何の世にも忘れ難きは、先帝の御面影、忘れんとすれ共忘れず、忍ばんとすれ共忍ばれず。只恩愛の道程、悲しかりける事はなし。されば彼の御菩提の爲に、朝夕の勤怠る事侍はず。是れも然る可き善知識と覺え侍ふと申させ給へば、法皇仰せなりけるは、夫れ吾が國は粟散邊土なりと云へ共、忝くも十善の餘薫に答へ、萬乘の主となり、隨分一つとして心に叶はずと云ふ事なし。就中佛法流布の世に生れて、佛道修行の志あれば、後生善所、疑有るまじき事なれば、人間の化なる習ひ、今更驚く可きは候はね共、御有様見參らせ候ふに、爲方なうこそ候へとて、御涙せきあへさせ給はず。女院重ねて申させ給ひけるは、我が身平相國の女として、天下の國母と成り

禮、後生善所(法華經)拜禮の春の始二拜禮は朝拜の儀二朝賀もしくは小朝拜をいふ二色々の更衣二月及び十月の朔日に更衣す二佛名の年の暮二十二月十九日か二ら三日間禁中二で佛名經をよみ二年中の罪をほら二ふ二日せす二も一定せず二南殿の櫻二梅樹也、桓武天皇遷都之時所被植也、後櫻あり二九夏三伏の熱二日は二九夏三伏の暑月二竹含錯之暑月二雪之寒朝、松影漢期詠集二十日を九夏とい二ひ二六月第一とい二第二、第三の庚

しかば、一天四海は皆掌の儘なりき。されば拜禮の春の始より、色々の更衣、佛名の年の暮、攝録以下の大臣公卿に、持て成されし有様は、六欲四禪の雲の上にて、八萬の諸天に圍遶せられ侍ふらん様に、百官悉く仰がぬ者や侍ひし。清涼紫宸の床の上、玉の籬の内にもてなされ、春は南殿の櫻に心を留めて日を暮し、九夏三伏の熱き日は、泉を掬んで心を慰み、秋は雲の上の月を、獨見ん事を宥されず、玄冬素雪の寒き夜は、裙を重ねて暖かにす。長生不老の術を願ひ、蓬萊不死の薬を尋ねても、只久しからん事を思へり。明けても暮れても、樂み榮え侍ひし事、天上の果報も、是には過ぎじとこそ覺え侍ひしか。さても壽永の秋の始め、木曾義仲とかやに恐れて、一門の人々、住馴れし都をば、雲井の餘所に顧みて、故郷を燒野が原と打詠め、古へは名をのみ聞きし、須磨より明石の浦傳ひ、さすが哀れに覺えて、晝は漫えたる大海に、浪路を分けて袖を濡し、夜は州崎の千鳥と共に泣明す。浦々島々よし有る所を見しか共、故郷の事は忘れず。かくて寄る方無かりしは、五衰必滅の悲とこそ覺え侍ひしか。凡そ人間の事は愛別離苦、怨憎會苦、四苦八苦共に、

の目を三伏といふ。五衰必滅の悲二終時、先有二種小衰相二略復有二五種大衰相二現、一者花萎、二者衣染、三者氣入、四者息入、五者不樂、本座、此五相現、必定當死二四苦八苦二別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦二餓鬼道の苦二由彼積集感、千歳、不聞、水名、豈能得見、況後得觸二沙論二修羅の闘諍二帝釋、何故常與、沙云、修羅有美、女、而無好食、

一つとして我が身に知られて、残る所も侍はず。さても筑前の國太宰府とかやに著いて、少し心を延べしかば、維義とかやに、九國の内をも追出され、山野廣しと云へ共、立寄り住むべき所もなし。同じ秋の暮にも成りしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、八重の汐路に詠めつゝ、明し暮し侍ひし程に、神無月の比ほひ、清經の中將が、都をば源氏が爲に攻落され、鎮西をば維義が爲に追出さる。網にかゝれる魚の如し。何くへ行かば遁る可きかは、存へ果つべき身にも非ずとて、海に沈み侍ひし。是ぞ憂き事の始めにて侍ひしか。波の上にて日を暮し、船の中にて夜を明す。貢物もなければ、供御を備ふることなく、適々供御を備へんとすれ共、水無ければ參らず。大海に浮むといへ共、潮なれば飲む事なし。是れ又餓鬼道の苦とこそ覺え侍ひしか。かくて室山・水島二箇度の軍に勝ちしかば、一門の人々、少し色なほつて見え侍ひしかば攝津の國一。谷とかやに、城郭を構へ、各々直衣束帯を引替へて、鐵をのべて身に纏ひ、明けても暮れても、軍よばひの聲の、絶ゆる事も無かりしは、修羅の闘諍、帝釋の諍も、是には過ぎじとこそ覺え侍ひしか。一。谷を攻

藏王權現 金峯
山の金剛藏王 善
薩。藏上人 延喜
日藏上人 道賢と
頃の僧。寶物集と
いふ。享釋書等
訓抄元 享釋書等
参照

ひ侍ひつれば、龍畜經に見えて侍ふ、後世能く／＼弔はせ給へと、申すと覺えて夢醒めぬ。其の後は彌々經讀み念佛して、かの御菩提を弔ひ奉る。是れ偏に六道に違はじとこそ覺え侍へと申させ給へば、法皇仰せなりけるは、異國の玄奘三藏は、悟の前に六道を見き。我が朝の日藏上人は、藏王權現の御力に依つて、六道を見たりとこそ承れ。親子御覽せられけるこそ、有り難う候へとぞ仰せける。

昭和九年一月廿三日 印刷
昭和九年一月廿三日 發行

定價金七拾五錢

編纂者 阪口玄章

發行者 和利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 吉原良三
東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七番地

印刷所 康文社印刷所
東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七番地

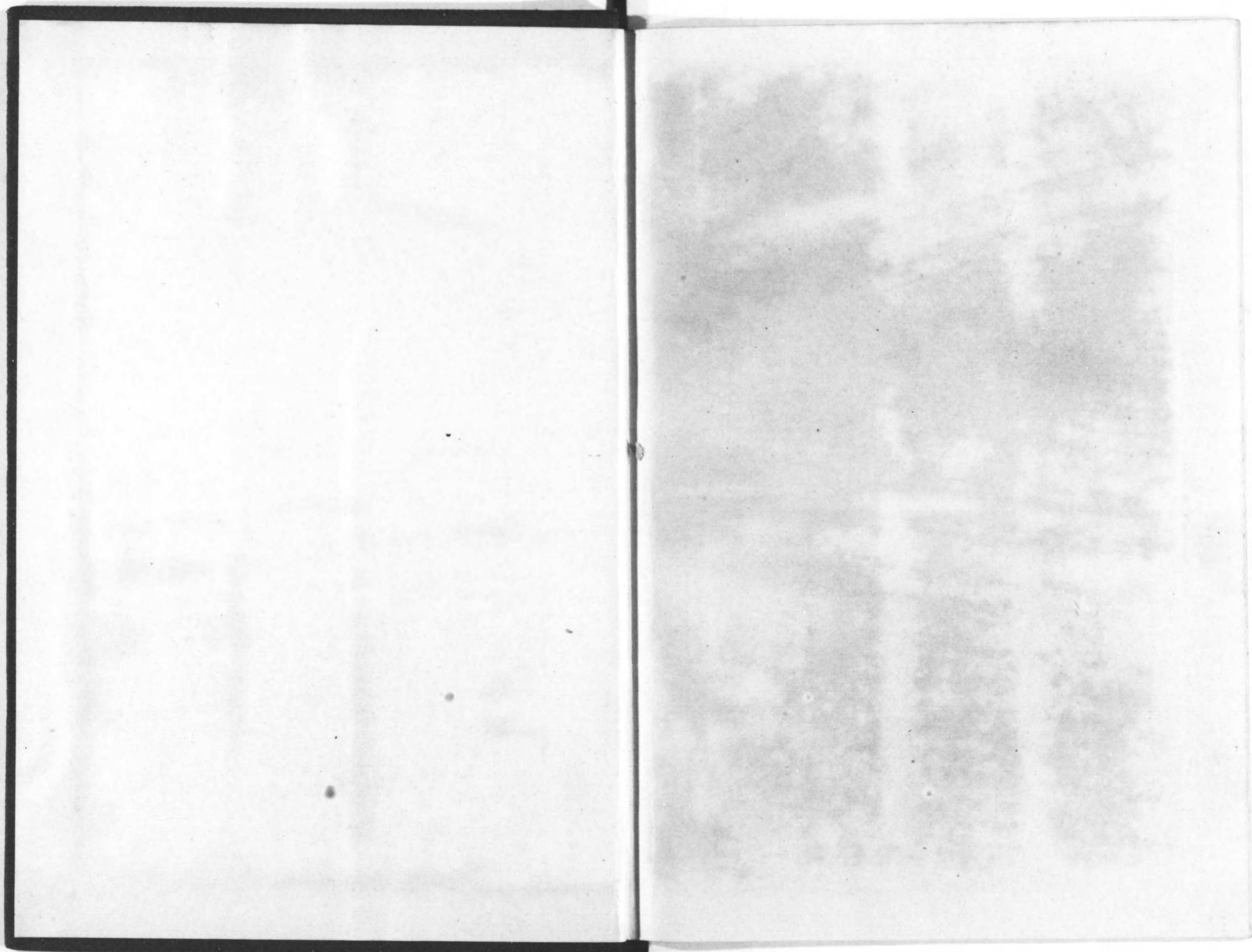
不許複製



發兌

東京市日本橋區通三丁目
振替口座東京一六一七番
電話日本橋五一・六四一番

株式會社 春陽堂



終